

柄原岩陰遺跡発掘調査報告書

—昭和58年度—

1984

長野県北相木村教育委員会

柄原岩陰遺跡発掘調査報告書

—昭和58年度—

1984

長野県北相木村教育委員会

はじめに

文化庁の昭和58年度文化財保存事業費補助金の交付をうけた重要遺跡確認調査として、本村が昭和58年10月27日から11月7日まで柄原岩陰遺跡の発掘を再開し、その成果をこの報告書に集成して公刊できたことを誠に喜ばしく存じます。

本遺跡の発掘には、信州大学医学部第二解剖学教室を中心となり、昭和40年12月から計15回、のべ81日間、参加者総数のべ4,000人近くを投入し、西南端の岩陰を中心に第一期調査を実施した歴史があります。一連の発掘調査の成果は略報・概報により関係する全国的な学会等に、あるいは新聞記事により特に県内各方面に、広く知られるようになりました。その結果、本遺跡が約一万年前の日本の文化を知る上で、非常に重要な可能性が極めて高いことが一般に認識されるにいたりました。しかし、大規模な第一期調査全体に関する本格的な報告書を作成できない状態が現在までつづっています。

本村としては、従来から信州大学医学部第二解剖学教室の本遺跡発掘関係者に、第一期調査での出土遺物等資料を整理し、本格的な報告書を刊行するよう再三懇請してきました。また村独自の企画として、全国的に類例をみないほどの豊富な出土遺物を保管・展示する資料館を建設して、日本の先史文化研究と地域社会の文化発展とに資すべき計画を練ってきました。今回の発掘調査と当報告書の刊行が、この大きな目標を実現する上での第一歩であることを祈ってやみません。

末尾ではありますが、昭和58年度の調査団団長の大任を快く御引受け頂いた立教大学菅原志勢教授、調査員の中心として発掘を精力的に指導頂いた信州大学大參義一教授はじめ、信州大学教官および全国各地から御参加下さった調査員の先生方、寒さのなかで発掘作業に参加した信州大学人文学部の学生諸君および作業員諸氏に深い感謝の意を表すとともに、本調査に終始協力下さった地元柄原区民の皆様、とりわけ発掘期間前後の作業に御協力下さり、発掘中にも様々な便宜を供与して下さった渡辺環司氏および株式会社渡辺組の皆様に御礼申し上げます。

昭和59年3月31日

北相木村教育委員会

教育長 井出 基一郎

例　　言

1. 本書は、国庫補助事業として昭和58年10月27日から同11月7日までの12日間にわたり実施した、南佐久郡北相木村大字柄原字東柄原277番地に所在する柄原岩陰遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は以下の調査員によって編成された調査団が実施した。

番　原　志　勢（團長：立教大学一般教育部教授）

（以下アイウエオ順）

相　見　　満（京都大学靈長類研究所助手）

江　原　昭　善（京都大学靈長類研究所教授）

大　參　義　一（信州大学人文学部教授）

梶　田　澄　雄（岐阜大学教育学部教授）

木　下　　実（京都大学靈長類研究所技官）

佐々木　　明（信州大学人文学部助教授）

徳　松　正　廣（岐阜県立博物館学芸員）

西　沢　寿　晃（信州大学医学部助手）

宮　尾　嶽　雄（愛知学院大学歯学部教授）

3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章　　　　　　　　西　沢・佐々木

第2章　　　　　　　　徳　松

第3章　　　　　　　　徳　松・大　參

第4章　　　　　　　　宮　尾・相　見・西　沢

まとめ　　　　　　　　大　參

全体の編集には大參があたり、梶田が測量図を作成し、発掘現場での写真撮影を木下が担当した。なお、挿図作製には名古屋市博物館川合剛学芸員に協力頂いた。

目 次

例 言	i
挿図目次	iii
表 目次	iii
図版目次	v

第1章 柄原岩陰遺跡の調査研究経過

第1節 1965—1969	2
第2節 1970—1973	4
第3節 1974—1978	6
第4節 1979—1982	7

文 献 目 錄

第2章 層序と遺構

第1節 層 序	15
第2節 遺 構	16

第3章 出土遺物

第1節 土 器	19
第2節 石 器	35
第3節 骨角牙製品	40

第4章 動植物遺存体

第1節 植物遺存体	43
第2節 動物遺存体	44

ま と め	61
-------	----

擇 図 目 次

図 1・1 遺跡地形測量図	(折込み)
図 2・1 トレンチ南壁・北壁・東壁層序図	15
図 2・2 1号炉跡実測図	17
図 2・3 配石状遺構実測図	17
図 2・4 第20層配石状遺構・第19層焼土面実測図	17
図 2・5 1号炉跡内出土土器拓本	18
図 3・1 第1層出土土器実測図	19
図 3・2 第2層出土土器拓本	20
図 3・3 第3・4・8・9・10層出土土器拓本	21
図 3・4 第11・14・16層出土土器拓本	24
図 3・5 第19層出土土器拓本	26
図 3・6 第20層出土土器拓本(1)	27
図 3・7 第20層出土土器拓本(2)	28
図 3・8 第20層出土土器拓本(3)	29
図 3・9 第23層出土土器拓本	32
図 3・10 搾乱層出土土器拓本	34
図 3・11 出土石器実測図(1)	36
図 3・12 出土石器実測図(2)	38
図 3・13 出土石器実測図(3)	39
図 3・14 骨角牙製品実測図	41
図 4・1 植物遺存体	45
図 4・2 貝類の遺存体	45
図 4・3 遺存骨・歯(1)	46
図 4・4 遺存骨・歯(2)	46
図 4・5 イノシシの遺存骨・歯	47
図 4・6 シカの遺存骨・歯	48

表 目 次

表 3・1 出土石器一覧表	37
表 4・1 植物遺存体の出土状況	43
表 4・2 出土骨片の重量	44
表 4・3 小動物の出土状況	49
表 4・4 シカ、イノシシを除く哺乳動物の出土状況	51
表 4・5 イノシシの主要骨の出土状況	54
表 4・6 イノシシの歯の出土状況	54

表4・7 シカの主要骨の出土状況.....	56
表4・8 シカの歯の出土状況.....	56
表4・9 シカ長管骨の年令群別出土数.....	57

圖 版 目 次

1. a	遺跡遠景(東南方向から)	63
b	遺跡近景(東南方向から)	63
2. a	発掘調査風景.....	64
b	動植物遺存体選別作業風景.....	64
3. a	トレンチ北壁断面.....	65
b	トレンチ北壁断面(部分)	65
4. a	1号炉跡(直上から)	66
b	1号炉跡(東南方向から)	66
5. a	獸骨出土状態.....	67
b	石器出土状態.....	67
6. a	鹿角製品出土状態(1).....	68
b	鹿角製品出土状態(2).....	68
7. a	土器・鹿角出土状態.....	69
b	鹿角出土状態.....	69
8. a	第1層出土土器.....	70
b	第2層出土土器(1).....	70
c	第2層出土土器(2).....	70
9. a	第3・4・8・9・10層出土土器.....	71
b	第10層出土土器.....	71
10. a	第11・14層出土土器.....	72
b	第16層出土土器.....	72
11. a	第19層出土土器.....	73
b	同上裏面.....	73
12. a	1号炉跡内出土土器.....	74
b	同上裏面.....	74
c	第20層出土土器(1).....	74
13. a	第20層出土土器(2).....	75
b	同上裏面.....	75
14. a	第20層出土土器(3).....	76
b	同上裏面.....	76
15. a	第20層出土土器(4).....	77
b	同上裏面.....	77
16. a	第23層出土土器.....	78
b	同上裏面.....	78
17. a	擾乱層出土土器(1).....	79
b	同上裏面.....	79

18.	a 櫻亂層出土土器(2).....	80
	b 骨角牙製品.....	80
	c 鹿 角.....	80
19.	a 出土石器(1).....	81
	b 同上裏面.....	81
20.	a 出土石器(2)——蔽石(左)・凹石(右).....	82
	b 出土石器(3)——石鑽.....	82

-  調査区域
-  ひきし部分
-  等高線 (m.)
-  基盤と堆積物の境界
-  天井の高さ (0 m基点より)
4.0

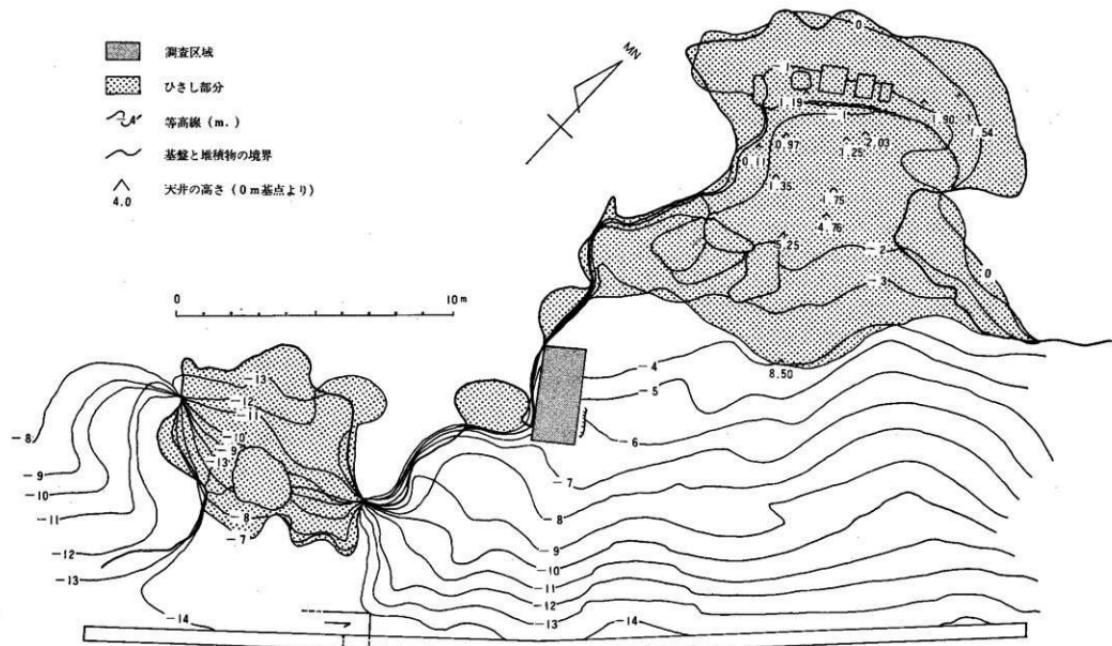


図1・1 造跡地形測量図

第1章 柄原岩陰遺跡の調査研究経過

本遺跡では西南端の岩陰（図1・1）を中心にこれまで15回の発掘調査がなされ、研究史も17年間におよぶ。後述するように、これまでの発掘調査では報告書が刊行されなかったから、調査研究経過を概観的に述べた文献が全くないので、当報告書を刊行するにあたり、上記の長い調査研究経過を概観する必要がある。この記事が通常の発掘報告書の調査研究経過記事に比して著しく長いのはこの特殊事情による。また、現在進行中の第15次以前の調査での出土遺物等の資料の整理を迅速ならしめるためにも充実した調査研究経過の記載が不可欠である。調査研究経過の復原にはやや迂遠ではあるが、本遺跡関係の文献資料を網羅的に利用する方法をとった¹⁾。

15回・17年にわたる調査研究経過を連続的に記述すると理解しにくいので4期にわけた。まず調査を実施しなかった1979—1982²⁾を分離し、次に全国誌に文献を発表した1970—1973を前後の期間から分離して、1965—1969、1970—1973、1974—1978、1979—1982の長さのほぼ等しい期間に分割して記述することとした。以下ではまず各期間に公表された文献について略述し、その後に各期間の調査研究過程を略述する。なお経過の大まかな把握、特にこの期間区分については小松虔³⁾の追悼記事（anonym, 1980）を参考とした。

第1の期間（1965—1969）には16点の文献がある。うち7点は『信州ローム』No.9〔「柄原遺跡特集」〕（小松他, 1966）に含まれ、他は発掘調査の略報（3—7次）⁴⁾3点と学会研究発表要旨3点及び新聞記事1点である。いずれも短かく、新聞記事以外をすべて加えても30ページに満たない⁵⁾。この期の主要な著者は鈴木誠他の信州大学医学部第二解剖学教室関係者⁶⁾と小松を中心、同大(文)理学部地質学教室関係者を加えた構成である。この期間を特徴づけるのは全国学会での鈴木・香原志勢連名の研究発表である。1966.10.5・6の第21回日本人類学会日本民族学会連合大会2件（鈴木、香原, 1967）、1967.2.1の第73回日本解剖学会（鈴木、香原, 1968）での研究発表に加え、1967.6の日本人類学会例会での鈴木単独の研究発表（鈴木, 1968）がある。

第2の期間（1970—1973）には、全国誌掲載文献3点（記事2点、論文1点）と『柄原新聞』を利用できる。1970の紹介記事（小松他, 1970）は、本報告書の略報の機能を有し、1983調査区域よりも南西側で行った第一期調査の概要を理解するのに舒適である。11・12号人骨に関する論文（香原他, 1971）は、比較的浅い部分から密集して出土した人骨群についての論文（西沢, 1978）が発表されるまで、本遺跡出土人骨に関する唯一の論文だった⁷⁾。『どるめん』掲載記事（香原他, 1973）は座談会記事だが、38ページにわたり示唆に豊富な発言を多くのせるほか、発掘調査が一応終了したとみていたこの段階で整理した表等にみるべきものが多い。これら三点の文献の著者は鈴木他の信州大学医学部第二解剖学教室関係者と小松に、信州大学理学部関係者が加わり、総括的報告書作成の組織が整備されていたことを理解できる。『柄原新聞』はこの期間の調査（第9～11次）中およびその前後に計17回⁸⁾発行された譜写印刷物である。「…[本遺跡発掘調査の各時点]における内容の検討、論考[を]…発表する場を得なかつた」ので、「今後の調査…の指針」とする（『柄原新聞』No.1, 1970.6.6）のがこの新聞の発刊の目的だった⁹⁾。第1の期間の特に後半の発掘調査では略報すら発表されず、調査参加者の一部にすら本遺跡の全体像と作業の意味

を理解しにくい状況が生じる事態に対応する目的でこの新聞を発刊したことがわかる。予想外の事態の連続で本格的な報告書作成が遅滞している現段階で、この新聞を再び資料として用いざるをえないのは反省すべき事態である。

第3の期間（1974—1978）の5文献のうち3文献は考古学的である。この期間の最も重要な著者は小松で、1977・1978に2論文を発表し、さらに西沢寿晃・新村薰¹⁰⁾との連名記事を1977に発表した。西沢の人骨関係論文（西沢、1978）と藤田敬の貝類関係記事（藤田、1977）がこの期間の非考古学的文献である¹¹⁾。両者とも本遺跡関係文献の中で注目され、特に前者は重要である¹²⁾。

第4の期間（1979—1982）の5つの文献はすべて自然遺物（出土哺乳動物相）に關係する。この期間の主要な報告者は宮尾嶽雄と西沢である。両名のみの論文（1981）の他に一名を加えた論文（宮尾他、1980, 1982; 宮尾・酒井・西沢、1981）と学会研究発表（宮尾・子安・西沢、1981）がある¹³⁾。上記5文献のうち、1980の第一報が出土哺乳動物相の総論で、1981以降の4点が種別の各論を構成する。これらの文献には、本遺跡の他の文献群に比して、体系的記述の色彩が強い。この他に既存文献をまとめた長野県史の記事（西沢、1982）がある。

この小論では本遺跡の調査研究経過を発掘調査の有無と関係文献の性格により設定した4つの期間にわけて記述するが、この4分法による記述に入る前に、発掘調査の性格により全体を二つ（前半期1965—1971、後半期1972—1982）に分割して簡単に述べ、理解を助けたい。

前半期の発掘調査には、鈴木と小松を中心に信州大学医学部第二解剖学教室・同文理学部地質学教室関係者が調査員として終始参加した。前半期の主要な発掘目標は遺跡西南端の約6m四方の岩陰（図1・1）に設定した第I～IV区を堆積底部まで掘り下げて、この部分の全容を把握することだった。第1次調査では遺物包含層底部を極めて浅くみていたが、第2次調査以降では当初の見込みちがいから包含層厚を大きく見積もる傾向が生じ、底部を正確に確認できたのは第8次調査時だった。包含層底部確認後は関係文献も急増し、発掘調査の具体的経過をたどれるようになる。つまり、包含層底部の位置認証を意識してから第8次調査までの関係文献は極端に少なく、文献による調査研究過程の復原は困難を極めた。

後半期には前半期の調査組織が次第に解体した。早くも1970に香原が転出した上に、1972以降は理学部地質学教室の組織的参加が困難になり、ついで1973には鈴木が逝去し、さらに1978には小松が急死して、本遺跡の発掘調査組織は消滅した。後半期の本遺跡発掘としては1974—1978の小松・西沢による調査があるのみで、あえて加えれば1971・1972年の鈴木・小松の周辺2遺跡の発掘をあげる程度である。後半期を積極的に評価するには、この期を前半期調査で集積した資料の分析研究段階とみる必要がある。宮尾・西沢等による一連の文献を念頭におき、後半期には、本遺跡の発掘調査の成果を単一の総合報告書にまとめるかわりに、各分野の調査員研究者が少しづつ部分的な報告書を発表し、何年か後には多数の短かい報告書が集積して全体としてしきるべき総括的報告を構成するようになると期待も可能であろう。

第1節 1965—1969

第1の期間（1965—1969）は本遺跡の発見から第8次調査に至る期間である。この期間の発掘の中心は鈴木と小松で、信州大学医学部第二解剖学教室と（文）理学部地質学教室¹⁴⁾の関係者が調査員として参加し、さらに第3次以降は東京経済大学地学ゼミナールが参加した。この期間には

ほぼ年二回（4月または5月と、7月または8月）の調査を実施し、調査日数は一回につき第8次の8日を最高に5～6日だった。

この期間の発掘調査を3つに細分できる。まず発見から第1次調査までは、遺物包含層厚を基準地表面から200cmを著しく越えないものとみこみ、比較的薄い包含層を短期間で発掘しあわるとの見通しに立って発掘を始めた。つまり、第2次調査以前の1966前半までの関係文献の記述は、本遺跡の全容を近い将来には解明できるだろうとの予想に立ってなされた。ところが第2次調査からは、当初包含層底部とみられた部分の下にも遺物があり、包含層の「底をきわめるにいたっていない」（鈴木・番原、1968：p88）ことを認めざるを得ない状況になった。この状態は第7次調査前までつづく。ただし、第2次調査から第7次調査までに発掘した-110～-410cmの部分からの出土遺物の性格を、11・12号人骨を含め、基本的には第1次発掘の内容と同一とみなしうると考えたので、遺跡の全体像を再検討する必要は強く感じられなかった¹⁵⁾。第3の細分期間は作業が下部（以下-200cmまでを上部、-200～-400cmを中部、-400cm以下を下部とよぶ）¹⁶⁾に到達する第7・8次発掘である。下部からは縄文時代早期の多様で大量の遺物が発見された。本遺跡の例外的に厚い遺物包含層全体が縄文時代の早い時期に堆積しただから、その包含層を上から掘り下げれば、まず縄文時代の早い時期のなかでは比較的遅い時期の遺物が出土し、次に次第に掘り下げるのに従って縄文時代の早い時期の初期の時代の遺物が出土し、最後に縄文時代の早い時期では最も早い時代の遺物が出土するはずだから、第7・8次調査での出土遺物の解釈上の大きな障害はなかった¹⁷⁾。下部の発掘により本遺跡が誤りようのない縄文早期の大遺跡であることが判明したので、調査活動は第2の期間の活発な様相へと移行した。

本遺跡の発見は1965.11.23の新村と旧石器時代人骨発見に強い関心をもっていた奥水利雄との人骨発見を期待した相木旅行による（奥水、1966：p5）。本遺跡地点から人骨を発見できることは早くから知られていた¹⁸⁾が、考古学的遺物が人骨に伴出することは意識されていなかった。11.23の旅行で本遺跡から人骨と押型文が出土することを確認し、1号人骨の頭蓋骨等の若干の遺物を採集して（西沢、1966：p6）両名は帰宅した。翌11.24に両名は信州大学医学部第二解剖学教室と松本市立博物館に人骨、押型文土器の出土を連絡した。連絡をうけた小松と第二解剖学教室は翌11.25から検討を重ね、11.29に現地視察に向い、人骨の埋蔵を確認した¹⁹⁾。視察からもちかえた1号人骨の頭蓋骨をみて鈴木が直ちに早期縄文時代人骨と判断した（鈴木、1966：p12）。12.1以降には信州大学（文）理学部地質学教室との協同が具体化し、第2の期間までつづいた。12.9・10に予備調査を実施し、押型文土器と1・2号人骨を次々に発見した。しかし人骨が密集し、予想以上の遺物があるので現場を保存し、それ以上の発掘を本格調査で行うこととした。

第1次調査は12.15～18の4日間実施し²⁰⁾、小松・医学部第二解剖学教室・（文）理学部地質学教室の他に発見者2名を含む長野県考古学会関係者が参加した。この調査は本遺跡発掘では他例をみない厳寒期に実施され作業は困難を極めたが、1～6号人骨・押型文土器等の資料を比較的短期間に収集した。この調査の成果は『信州ローム』特集号（小松他、1966）に掲載された。小松の考古学的略報は遺跡平面図とともに上部のみではあるが断面図も掲載する（小松、1966：p11～13）²¹⁾。この他に骨角製装飾品3点に関する記事（鈴木・西沢、1966：p13）、-100cm附近（小松・西沢、1966：p2）のサンプルを分析した古磁気学的略報（百瀬、1966：p14～15）²²⁾が注目される。人骨に関する記事（鈴木、1966）は学会研究発表記事よりもさらに簡略である。小松の上記断面図と郷原保真の地質学的記事（郷原、1966：p7）から、第1次発掘には上部のみが遺物包

含層とみなされていたことを確認できる²⁰⁾。

第2次調査は1966.5.12—17の6日間実施した。この調査の略報またはそれに準ずる文献はないが、第3次調査終了後の鈴木・香原連名の学会研究発表（鈴木・香原、1966）の記載内容から第1次調査に関する報告内容と第3次調査略報（小松、1967a）の内容を除いて、この調査の概要を把握できる。この調査では第I—IV区を-110cmまで²⁰⁾掘り下げた。新しい遺物の発見以上に、前回調査で遺物包含層底部とみた部分以下にも包含層を確認した点が特に重要である。

第3次調査は1966.8.10—14の5日間実施した。この調査には略報（小松、1967a）があり、鈴木単独の学会研究発表（鈴木、1968）がこれに準ずる。この調査では西南端の約6m四方の岩陰のみに遺跡が限定されるとして²¹⁾、既に遺物包含層の存在が判明していたこの岩陰の西端に発掘を拡大し、-100～-230cmの間を掘り下げた。

第4次調査は1967.4.20—24の5日間実施した。この調査の略報が（小松、1967b）である。この調査では1983調査区域に西南接する小岩陰およびそのテラス（図1・1）に第V区を設けて発掘面積を拡大し²²⁾、第I—IV区を-200cmから-300cmまで掘り下げた。特に西南岩陰東端では最大17cmに堆積する灰層²³⁾と他遺物の出土状態との間の矛盾がみられること、本遺跡の定住的使用と利用年代に検討の余地があることを小松が指摘した。

第5次調査は1967.7.22—28の7日間実施した。この調査の略報に準ずるのが鈴木・香原の連名での学会研究発表（鈴木・香原、1968）で、この他に人類学雑誌掲載論文（香原他、1971: pp 55・56)・鈴木の略報（鈴木、1969: pp5・6）に言及がある²⁴⁾。この調査では第I—IV区の-300～-410cmの部分、第V区の-220cmまでの部分を発掘し、第I—IV区からは土器破片を用いた灰層縦縫構造、第V区から1号人骨²⁵⁾を発見した。この調査の重要な発見は、第I—IV区の大落石下からの幼児人骨（11・12号人骨、-395cm）の発見で、大落石を破碎してこの人骨をとりあげるために11月に補充調査をした。この調査までにC¹⁴による年代測定結果が判明した²⁶⁾。

第6次調査は1968.5.16—20の5日間実施した。この調査の略報的記事は鈴木の第4次調査の略報末尾（鈴木、1969:p6）にみられるのみである。この調査では第I—IV区の-400～-460cmの部分を発掘した。遺物の豊富な下部に入り、すぐれた骨角器が出土しはじめた。

第7次調査は1968.7.25—30の6日間実施した。この調査の略報的記事も鈴木の第4次調査の略報末尾にみられるのみである。この調査では第I—IV区の-460～-480cmの部分を発掘した。土器・石器・骨角器・炉址・獸骨など大量の遺物・遺構を発掘し、本遺跡の全体像を修正する必要性が意識されはじめた。

第8次調査は1969.5.13—20の8日間実施した。この調査の略報的記述は小松の署名入り新聞記事（小松、1970.3.12）しかない。この発掘では-480～-500cmの部分を発掘し、表裏網文・撚糸文土器を主体とする網文時代早期の遺物が大量に出土した。

第2節 1970—1973

第2の期間（1970—1973）は第9次から第11次までの発掘調査を実施した期間である。ただし、本遺跡の調査はこの期間の前半で終了し、この期間の後半には関連遺跡の発掘調査を実施した。この期間の調査活動の中心も鈴木と小松で、信州大学医学部第二解剖学教室・同理学部地質学教室関係者が調査員として参加した。この期間には第二解剖学教室と地質学教室とが桜原遺跡展を開催する²⁷⁾など、活発な調査研究活動を行った。この期間の調査により第I—IV区の発掘が

遺物包含層底部の砂層に達し、さらに底部砂層を試掘することにより、1965.12に始まった一連の調査が完了した。しかし、第9次調査の最終日に鈴木が急病で倒れ、退院後も入院以前のように精力的には発掘調査を指導できなくなったことが、本遺跡の調査研究全体を著しく遅滞させる主要因となった。

鈴木は健康の悪化にもかかわらず、小松とともに1971.8に北相木村宮の平、1972.7に南牧村志などの入でそれぞれ発掘調査を実施した。二つの発掘調査は、第10次調査末に企画した第二期調査の一部をなす予定だった。第二期調査の主要な項目は、(a)第10次調査³³⁾までの発掘の成果を5年間の大調査にふさわしい報告書にまとめる、(b)第I-V区の隣接地区の発掘調査を進めること、(c)相木川岩陰遺跡群³⁴⁾等の周辺地域の考古学的遺跡の分布調査、の3点だった(『柄原新聞』No.10 1970.10.21)。鈴木はまず(c)に着手し、人骨と縄文時代の早い時期の遺物が出土する遺跡を選んで第二期調査を開始した。しかし、健康上の障害が増大して調査活動を中断せざるを得なくななり、さらに1973.4.22に食道静脈破裂により鈴木が逝去して、この方向での発展は途絶した。次の第3の期間での小松・西沢の発掘調査は(b)を選択した展開だった。

第9次調査は1970.6.11-15の5日間実施した。この調査の略報機能をもつのは小松³⁵⁾他 の記事(小松他、1970)と『柄原新聞』No.1-5(1970.6.11-6.15)である。調査期間中天候にめぐまれず、発掘は第I-V区の-490~-520cm部分を掘って終了した³⁶⁾。調査参加者は信州大学医学部第二解剖学教室・理学部地質学教室関係者と小松を主要な調査員とし、これに東京経済大学地学ゼミナール、信州大学教育学部・農学部、東海大学等の学生、さらに県内高校生が参加する構成だった³⁷⁾。調査の最終日に鈴木が急病で入院し、この調査が鈴木の終始指導した最後の発掘になった。この発掘開始時には遺物包含層の底部砂層まで全面的に掘り下げ、掘り残した西南岩陰の最奥部(東北隅)を発掘する予定だったが、どちらの作業も完了しなかった。また最下層から神子柴型石斧・爪型文または細隆起線文土器、場合によっては先土器文化³⁸⁾終末相にたどりつくとの期待もあった(『柄原新聞』No.1 1970.6.6p3小松署名記事)が実現しなかった。この調査で発掘された遺物の中では、表裏縄文土器片・各種スクレーパー・各種骨針・角環使用炉址・各種歯骨(ニホンザル・ムササビ)が目立った。なお、この時点で中部の厚い堆積灰層が草木灰に由来することが始めて発表された³⁹⁾。

第10次発掘は1970.10.16-21の6日間実施した。この調査の略報にあたるのが『柄原新聞』No.6-No.11(10.15-22)である。特に調査開始前に準備したNo.6「特別号」の小松・西沢署名記事(小松・西沢、1970)は遺跡平面図・土器拓本・石器図を添付し、第1次調査後の『信州ローム』特集号掲載の小松記事(小松、1966)を凌駕する重要な記事である⁴⁰⁾。調査に参加した機関等は前回とはほぼ同様だが⁴¹⁾、人数は半減した。また入院加療中の鈴木にかわって池田次郎が参加した。この調査では第I-V区の-530mと底部砂層との間を発掘した。この調査でも前回と同様に当初は細石器の発見を期待したが出土しなかった⁴²⁾。この調査での出土遺物では、表裏縄文土器・各種石材の尖頭器様石器・大小骨角器・無脊椎動物遺物などが目立ち、特にベンガラを入れたカワシンジュガイの出土したのが注目された。当初計画した西南岩陰最奥部の発掘は次回にみおくった。

第11次調査は1971.7.12-18の7日間実施した⁴³⁾。この調査の略報に準ずるのが「(座談)縄文早期人の世界——柄原岩陰遺跡をめぐって——」(香原他、1973)と『柄原新聞』No.12-17(1971.6.29-7.16)である⁴⁴⁾。特に調査開始前に準備した『柄原新聞』No.12(「第2期発掘に

備え」6.29)には調査員署名の記事がある。そのうち中村登流の鳥類関係記事(中村, 1971)⁴⁵⁾、藤田の陸生貝類関係記事(藤田, 1971)⁴⁶⁾は、両分野に関する文献が他にはないので貴重である⁴⁷⁾。調査参加者は、地元高校生の参加した7.13を除き、20名前後で、関係機関も第10次調査とほぼ同様だった。鈴木は調査終了近くになって参加した。この調査では第I—IV区の底部砂層にわずかに残った遺物包含層を掘り下げ、砂層にトレンチをいたれた⁴⁸⁾。また西南岩陰最奥部⁴⁹⁾を発掘した。出土遺物では各種スクレーパー・尖頭器等の石器類が目立った。

『どるめん』掲載の座談会記事(番原他, 1973)は、その形式からは学術論文と認め難いが、掲載誌の性格から内容が整備されていて、第11次調査終了時での本遺跡の全体像を理解するのには好適である⁵⁰⁾。以下にこの段階で座談会に参加した調査員が注目していた項目のうち、特に本遺跡の全体像に関係するもののみを略述する。まず、遺物包含層がC¹⁴年代測定による推定堆積期間に比して不均衡に厚い印象を与えることを指摘している(*ibid*, p137)⁵¹⁾。遺構では下部の炉⁵²⁾が中上部と異なるとの指摘がある(*ibid*, p158)。遺物のうち土器については、押型文・捺糸文の出土状態等に通説と大きく矛盾する点がある(*ibid*, p138)⁵³⁾。上中部の石器が一般に大きいのに対し、下部には正三角形石鏃・サムスクレーパーなどの小型石器が多い(*ibid*, pp141, 143)⁵⁴⁾。気温はやや暖かだったと考えていた(*ibid*, pp147, 148)⁵⁵⁾。遺跡全体の性格については、骨針等の骨角器が非常に豊富で(*ibid*, p143)釣針の製作過程が判明する(*ibid*, p145)ほど漁撈用骨角器が多いのに、魚類遺物が少ない(*ibid*, p149)ことから、この種の道具を自用量以上に生産していた可能性があるとの指摘(*ibid*, p165)⁵⁶⁾がある。以上の指摘について総合的に考察すれば、今後の調査研究に資する所が多いと考えられる。

第3節 1974—1978

第3の期間(1974—1978)は第12次から第15次までの調査を実施した期間である。これら一連の調査では小松と西沢が中心となり第V区を発掘した。4回の調査のうち、最初の第12次と最後の第15次がやや長く、中間の第13・14次は試掘的調査だった。第16次以降の調査計画があったが、小松の急死により中断した。この期間に先行する1972・1973、期間中の1976に発掘調査がなく、調査期間が短かったことも考慮するとこの期間の発掘調査はやや低調だった。しかし、第2の期間まで調査を指導した鈴木の逝去にともなう発掘組織の縮少後の再出発だったことを考えれば、多少規模は小さくても発掘調査を継続したことを評価すべきである。また第V区以東の岩陰に遺跡が続くことを明確に認識し、第2の期間と1983調査の結節点となつた点でも、この期間の発掘調査は重要である。この期間の調査報告書も小松の事故死により作成されなかつたから、4回の発掘に関する記述は略報的なものに限られる。しかも略報に準ずる記載のあるのは、本格的な第12次発掘後的小松の論文(小松, 1977)のみである。第V区以東の岩陰のもう意味を他に先駆けて明確に指摘した小松がその発掘計画を実現させ、熟知していた第I—IV区の考古学的知見と総合すれば、本遺跡の正確な全体像が現時点までに明らかになつたのは確実である。小松の急死は本遺跡の調査研究史上最大の損失の一つである。

第12次調査は1974.8.19—23の5日間実施した。この調査では第V区の—150～—240cm⁵⁷⁾部分を発掘した。この調査での出土押型文土器を第I—IV区の同種土器と比較したのが小松の論文

(小松, 1977) で、第Ⅰ-Ⅳ区にみられた格子目文が第Ⅴ区には欠如し、後者から出土した押型文土器が厚手であると述べている (*ibid*, p7)。この調査は、その後の本遺跡調査の方向を決定した重要な転換点となった。つまり、小松は「今迄調査された岩陰の部分〔第Ⅰ-Ⅴ区〕は、ここ〔1983調査区域を含む岩陰東半: 図1・1〕に形成されている岩陰全体よりすると、出店のような一部で〔岩陰東半分に〕何かの遺構と遺物がありはしないかと予測もできる (*ibid*, p6)⁵⁰ と述べ、第2の期間までには明瞭に言及しなかったより正確な本遺跡の全体像を控え目ながら的確に表現した点を重要視すべきである。

第13次調査は1975.9.11~14の4日間、小松・西沢が中心となって実施した。この発掘には試掘的な色彩が強かったが、第12次調査で発掘を完了したと考えた第Ⅴ区に新たな遺物包含層を確認した (小松他, 1977: p17)。この発見により第12次調査で予測した第Ⅴ区以東への遺跡の拡張がさらに確実になったと考えられた。

両名はこの調査の2年後に、第Ⅴ区周辺の本格的発掘計画立案のための試掘 (第14次発掘に相当) を1977.7.21に実施した。第13・14次調査とも小規模で、特に言及すべき遺物・遺構は発見されなかった。二回の調査の略報機能をもつ二文献 (小松他, 1977; 小松, 1978) は各々別の目的 (仮称相木式土器復原報告と本遺跡押型文土器・撚糸文・表裏繩文土器の先後関係考察) で書かれており、第Ⅴ区での新しい発見についての言及は特にない。

第15次調査は、小松・西沢が中心になり、1978.3.25~4.1に実施した。この調査は三回の調査によりその重要性が明らかになった第Ⅴ区の発掘を目的としたやや本格的なもので、調査期間も長かった⁵¹。しかし、小松が翌年急死したため、この調査の報告書の作成は不可能になった。

前述のとおり、この期間には注目すべき非考古学的文献が2点ある。一つは西沢の人骨関係論文 (西沢, 1978) である。第1の期間の出土人骨に関して鈴木他が既に断片的に発表した内容を中心に、若干の未発表周辺資料を加え、鈴木他の見解に従って整理した (*ibid*, p103) のがこの文献であり、第2の期間以降の新しい知見を加えていない。出土人骨を、(i) 密集してほぼ同じレベル (-150~ -200cm) から出土し、おおむね西向き⁵²に埋葬された成人人骨1-10号 (3・5号を除く), (ii) -395cm前後から出土した幼児人骨11・12号, (iii) 新生児骨3・5号の3グループに分類し、成人人骨について記述した。この論文では木灰層中に保存された⁵³人骨が、抱き石・履着⁵⁴などの定型化した埋葬様式を示すことを指摘し (*ibid*, p100), 特殊な使用による頗著な歯の過耗 (*ibid*, p101) など⁵⁵に言及して (*ibid*, p102), 本遺跡出土の成人人骨の全体像を明らかにした。もう一つの注目すべき文献は藤田の貝類関係記事 (藤田, 1977a・b) である。本遺跡で出土した10種の海水生貝⁵⁶・1種の淡水生貝・3種の淡水生貝・6種の陸生貝に言及し (藤田, 1977a: p12), 第Ⅰ-Ⅳ区の中部に集中する傾向のある最多出土種のカワシンジュガイ (*Margaritifera laevis*)⁵⁷についてやや詳しく述べた。

第4節 1979-1982

第4の期間 (1979-1982) には発掘調査を実施しなかった。第Ⅴ区以東の発掘計画が第3の期間にあったが、小松の急死により、発掘組織が消滅し、本遺跡の発掘調査を中断せざるを得なかつた。新しい出土遺物は収集できなかつたが、既に収集した出土哺乳動物相を対象とする宮尾・西沢等の研究文献、西沢の概要記事が発表され、本遺跡出土遺物の分析研究には進展がみられた。

特に前者は愛知学院大学歯学部と信州大学医学部の両第二解剖学教室の協同による⁶⁰⁾もので、当報告書の第4章と連続的である⁶¹⁾。

出土哺乳動物相関文獻の第1報（宮尾他, 1980）では、どの部分からも出土するシカが最も多く、-250cm以下のみから出土するニホンザルが本遺跡では特徴的であることを指摘した⁶²⁾。第2報（宮尾他, 1981）では、-250～-300cm部分に集中する傾向のあるアカネズミの出土下顎大臼歯が現生種よりも大きいことから本遺跡のC¹⁴年代に該当する時期の気候条件と関連すると指摘した。第3報（西沢・宮尾, 1981）では、ほぼ21頭分のニホンザルの頭蓋の破碎状態から脳を摘出し食用にしたことを指摘した⁶³⁾。本遺跡ではやや少ないイノシシの第一大臼歯がはっそりしていたことも指摘した（宮尾他, 1981）。また第4報（宮尾他, 1982）では下部に多量の出土をみるノウサギ四肢骨が現生種より全体に大型で、第2報のアカネズミ大臼歯と同じく、前述した気候と関連すると指摘した。

『長野県史』の記事（西沢, 1982）は、作成時点を利用できなかった宮尾他の4文献を除き、この小論作成に利用した文献のはほとんど全部⁷⁰⁾を参照しつつ作成した文献で、石器（66点）・骨角器（50点）・土器拓本（161点）⁷¹⁾等の挿図多数を加えて利用しやすい⁷²⁾。また岩陰利用の変遷（ibid, p581）と遺構・遺物の出土状況模式図（ibid, pp582, 583）は本遺跡の全体像をとらえる手がかりとして重要である⁷³⁾。

結 語

本遺跡の調査研究史上の特徴的な諸経験を以下の2点に要約できる。第一点は調査開始時点の判断とその後の展開との間の隔差が大きかったことである。当初の遺物包含層厚推定から、発掘調査に長期間を要しないと考え、調査の主要部分が既に完了したとみて、成果をまとめかけた。しかし、遺物包含層厚がこの種の遺跡としては例外的に厚いことが判明し、初期の学会研究発表等の内容とは必ずしも一致しない方向に展開した。遺跡全体像を把握しにくいままで発掘作業がつづき、その後の調査研究、特に本格的報告書作成を阻害する状況が生じやすかった。第二点は第11次調査終了後の展開が予期できない客観条件から極めて不充分なままに終ったことである。第2の期間に本格的報告書を近くまとめる旨の言及がくりかえされた（たとえば小松他, 1970: p7, 香原他, 1971: p55）が、鈴木・小松の相次ぐ逝去、研究室構成員の移動に加え、大学紛争期だったことによって、総括的報告書作成作業を中断せざるをえない事態となった。

今回の調査は前述の第二期調査での3つの重要な項目のうちの(b)を開始することを目的としていた。他の2項目のうち、実現がやや困難な(c)は将来の課題であるが、(a)第一期調査の報告書の作成については、現在進行中の整理作業ができるだけ早く完了して、しかるべき報告書を作成する必要がある。(a)・(b)二つの方向での調査研究を有機的に関連させつつ、本遺跡の全容を明らかにするのが第二期調査の最終的目標であり、今回の発掘調査と当報告書の作成はこの目標に到達するための第一步である。

（註）

1) この方法で網羅できない非文獻資料を第15次までの調査員各位に提供して頂き、第一期調査全体に関する本格的報告書に掲載すべき調査研究経過記事を作成する出発点とした。

単発文献に新聞記事等の必ずしも学術的とはいがたい記事をも含めたのは、調査によっては略報すら利用できない場合があり、また研究成果の発表がほとんどなされていない分野がある。新聞記事等に頼らざるをえないからである。また、第2の期間(1970—1973)の単発文献に『柄原新聞』(藤田敬氏所蔵)を利用せざるをえない実情が、商業新聞等の記事にまで文献収集範囲を拡大させた。ただし商業新聞記者は調査員の署名入り記事または記者が発掘現場を観察しながら調査員にインタビューしたとみられる記事に限定した。

- 2) 以下すべて西暦を用い、「年・月・日」を略す。
- 3) 敬称はすべて略す。初出の場合のみ姓名を記し、それ以降は姓のみを記す。
- 4) 「『柄原遺跡特集』」(小松他, 1966)は事実上第1次発掘の報告書である。第3・4次調査について小松が個別の略報(小松1967a, b)を発表し、調査開始当初には発掘毎に少なくとも略報を作成した。しかし第5—7次調査は鈴木の第1—4次分略報末(鈴木, 1969: pp5-6)につき加えられたのみで、それ以降も略報を表題の一部とする文献はない。
- 5) 鈴木の雑誌記事(鈴木, 1968)と略報(鈴木, 1969)は内容が重複するので、これを考慮すると、総計25ページに満たない。
- 6) このうち単独著者は鈴木のみである。
- 7) 貴重な文献であり、内容には関係ないが調査次数の錯誤がある(香原他, 1971: p55)。この論文が重要なのは、他の人骨関係文献が全国的なものでは単なる言及にとどまり、独立した論文が地方的にとどまるのに、これのみが全国的かつ学術的な出版物に掲載された論文である点にも由来する。11・12号人骨のみを学会誌掲載の学術論文の対象としたのは、あるいは鈴木が比較的浅い部分から密集して出土した成人人骨と新生児骨の絶対年代に不明瞭な点がある(anonym, 1967)と判断したためかとも考えられる。
- 8) 『柄原新聞』はこの他7回発行された(1971.8.1~8.7)が、別な調査主体によるものであるので、この小論では対象としなかった。ただし、本遺跡に関する記事が若干あり、その場合のみ参考とした。
- 9) この新聞については他にも言及がある(香原他, 1973: pp64-65)。
- 10) 新村は第一発見者の一人だが、この記事以外の文献を参照できなかった。もう一人の第一発見者の奥水には記事が早くからある(奥水, 1966)。
- 11) 小松および西沢のこの期間の論文はいずれも長野県考古学会の会誌または同会編集の集成書に掲載された。
- 12) 西沢、1978は第1の期間に鈴木・香原が断片的に報告した出土人骨を詳細に報告しており、特に重要である。なお第2の期間の主要著者である香原による文献は第3の期間以降ない。
- 13) 第4の期間の文献は両名のみの論文(西沢・宮尾, 1981)を除けば全国的学会関係の文献で、第3の期間の文献群と対照的である。
- 14) (文)理学部地質学教室はそれ以前から進めていた野尻湖調査を中断(1966—1972)して、第1の期間から第2の期間にかけての本遺跡調査に協力した。
- 15) ただし小松は早くから上中部堆積が第1次調査当時に予想されたよりも遙かに複雑だった可能性を示唆した(後述)。
- 16) 上層・中層・下層の用語が関係文献では一般的だが、この用語システムは stratigraphic の概念であって、本遺跡関係文献で用いた基準面からの絶対比高で表示される堆積層部分を示すには適さない。そこで「上部・中部・下部」を用語として採用した。
- 17) 第4次調査の略報(小松, 1967)以降、『柄原新聞』特別号(1970.10)まで小松の考古学的文献がなく、ここで述べた第2の細分期間までの小松の見解は必ずしも明瞭ではないが、この細分期間前後の小松による文献から、小松がこの立場に多少不自然な点を感じていたことを看取できる。

- 18) 村民の聴取によれば、この人骨を解熱剤に用いたという。また1939の本遺跡前面の県道改修に際し、第I~IV区の上部が崩れ（小松，1966：p8），少なからぬ人骨が露出したという。ただし、1965の本遺跡発見までは、新しい骨とみなしていた（小松，1977：p7）。「新鮮な晒骨と見紛う」ほどで「脆弱な部分も良く残されている」（西沢，1978：p95）出土状態を考えれば発見以前の住民の判断も自然である（小松，1970）。なお本遺跡周辺には鉈木の調査した北相木村宮の平（1971.8.27・28発掘）・南牧村志なの入（1972.7.25~30発掘）以外にも小海町本村他数地点に人骨出土をみた岩陰等がある（cf. 小松・西沢，1966：p3）。
- 19) 鉈木は興水・新村両名が1号人骨の頭蓋骨と土器を1965.12に松本まで持参したとしている（鉈木，1966：p12）。
- 20) 鉈木は1966.1としている（*ibid.*, loc. cit.）。
- 21) 第9次調査終了後の小松他の記事掲載断面図（小松他，1970：p4図2）は、1966のこの図と、精粗の差はあるが示す範囲がほぼ同一である。
- 22) このサンプルの示す古磁気を、後で測定したC¹⁴年代と特に結びつける必要のないことが、その後の研究により判明している。
- 23) この地質学的錯誤は、単に1966の「本調査」（鉈木・西沢，1966：p13）により最下部に達するとの期待を生んだだけではなく、本遺跡の全体像を把握する上で看過できない影響を有した。
- 24) 全4区と同じ深さに掘り下げたのではなく、落盤塊やテラスの拡大などで同一区内でも凹凸があった。以下この種の数字はすべて概数である。
- 25) ただし小松は早くもこの部分東端の遺物包含層の堆積が複雑な経過をたどったことに気づいた。また9号人骨が既掘部分内を移動した可能性についても言及している。
- 26) 第V区の遺物包含層が第V区以東の岩陰と密接な関連を有する可能性を指摘している。
- 27) 第4次調査までに出土した炉の一覧表を掲載している。
- 28) この他に新聞記事（anonym, 1967.8.8）がある。
- 29) 基準面からの高さは異なるが、第I~IV区の比較的浅い部分から出た密集人骨と同一グループに属する人骨である。
- 30) C¹⁴年代を12サンプルについて計測した（小松，1977：p15）が、関係文献に正確な記載のあるのは3例のみである（cf. 西沢，1978：p96, 1981：p581）。
- 31) 第9次調査で1965年以来の発掘を完了し、遺跡展に臨む予定だったが、雨のあたらぬ岩陰内の作業は順調にすすめえたものの、相木川河原での選別作業が6月の天候に妨げられ、全体作業量を縮小させた。
- 32) この他、信州大学理学部地質学教室が野尻湖発掘を再開（1973.3）したのもこの時期である。
- 33) 第11次調査は作業内容から第9・10次調査の補充発掘的色彩が強かった上に、第10次までの第一期調査と来たるべき第二期調査をつなげる中間項と考えられ、本遺跡周辺の相木川岩陰群調査・狩猟民俗聴取調査が中間項にふさわしい項目として新たに加わった（『桶原新聞』No.12, 1971.6.29）。
- 34) この用語は特にこれまでの関係文献で用いられていないが、興水が1940年代前半にこの遺跡群の存在を確認し（興水，1966：p5），本遺跡の発見以降第10次調査までに岩陰遺跡分布調査を試行した。その後北相木村が独自に分布調査を実施して報告書を刊行した。
- 35) 小松の追悼記年譜（anonym, 1980：p59）によれば、小松がこの調査だけに参加しなかったことになるが、『桶原新聞』No.1~5は小松を参加者として記載する。
- 36) 註釈参照。小松他の「発掘をはじめて5年の歳月を経て、やっと最後の発掘にこぎつけた」（小松他，1970：p7）との記述からも、この調査で全発掘を完了させる予定だったことが知られる。作業には不向きな季節を選んだために第I~IV区の発掘完了がおくれたことは、本遺跡調査研究の成果を整理統合する作業が著しく遅れる遠因になった。

- 37) 『橋原新聞』により一日毎の参加者氏名まで判明する。なお毎日平均約50名が参加したことが、『橋原新聞』およびその他に散見する言及から明らかである。鈴木・小松が指導した第1次から第11次までの調査はほぼこの参加者規模だったが、14人の参加者で「平面と人員のバランスがよく作業能率が大きいにあがつた」(『橋原新聞』No.17 1971.10.17)との記事もあり、平均50人が発掘面積に比し過剰であったことも察知される。
- 38) 本遺跡の小型黒曜石製石器が先土器文化遺跡出土の石器と酷似するとの指摘(『橋原新聞』No.2, 1970.6.12, 由井茂也署名記事)は単なる印象の記述にすぎないが、南佐久の縄文時代早期以前の傍遺跡の相互関係の可能性を示唆して注目される。
- 39) 初期は骨灰とみたが(第4次調査まで、小松, 1967: p6), 第7次調査後にX線解析の結果方解石を主成分とすることが判明し、第8次調査後に木灰であることがわかった(cf. 香原他, 1973: p155)。灰層中から遺物の出土しないことに小松は早くから疑問を抱いていた(小松, 1967b: p6)が、木灰と判明したこの時点で、小松は灰層を「貯蔵層」(小松他, 1971: p6)と表現し、灰層の存在理由と形成期について間接的表現ではあるが一つの解釈を示したことを見取れる。
- 40) 小松は1970の信濃毎日新聞記事(3.10)と合同執筆の一般誌掲載記事(小松他, 1970)を除けば、第4次発掘調査の略報以降3年間(つまり第1次から第10次調査までの5年間の過半を占める期間)、本遺跡の全体像にかかる記述を一切しなかった。1970の一連の考古学的記事はこの間の小松の全体像の変化を明瞭に示す。すなわち、第V区の利用が第I~IV区の居住性低下を原因として、本遺跡の居住史上ややおくれた時期に属する——つまり本遺跡の中心が第I~IV区にあった——とする従来の見解を一応提示しながらも、第V区出土遺物の理解しにくい出土状態から、「岩陰側壁の右方へ [sic=東北方へ] の伸展を考えると、本遺跡の最終的全容については予断を許さない」として、かつて指摘した第IV区の遺物包含層だけではなく、第V区の堆積が1983発掘地点以東の遺物包含層と密接な関連をもつつ複雑に形成されたことを間接的に指摘した。
- 41) 東京経済大学地学ゼミナール関係者の比率がやや高く、地元高校生は参加しなかった。
- 42) ただし下部の石器のいくつかが旧石器に似ることを再度指摘している(『橋原新聞』No.9, 1970.10.20)。なお註脚参照。
- 43) 香原は第11次調査を1971の秋とする(香原他, 1973: p131)。また遺物包含層底部に達したのは第10次調査であるが、これを第11次調査としている。
- 44) No.17の後にも号数なしの『橋原新聞』をハケ岳団研が発行し、そのなかの8.3(No.20相当)に本遺跡の表面採集遺物記事がある。
- 45) このなかで-300~-430(特に-390~-430)cmでのヤマドリ骨の減少とキジ骨の増加が大規模な山火事による森林被覆の喪失を原因とするとの記述は、小松の想定する本遺跡の居住途絶期の存在(香原他, 1973: p157)を考慮すると極めて示唆的である。
- 46) 藤田1977a・bとともに陸生・海生・淡水生貝についての記事の一部をなす。
- 47) 宮尾署名の「橋原遺跡の歯骨」は第4の期間の宮尾・西沢論文群につづき、特に貴重な文献ではないが、後の論文群の種別・遺物包含層部位別統計が第I~IV区の出土歯骨と第V区のそれとを加えたものであることが「北相木橋原遺跡出土歯骨量」から知られる。
- 48) 本遺跡と対応する段丘の地質学的考察から、底部に旧石器時代遺物が包含されないと判断があった(香原他, 1973: p133)ので、前回・前々回の発掘開始時のような期待はなかった。
- 49) 岩陰最奥部の「奥の院」と通称した小穴で、-250~-480cmの部位にあたる。
- 50) この部分の記述は、香原他1973の他に朝日新聞の連載記事(anonym, 1971)をも参考としている。
- 51) つまり、C¹⁴年代測定が不備でなかったなら、堆積過程がこの段階で考えられていたのより複雑な可能性があるとの指摘である。下部生活面が住居としては甚だ乱雑で不潔だったとの指摘(香原他, 1973: p154)は、漠然と予想される遺物包含層の堆積過程および第3の期間での小松の第V区以東への発掘

- 拡大の目的とを考慮すると極めて示唆的である。
- 52) 非常に小さい石をつかった円形炉。
- 53) ただし、下部にかぎれば、尖底から丸底への定説的变化がみられる (*ibid*, pp158, 159) など、この矛盾点は目立たない。
- 54) 獣骨の大きさとも対応関係があり、複雑な堆積過程を想定させる。
- 55) 第4の期間に発表された出土動物相関係文献の論旨と矛盾する。
- 56) 第1の期間に有力だったseminomadism説（本遺跡居住史の初期には東海地方、後に関東地方と本遺跡との間での）は、第2の期間では低調になり、かわって交易説が強くなった。海水生貝製装飾品が出土し、海産物に特徴的な価値が与えられたとみられることから、本遺跡居住者が季節的に移住生活した可能性が少ないとみた (anonym, 1971.9.16)。なお交易説と関連し、毛皮獸が下部から多く出土する (*ibid*, p147) ことにも注目すべきである。さらに骨針が多いことも以上の指摘と関係させて考察する余地がある。
- 57) 遺物の出土がなくなるまで掘り下げた (小松, 1976 : p7) とするが、第13次調査ではここに遺物包含層を確認しているので、第12次調査の第V区の調査にはやや完全でない側面があったことを反省すべきである。
- 58) 小松は西南岩陰に西南接する未発掘部分にも遺物包含層が存在することを同時に指摘しているが、ここでの力点が第V区以東の未発掘部分にあることは、第15次までの調査から明らかである。
- 59) 1983発掘開始時に第V区の表面から多少の遺物を採集し、極めて浅い所に遺構を発見したから、第15次調査で第V区の全遺物包含層を発掘の対象としたのは明らかである。ただし表面採集遺物は第15次調査以降上から崩落したのかもしれない。
- 60) 埋葬頭位を、各号人骨に関する個別記事では「西向き」(西沢, 1978 : pp95~98), 「北西」(p97), 「不明」(p98) としているので、おおむね「西向き」と要約した。ただし1978論文では「南西向き」(p100) を要約した。
- 61) 人骨が木灰・焼土に陥入して発見され、堆積層を掘り下げて (鈴木, 1966 : p12) 埋葬されたとみられるから、埋葬が木灰・焼土層形成期より後であるのは当然である (西沢, 1978 : p100)。
- 62) 鈴木は単なる黒泥ではなく死後硬直直後死体を強くしばりつけたとみた (anonym, 1971.9.29)。
- 63) 歯牙過耗以外の諸特徴 (下肢骨筋附着部の発達, 160~165cmの男性身長・145~155cmの女性身長, 西沢, 1978 : p102) に、本遺跡と同時代とみなしうる遺跡からこれまでに発見された人骨の諸特徴と相異する点のあることも指摘した (*ibid*, p100)。
- 64) 海水生貝利用の装飾品についても、結果的に他に比して詳細な記事 (藤田, 1977a : p13) である。
- 65) 本遺跡出土量の90%がこの貝で、特に-200~-300cmの灰層中から大量に出土した。
- 66) 信州大学農学部草地学研究室が部分的に参加した。
- 67) 第二期調査計画で、本遺跡の発掘調査参加者が各研究分野で「これまでの合同調査の実をあげること」を項目の1つとした (『桶原新聞』No. 10. 1970. 10. 21) が、鈴木・小松の相次ぐ逝去により、この方向で成果をあげたのはこの二名になった。
- 68) 表1~3 (宮尾他, 1980 : pp184, 185) から獣骨の出土状態により、全包含層を上部 (ここでは-250cmまで: シカが多くニホンザルを含まない)・中部 (-250~-400cm: ニホンザルを含むが細かい獣骨片が少ない)・下部 (ニホンザルを含み細かい獣骨片が多い) に三分できることがわかる。上部と中部の境界附近にアカネズミが集中する傾向がある。
- 69) 寛骨・四肢骨の打撲・碎砕の痕跡、尺骨・腕骨製骨器 (完成品および未完成品)、休耕・手足食用痕跡欠如、の三点が並行することも明らかにした。
- 70) 新聞記事 (anonym, 1967, 1971, 小松, 1970), 初期の略報 (小松, 1967a・b), 入手しにくい文献 (藤田, 1977a・b), この小論で特に必要だった調査経過に関する記事 (anonym, 1980) を除く。

- 71) 未発表の沈縫文・押引文・条眞文を含む。
- 72) この他石組垣・焼土・石組構造等の遺構、哺乳動物・貝類以外の動物の記述は、この記事の性格から必ずしも詳細ではないが、概要を把握しやすく述べてある。
- 73) なお北相木村誌にも関係記事がある（菊池：1977）。

(文 献 目 錄)

文献の記載順はアルファベット。共同執筆等の文献は第一著者の単独著作文献のあとに、第二著者以下のアルファベット順とは無関係に一括して刊行年順にならべた。

- anonym 1967 「繩文早期の橋原遺跡」（読売新聞8.8）
 ク 1971 「北相木人を探る——橋原遺跡から」（1~12：朝日新聞長野版9.9—9.30 20面）
 ク 1980 「小松慶氏略年譜」『長野県考古学会誌』No. 37 pp57—9
 藤 田 敦 1971 「橋原遺跡から出土した陸貝類」『橋原新聞』No. 12 pp5—9
 ク 1977 a 「橋原遺跡出土の貝類（早期繩文人の貝利用）」『UNIO』13 pp12—13
 ク 1977 b 「橋原遺跡出土の貝類」『UNIO』14 pp6—8
 郷 原 保 真 1966 「橋原遺跡の岩盤について」『信州ローム』9 pp6—7
 菊 池 清 人 1977 「北相木人と橋原遺跡」北相木村誌刊行会編『北相木村誌』pp103—114
 否 原 志勢他 1971 「災害死と推定される早期繩文時代小児人骨」『人類学雑誌』79(1) pp55—60
 ク 1973 「繩文早期人の世界」『どるめん』1 pp130—167
 小 松 康 1966 「橋原遺跡における考古学的調査概要」『信州ローム』9 pp8—11
 ク 1967 a 「第3次橋原岩陰遺跡調査報告」『信濃考古』17・18 pp2—3
 ク 1967 b 「橋原遺跡第4次調査について」『信濃考古』20 pp5—6
 ク 1970 「橋原岩陰（開発中の遺跡）」（信濃毎日新聞3.12）
 ク 1977 「橋原岩陰遺跡の押型文土器」『長野県考古学会誌』27 pp6—15
 ク 1978 「橋原岩陰遺跡の押型文土器の出現時期」長野県考古学会編『中部高地の考古学』pp 83—93
 [小松 康他] 1966 「橋原遺跡特集」『信州ローム』9 pp1—15
 小松慶・西沢寿晃 1966 「橋原遺跡発掘日誌」『信州ローム』9 pp1—4
 小 松 康他 1970 「繩文人のふるさと」『国土と教育』1(4) pp2—7
 小松慶・西沢寿晃 1970 「〔第9次発掘までの橋原遺跡の考古学的調査の概要〕」『橋原新聞』No. 6 pp2—8
 小 松 康 他 1977 「橋原岩陰遺跡出土土器1例について」『長野県考古学会誌』27 pp16—17
 興 水 利 雄 1966 「北相木人の発見まで」『信州ローム』9 p5
 宮 尾 嶽 雄他 1980 「早期繩文時代長野県橋原岩陰遺跡出土の哺乳動物（第1報）」『哺乳動物学雑誌』8 (5) pp191—188
 宮 尾 嶽 雄他 1981 「早期繩文時代出土イノシシの歯の大きさ」『成長』20 pp234—235
 ク 1981 「早期繩文時代長野県橋原遺跡出土の哺乳動物（第2報）」『歯科基礎医学会雑誌』23 (1) pp141—146
 ク 1982 「ク（第4報）」『成長』21 (1・2) pp20—28
 百瀬 寛一 1966 「北相木土の自然残留磁気についてのメモ」『信州ローム』9 pp14—15
 中 村 登 流 1971 「橋原遺跡から出土した鳥骨について」『橋原新聞』No. 12
 西沢寿晃 1978 「橋原岩陰遺跡出土人骨」長野県考古学会編『中部高地の考古学』pp94—104
 西沢寿晃・宮尾嶽雄 1981 「早期繩文時代長野県橋原岩陰遺跡出土の哺乳動物（第3報）」『長野県考古学会誌』41 pp1—10

第1章 桟原岩陰遺跡の調査研究経過

- 鈴木 誠1966「長野県北相木村桟原岩陰遺跡出土人骨の概要」『信州＝ム』9 pp12
〃 1968「長野県桟原岩陰遺跡と人骨」『人類学雑誌』76(1) pp52-54
〃 1969「南佐久郡桟原岩陰遺跡」『信濃考古』27 pp4-6
- 鈴木誠・西沢寿晃1966「長野県北相木村桟原縄文早期遺跡出土の装飾品について」『信州＝ム』9 pp13
〃・香原志勢1967「長野県北相木村桟原岩陰遺跡(概要)」第21回日本人類学会日本民族学会連合大会研究発表抄録 pp88-92
〃・〃 1968「長野県北相木村桟原岩陰遺跡出土人骨について」『解剖学雑誌』43(1) pp41-42

第2章 層序と遺構

第1節 層序(図2・1)

今回の発掘調査区を設定した地点は、岩陰中央部の岩盤に接した場所で、道路面からの比高約10mの地点である。発掘トレンチの大きさは、岩陰内の地形の制約から東西1.6m南北4.6mの範囲内とした(図1・1)。この地点で、岩陰内の地表面は開口部へむかって緩やかな傾斜から急な傾斜へと変換する。従て、トレンチの北壁断面と東壁断面とでは、堆積層の状態に大きな差がみられ、北壁では複雑な堆積状況であるのに対して、東壁では単純な堆積状況を示している。こうした堆積状況の差が生じたのは、調査区の西側から東北隅にかけて、岩陰の地形に沿って堆積が進行したのち、新しい崩壊土が北から南へ流出した結果である。

なお、図2・1—2南壁層序図は、作業上の安全を考えて、地表面より230cm下位に、北壁から106cmの範囲に足場として残した部分の南側断面である。

第1層の暗赤褐色土(5 YR3/2)は表土層であり軟らかい土壌からなる。層の厚さは深い所で70cm程である。出土遺物としては、中世の土器がみられる。第2層灰褐色土(5 YR4/2)は第1層よりもやや締った土であり、後世の大きな擾乱をうけているが、この層の直上では少量の

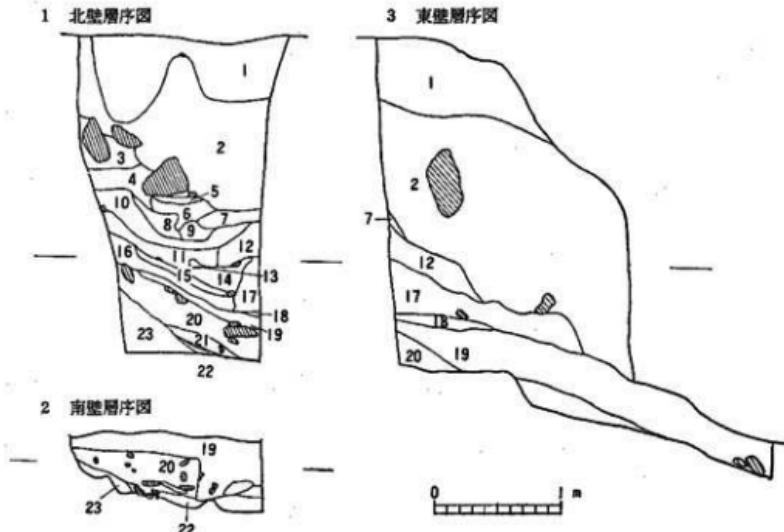


図2・1 トレンチ南壁・北壁・東壁層序図

焼土が出土した。第2層の厚みは、深い所で1mにも達している。出土遺物には、縄文時代早期および前期並びに中期の土器と石器がある。第3層の黒褐色土(7.5YR2/2)中には、落石があり、また図示はできなかったが、同層の中程には灰の固まりが検出された。出土遺物には、縄文時代前期および中期の土器と石器がある。第4層と第5層は、共に暗赤褐色土(5YR3/2)であり、第4層は深い所で30cm程の厚さである。第5層はレンズ状の薄い堆積層で、厚さは5cm程である。第4層から出土した遺物には、縄文時代早期の土器がある。第6層から第9層までは、第10層の凹みにブロック状に堆積した土層である。いずれも暗赤褐色土(5YR3/2)で、最も深いところで厚さは20cmである。第8層からは、縄文時代前期の土器が出土し、第9層からは早期および前期の土器が検出された。第10層は細縫を含んだ暗赤褐色土(5YR3/2)であり、最も深い所で30cm程の厚さを示す。縄文時代早期および前期の土器ならびに石器が出土した。第11層および第12層は灰褐色土(5YR4/2)であり、第10層に平行して、20cm程の帶状に堆積したものである。第11層の出土遺物には、縄文時代早期・前期の土器および石器がある。第13層は暗赤褐色土(5YR3/2)であり、第14層は黒褐色土(5YR3/1)である。この2層とともに、ブロック状に堆積したものである。第14層は最も厚い所で20cmで、出土遺物としては、縄文時代早期の土器がある。第15層は暗赤褐色土(5YR3/2)であり、西から東にかけて傾斜をしながら、10cm程の厚さで帶状に堆積したものである。第16層は黒褐色土(5YR3/1)であり、第15層に平行して堆積している。出土遺物は縄文時代早期の土器である。第17層は黒褐色土(5YR3/1)で、北側から南側へむけて流れ出した土壠が厚く堆積したものである。最も厚い所は45cm程に及ぶ。第18層は黒褐色土(5YR3/1)で、第17層と第19層との間にレンズ状に堆積したものである。第19層は暗赤褐色土(5YR3/2)であり、北側から南側への緩やかな傾斜に沿って堆積した土層である。この層では配石状の遺構(図2・3)を検出している。堆積層の厚さは浅い所で5cm、深い所では40cmである。縄文時代早期の土器と石器が発掘されている。第20層は黒褐色土(5YR3/1)であり、配石状遺構(図2・4)および炉跡(図2・2)などの遺構を検出した。作業の必要のために足場として残した部分の断面図(図2・1-2)に見えるこの層の落ち込みは、部分的に確認したものであるため、その性格については明らかにはできなかったが、人為的な遺構であることは疑いない。この層からの出土遺物には、縄文時代早期の土器および石器がある。第21層は厚さが10cm程の暗赤褐色(2.5YR3/4)の焼土の層である。第21層と第22層との間に挟まれた層は、炭化物がレンズ状に堆積したものである。第22層は黒褐色(5YR3/1)の縄文時代の包含層で、ここから2号炉跡を確認した。第23層は明褐灰色(5YR7/1)の灰層であり、岩盤に接して斜めに堆積している。最大厚は50cm程に達している。

第2節 遺構(図2・2, 3, 4)

発掘調査面積が狭いにも拘らず、多くの遺構を検出できた。縄文時代の遺構としては、炉跡2基と配石状遺構2基がある。炉跡2基のうち1基(1号)は完掘したが、他の1基(2号)は未発掘のまま埋めもどした。この他に、縄文時代の焼土面を4か所と近世以降のものと思われる焼土面を1か所確認した。

1. 1号炉跡(図2・2, 図版4)

第20層の下部で検出した炉跡である。平面形は長円形で、掘り方の内側に川原石を並べて石堤

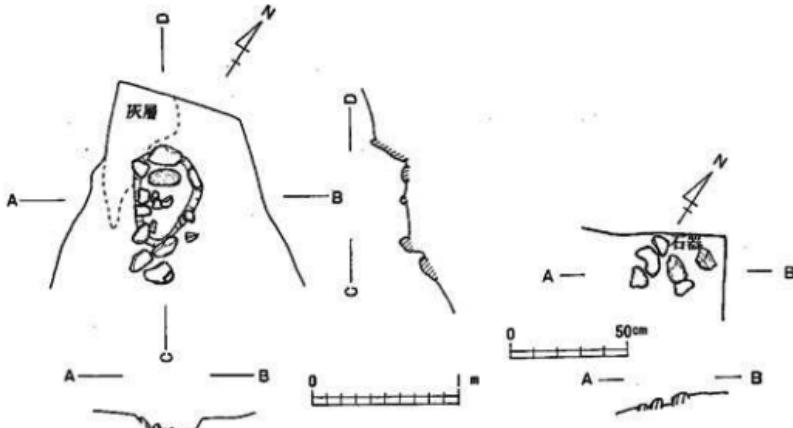


図2・2 1号炉跡実測図

図2・3 配石状遺構実測図



図2・4 第20層配石状遺構・第19層焼土面実測図

2. 2号炉跡(図2・1-2)

堆積層を更に深く掘り下げるにあたって、作業上の安全を期するために設けた足場の断面で確認したものである。1号炉跡の直下にあり、その形態は、1号炉跡と同様に、掘り方の周りに川原石を置いた石囲い炉である。発掘期間の都合で完掘できなかったので、規模その他の詳細については明らかになっていない。

3. 配石状遺構(図2・3, 4, 図版5)

炉としたものである。石の配置をみると、炉内の北側に人頭位の大きさの扁平な川原石を立て置き、他の三方向には、拳大の川原石をまばらに置いている。底面にも人頭大の川原石および拳大の川原石を並べている。底面に敷いた石は、いずれも火熱を受けて脆弱になっている。炉の規模は内法で $65\text{cm} \times 47\text{cm}$ 、掘り方の上面から底面までの深さは 22cm である。炉内からは、縄文土器(図2・5)および焼土ならびに少量の木炭が出土している。炉内からの出土土器により、この遺構は縄文時代早期末と考えられる。

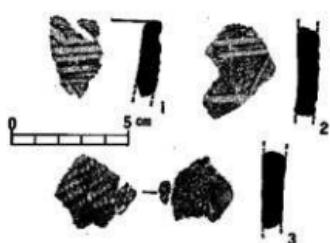


図2・5 1号炉跡内出土土器拓本 (cf. p.25)

配石状遺構は2基検出された。

a 敷石状に配石した遺構 (図2・3)

第15層直上で検出されたもので、拳大の扁平な川原石5個が半円状に並んでいる。この配石に接して剝片石器(図3・13-2)が出土している。遺構の周りに焼土の痕跡などもなく、その性格も明らかではないが、人為的に並べられたものと考えられる。

b 円形状に配石した遺構 (図2・4)

拳大の川原石を円形状に並べた遺構で、第20層の上部で検出された。その規模は、内法で47cm×30cmの大きさがあるが、黒色土層中の遺構であったために、深さについては明らかにすることはできなかった。配石内からは少量の木炭が出土した。炉跡の可能性がつよいが断定できるまでにはいたらなかった。

4. 焼 土 (図2・1, 4)

今回の発掘で5か所にわたって焼土の遺存が確認された。その多くは狭い範囲のものであり、厚さも極めて薄い。焼土に伴って少量の木炭が出土している。これらの焼土が検出されたのは、第2層直上、第2層下部、第4層下部、第12層下部および第19層直上である。そのうち第2層下部の場合には、焼土の周りの土が硬化して板状になっており、また焼土面からは縄文時代中期前半の土器が出土した。第19層直上で検出した焼土(図2・4)は15cm×20cmの広さがあり、その周りに拳大の川原石2個が置かれてあった。この焼土面ができたのは、直上の第16層で出土した土器などからみて、縄文時代早期末であろうか。

第3章 出土遺物

第1節 土器 (図3・1~10 図版8~18)

出土土器は、中世の土器1点を除けば、他はすべて縄文時代の土器である。そのなかでも、縄文早期の土器はとくに多量に出土した。これらの土器を時期の差によってⅣ群に分け、Ⅰ群土器をさらに文様ならびに調整手法によって7類に細分した。

Ⅰ群土器 縄文時代早期の土器

- 1類 槌糸文を施した土器
- 2類 押型文を施した土器
- 3類 縄文を内外面に施した土器
- 4類 沈線文を施した土器
 - a 平行沈線および貝殻腹縁文を施した土器
 - b 棒状の沈線文を施した土器
 - c 沈線文と細隆起線文を施した土器
- 5類 刺突文を施した土器
- 6類 条痕文を内外面に施した土器
- 7類 条痕文と縄文を施した土器
 - a 条痕文を内外面に施し、さらに縄文を外面に施した土器
 - b 縄文を外面に施し、条痕文あるいは擦痕文を内面に施した土器

Ⅱ群土器 縄文時代前期の土器

Ⅲ群土器 縄文時代中期の土器

Ⅳ群土器 中世の土器

以下、出土土器について層位別に述べる。

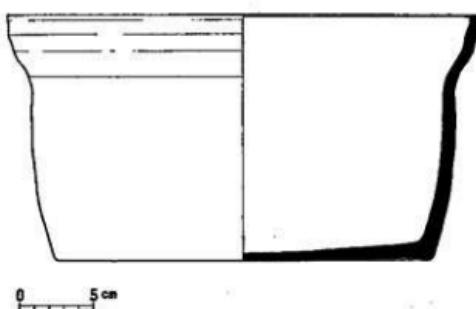


図3・1 第1層出土土器実測図

第1層出土土器(図3・1, 図版8)

第1層および第2層の上部からいくつかの破片となって出土したものである。口縁部が僅かに内凹しながら上方に開く錐形の土器で、平底である。胎土には多量の砂粒を含み、煤が外面に付着している。内面に耳環の付く内耳土器と思われる。中世末頃に位置するものであろうか。

第2層出土土器(図3・2, 図版8)

第2層からは、縄文時代早期か

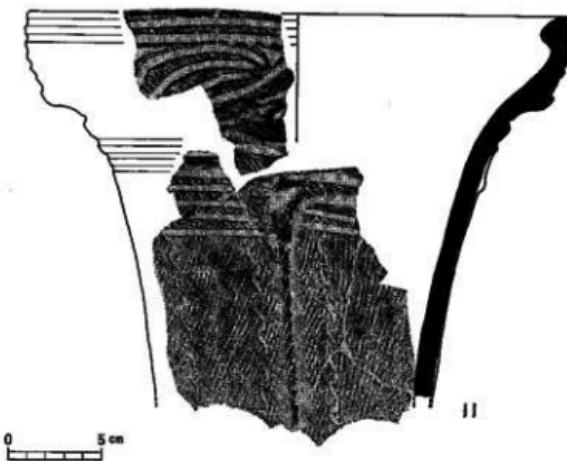
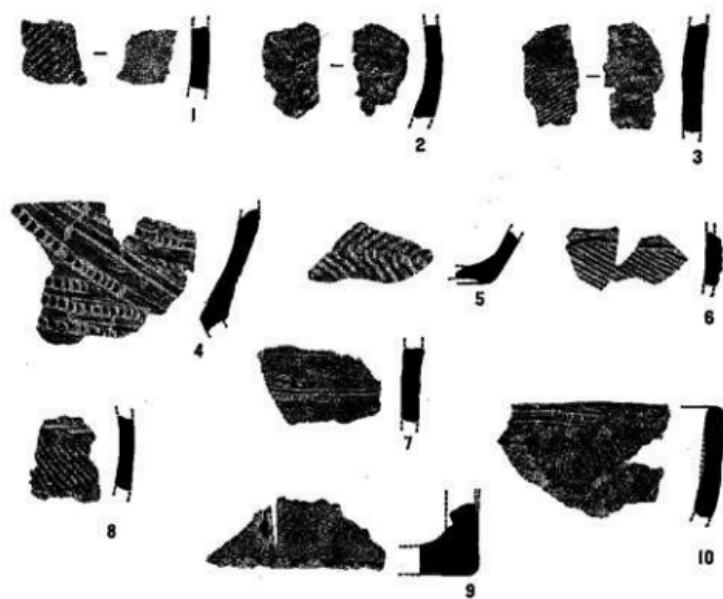


图3·2 第2层出土土器拓本

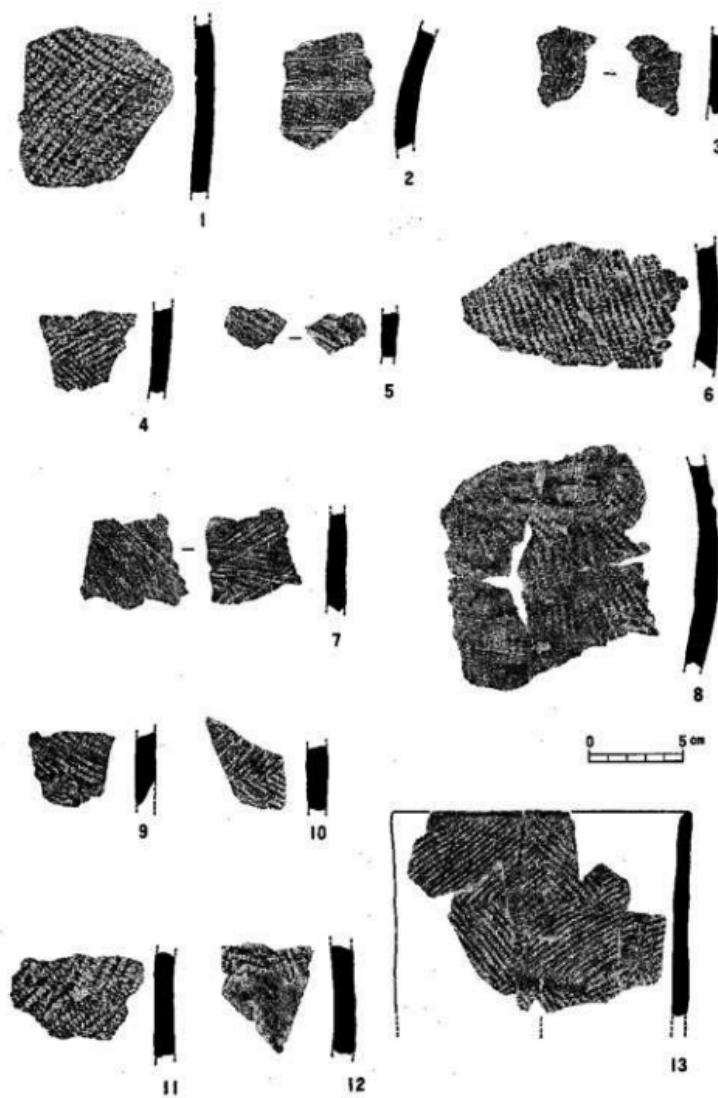


図3・3 第3・4・8・9・10層出土土器拓本

ら中期に至るまでの各時期の土器が出土しているが、早期および前期のものは僅かであり、多くは中期に属するものである。

I群土器（1～3）

6類 (1), (2)は条痕文を内外面に施した土器で、胎土には纖維を含んでいる。

7類 b (3)は無節縄文を外面に施し、細い条痕文を内面に施した土器である。胎土には纖維はみられないが、石英片を含んでいる。

II群土器（4, 5）

(4)は浅い条痕文のうえに、半截竹管状工具による平行沈線を施した土器である。平行沈線の中にはC字状の爪形文を加えている。胎土には纖維を含む。(5)は上げ底状の底部で、外面には羽状縄文を施し、内面にはミガキ調整を加えている。焼き上りの良い土器である。(4)は黒浜式土器に比定できるもの、(5)は諸磯式の範疇に入る土器である。

III群土器（6～11）

(6)はキャリバー状口縁の深鉢形土器である。棒状工具による太い沈線と斜縄文とを組み合わせた文様をもつ。口縁部文様と胴部文様とは、頸部に施した平行沈線によって分けられている。口縁部には、平行沈線によって区画された内に、弧状の沈線を数条組み合わせた文様がみられる。沈線を施すことによって生じた隆起線には斜縄文を加えている。胴部には結節縄文を施したうえに、頸部から底部にかけて垂直に隆起線を下し、また隆起線上には斜縄文を加えている。胎土には雲母片を多量に含む。(7)は梢円形に区画した中に、櫛状工具による斜状の平行沈線を描いている。胎土には石英片が目立つ。(8)は半截竹管状工具による平行沈線が見える。(9)は結節縄文を施したもので、内面に箒状工具によってミガキ調整を施している。(10)は口縁に沿って平行沈線をひき、口縁部から頸部にかけて櫛状工具による弧状文がめぐっている。(11)は底部破片であるが、その部分には斜縄文を地文としたうえに隆起線を配している。(6, 7, 11)はともに中期前半に位置するものであり、(10)は中期末の曾利V式土器である。

第3層出土土器（図3・3, 図版9）

縄文時代前期の土器が僅かに出土している。

II群土器（1, 2）

(1)は羽状縄文を施した土器で、胎土には多量の纖維を含んでいる。黒浜式土器に比定できるものである。(2)は縄文を地文としたうえに、半截竹管状工具による平行沈線を施している。

第4層出土土器（図3・3, 図版9）

I群土器（3）

縄文時代早期後半の土器が、少量ではあるが出土している。

6類（3）

(3)は条痕文を内外面に施した土器で、胎土には纖維を含んでいる。この他に、図示はしなかったが、条痕文を内外面に施した土器と縄文を施した土器がある。

第8層出土土器（図3・3, 図版9）

縄文時代前期後半の土器が少量出土している。

II群土器（4）

(4)は羽状の縄文が外面に施され、内面には擦痕状の調整痕がこっている。胎土には纖維を含むが、焼き上りの良い土器である。

第9層出土土器（図3・3, 図版9）

縄文時代早期および前期の土器がある。

I群土器 (5)

6類 (5)は条痕文を内外面に施した土器で、繊維を含んでいる。早期後半に位置づけられる。

II群土器 (6)

(6)は斜縄文を外面に施した土器である。器壁があれていますために、内面の調整については明らかでない。胎土には繊維と石英片が含まれている。前期前半の土器である。

第10層出土土器 (図3・3, 図版9)

縄文時代早期および前期の土器がみられる。

I群土器 (7)

6類 (7)は条痕文を内外面に施した類で、胎土には繊維を含んでいる。早期後半の土器。

II群土器 (8~13)

(8)は、扁平な隆起線を二条貼りつけ、そのうえに縄文を施している。胴部は斜縄文でかぎり、内面にはナデ調整を加えている。胎土には繊維を含む。(9)は外面に斜縄文、内面に擦痕文を施したもので、胎土には繊維を含む。(10)は斜縄文を外面に施した土器であるが、固い繊維を用いて原体を撫ったため、縄文の粒が粗く残っている。内面にはナデ調整のあとがみられる。胎土には石英片を含んでいる。(11)はナデ調整のうえに斜縄文を施している。胎土には繊維および石英片を含む。(12)は口径15cm程の深鉢形土器である。口縁先端部の外面にはナデ調整を加え、その下位には斜縄文を施したものである。斜縄文の施文には、回転方向を左右および上下で変えているために、羽状の縄文が左右対称となり、条の走向が菱形状を示す。胎土には繊維を含んでいる。(13)は(12)と同様の特徴をもつものである。いずれの土器も前期前半に位置づけられるものである。

第11層出土土器 (図3・4, 図版10)

縄文時代早期および前期に位置する土器がある。

I群土器 (1, 2)

6類 (1)は条痕文を内外面に施したものであり、胎土には石英片を含んでいる。(2)は外面には条痕文を施しているのがみえるが、内面については、壁面が粗れているために明らかでない。恐らく、条痕文が施文されていたものと思われる。多量の繊維を含んでいる。

II群土器 (3)

(3)は粒の粗い斜縄文を外面に施し、上部ではその地文のうえに二条の平行沈線を描いている。内面にはナデ調整を加えている。胎土には多量の繊維を含んでいるのがみえる。黒浜式土器に比定できる。

第14層出土土器 (図3・4, 図版10)

縄文時代早期に位置する土器が出土している。

I群土器 (4~7)

5類 (5)は刺突文を施した類で、その刺突文の上下は条痕文で調整している。繊維および石英片を含んだ土器である。鶴ヶ島台式土器に比定できる。

6類 (4), (6)は内外面ともに条痕文を施したもので、胎土中には繊維と石英片が認められる。

7類b (7)は羽状縄文を外面に、条痕文を内面に施した土器。胎土には繊維と石英片が含まれる。

第16層出土土器 (図3・4, 図版10)

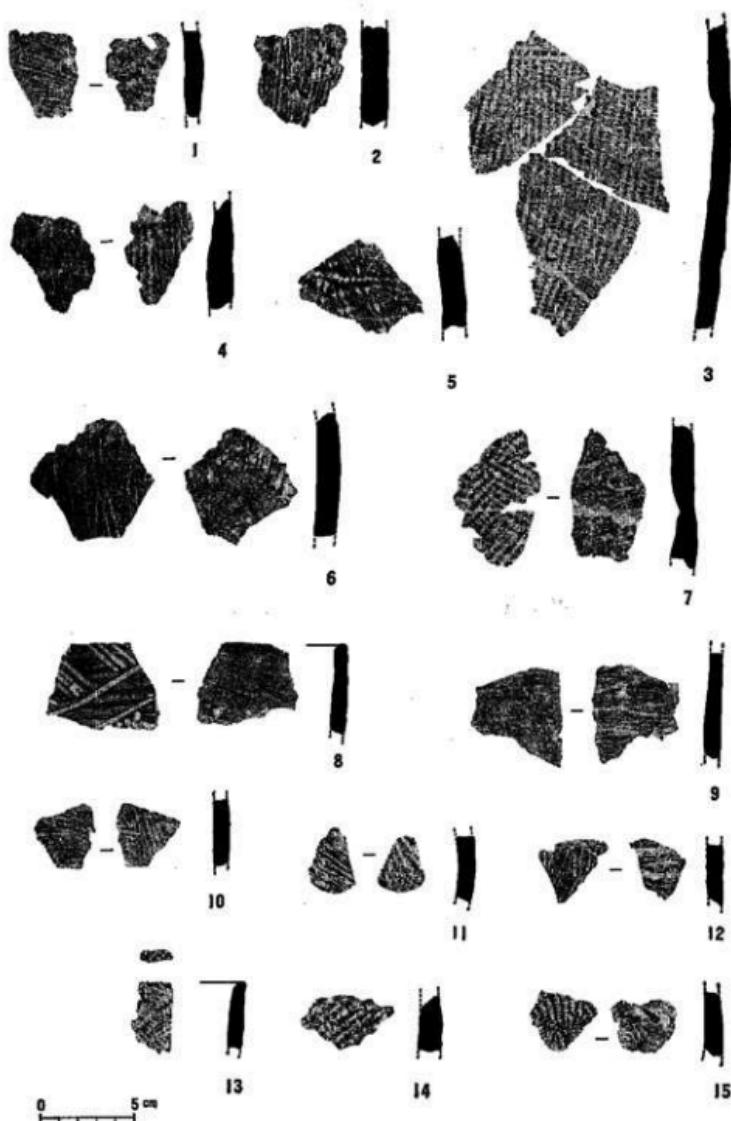


圖3・4 第11・14・16層出土土器拓本

縄文時代早期に位置する土器がみられる。

I群土器（8～15）

4類a（8）口縁部破片である。外面には、浅くて幅の広い条痕文を施したうえに沈線文を加えている。その沈線文様は、口縁部から頸部にかけては斜方向に、そして無文帯をはさんでまた斜方向に配されている。内面には浅い条痕を施している。胎土には纖維のはか多量の雲母片を含んでいる。野島式土器に含められる。

6類（9～11）斜方向および横方向の条痕文を内外両面に施したものである。(1)は胎土中に纖維が認められる。早期後半に置くことのできる土器である。

7類a（12, 13）条痕文を内外両面に施すとともに、さらに外面に斜縄文を加えたものである。(1)は口縁部の破片で、細い条痕文を外面につけ、そのうえに斜縄文を施している。内面調整はナデ仕上げで一般のa類とは異っているが、小破片であり、胴部には条痕文を施している可能性も考えられるので、この類に含めた。早期末に位置する類である。

7類b（14, 15）(1)は斜縄文を外面に、ナデ調整を内面に施している。胎土には纖維を含んでいる。第14層から出土した土器（図3・4-7）と同一破片であるためこの類に含めた。(1)は外面に斜縄文を、内面に条痕文を施したもので、胎土には纖維が含まれていない。早期末に位置づけられる。

第19層出土土器（図3・5, 図版11）

縄文時代早期の土器だけが出土している。

I群土器

2類（1）外面には擦糸文を、そして内面にはナデ調整を施している。胎土には纖維と多量の石英片とを含んでいる。早期前半の土器である。

4類a（2, 3）(2), (3)の例では条痕文を内外両面に施したうえ、外面にはさらに沈線文を施している。そのうち(2)は隆起線で区画した中に沈線文を施している。纖維を含む。(3)は沈線による方形の区画内に綾状の沈線を配している。横方向に引いた沈線内には刺突文がみえる。この例も胎土には纖維を含む。(2), (3)はともに鶴ヶ島式土器に比定できるものである。

6類（4, 5, 7～9）条痕文を内外両面に施した土器である。(7)では粗い条痕文を横と斜めの方向にひいている。いずれも纖維含入の土器。(8)は外面を笠で調整し、内面には斜方向の条痕文を施している。焼き上りの良い土器である。胎土に纖維はみられないが、石英片が含まれている。外面の調整の仕方および纖維を含んでいないことなど、他の6類土器とは異なるところもあるが、ここでは6類に含めておく。いずれも早期末のものである。

7類b（6, 10～13）縄文を外面に、条痕文を内面に施した土器である。なお内面をミガキ調整で仕上げたものもこの類に含めておきたい。(6)は外面を押圧縄文で施し、内面には条痕文を加えている。胎土には纖維とともに石英や雲母片が多量に含まれている。(1)は外面を押圧縄文で飾り、内面は丁寧なミガキ調整で仕上げをしている。胎土は纖維および石英片を含む。(1), (1)は外面には斜縄文、内面には細い条痕文がみえる。纖維含入土器。(1)の胎土には石英片が目立つ。

1号炉跡内出土土器（図2・5, 図版12）

炉跡内からは縄文時代早期の土器が3点出土した。

I群土器（1～3）

4類b（1, 2）(1)は口縁部破片である。斜条の沈線および平行沈線がみえる。(2)は平行沈線

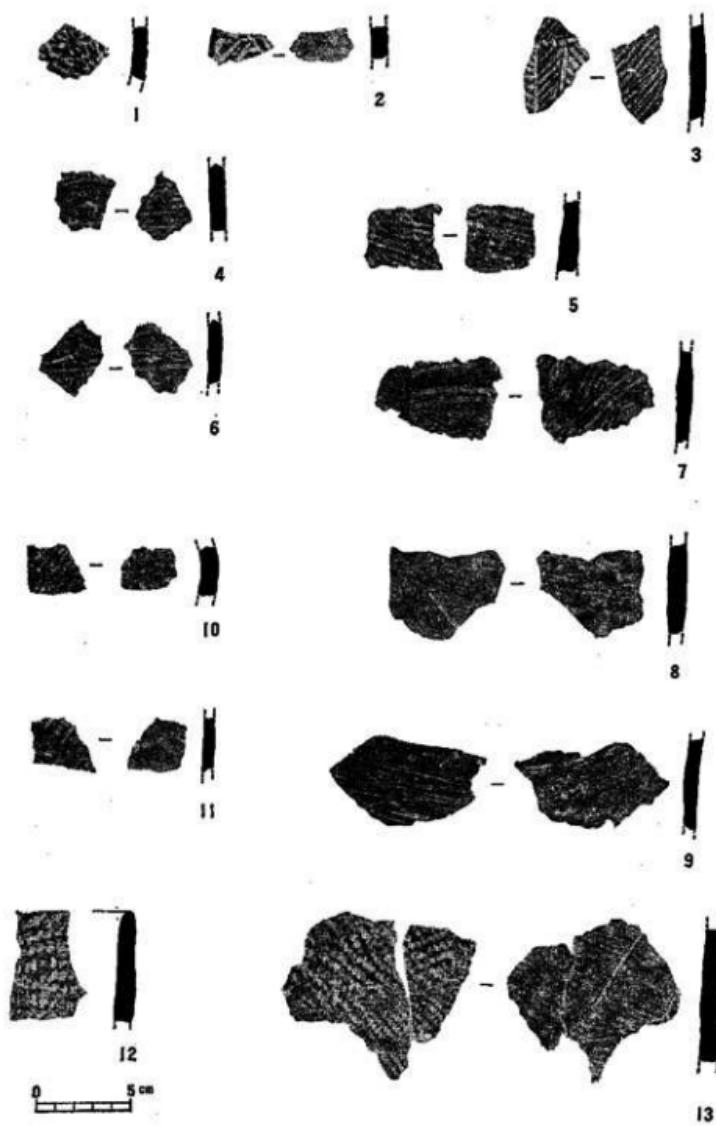


圖3・5 第19層出土土器拓本

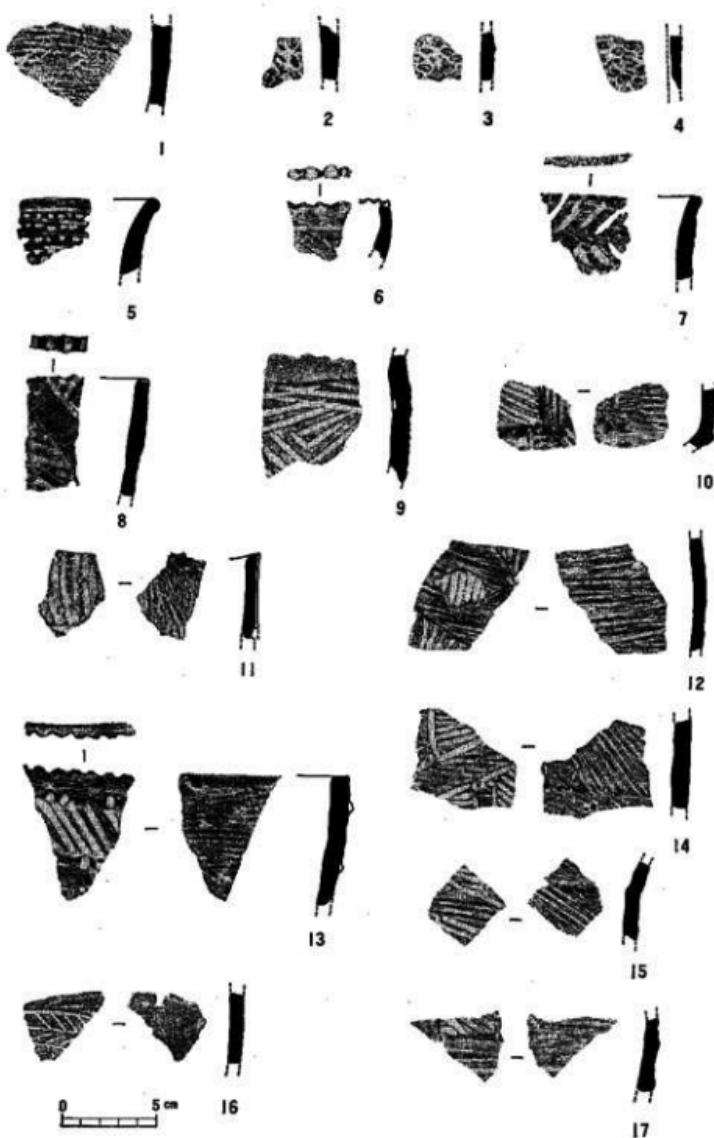


図3・6 第20層出土土器拓本(1)

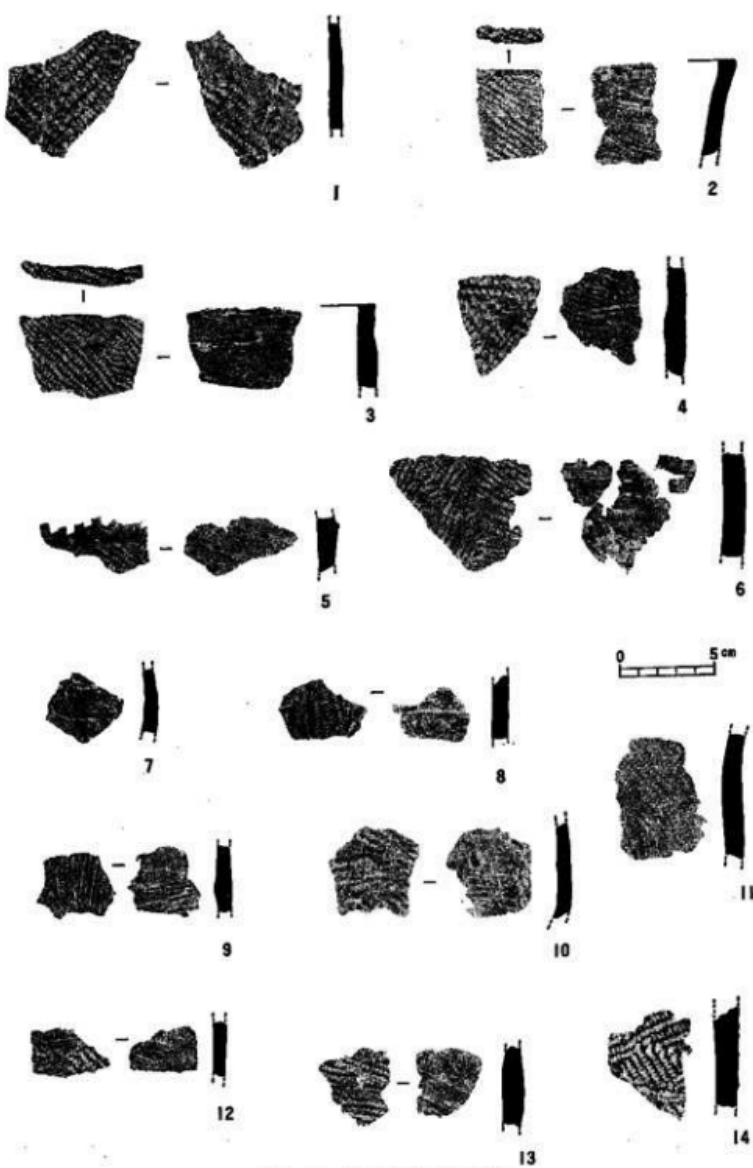


圖 3・7 第20層出土土器拓本(2)

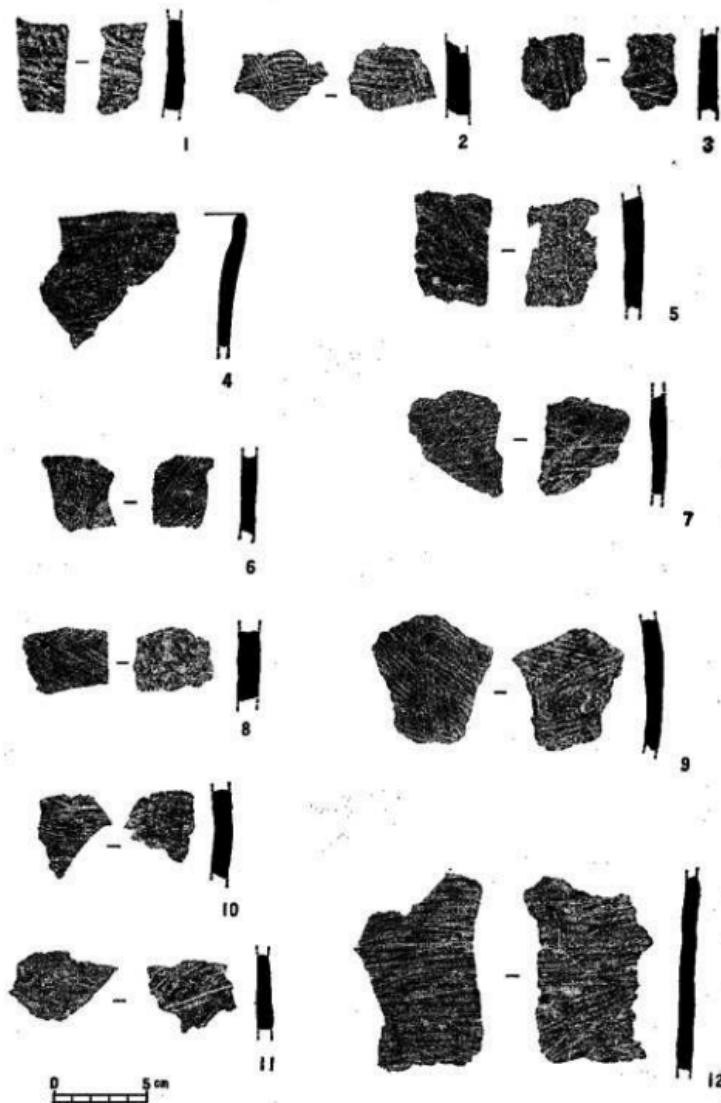


図3・8 第20層出土土器拓本(3)

の間に斜条の沈線を施す。(1), (2)ともに内面に擦痕文が施されている。胎土には繊維および多量の石英片と雲母片とを含む。ともに早期後半の特徴を示す土器である。

7類 b (3) 外面には斜繩文、内面には細い条痕文と擦痕文をみる。繊維を含む。早期末におかれる土器である。

第20層出土土器(図3・6, 7, 8, 図版12~15)

繩文時代早期の土器が多量に発掘された。

I 群土器

1類 (図3・6-1) 外面には横方向の擦糸文を施し、内面には擦痕文を施している。胎土中には少量の繊維痕がみられる。厚手の土器であるにもかかわらず、焼き上りは良い。早期前半に位置するものであろう。

2類 (図3・6-2~4) 楔円押型文土器で、擦痕文あるいはナデ調整を内面に施している。楔円文の粒は長径が5~7mm、短径が3~4mmである。多量の雲母片を含んでいる。焼き上りの良好な薄手の土器である。

3類 (図3・7-1) 1点だけであるが、節の大きめの斜繩文を内外両面に施した土器である。施文方向を変えて繩文をつけていたために、外面では羽状繩文となっている。内面では單一方向に施している。器面には指頭圧痕が残っている。胎土には繊維と多量の石英片が含まれる。

表裏繩文土器は繩文時代草創期に属するものもあるが、今回出土したものは繩文の粒がやや大きめであること、胎土に石英片が含まれていること、および出土層位などの点から、ここでは早期後半に編年されるものであろう。

4類 a (図3・6-5, 16) 平行沈線文および貝殻腹縁文を外面に施した土器がこの類である。(5)は口縁部破片。口縁に平行に施した平行沈線の中に刺突文を連ねている。内面はナデ調整。胎土には繊維と石英片を含む。焼き上りは良い。(6)は平行沈線を横方向にめぐらし、その内側に斜方向の沈線を加えて綫衫文をしている。平行沈線の上部には、貝殻腹縁文を、内面には擦痕文を施している。胎土には多量の石英片がみられる。堅く焼き上った薄手の土器である。(5), (6)ともに田戸下層式土器に比定できる。

4類 b (図3・6-6~9, 14, 15) 平行沈線文を組み合わせて、幾何学的な文様を構成する類である。(6)は口縁部の破片。口唇部には刻み目をつらね、外面には口縁に平行して沈線、沈線の下には笠状工具による幅の広い斜めの沈線をめぐらす。外面の仕上げはナデ調整によっている。胎土には繊維を含んでいるが、焼き上りは良く薄手の土器である。(7)は棒状の沈線を並べて羽状文を描いた土器であり、内外面とも擦痕で仕上げている。繊維と多量の石粒を含んでいる。(8)は口縁部の破片で、口唇部には刻み目をついている。沈線で三角形に区画した中を棒状の平行沈線で埋めている。内外面ともに擦痕仕上げで、胎土には繊維と石英片を含む。(9)は棒状の沈線で菱形の文様を外面に描き、内面は擦痕仕上げである。繊維と多量の石英片を含む。(10), (11)は外面を斜方向と縦方向との平行沈線で区画し、その中を棒状の沈線で埋めている。それぞれの区画の間に刺突文を施し、また内外面とも深い条痕文を地文としている。胎土には繊維と石英片を含む。薄手で焼き上りは良好である。この類は鶴ガ島式土器に含められるものである。

4類 c (図3・6-10~13, 17)

沈線文と隆起線文を特徴とする一群の土器である。(10)は頸部と胴部の間で段状に屈曲する土器である。条痕文を内外面に施したうえに、外面では横方向の隆起線を貼りつけている。隆起線によって分けられた区画内には、横方向と縦方向の沈線を加えている。胎土には繊維と石英片を含

(8)は前の例と同様に頸部に段状のくびれがある。縦方向の微隆起線と斜方向の沈線とを外面に施している。内外面とも条痕文を地文としている。胎土には繊維と石英片を含む。焼成は良好で薄手の土器。(9)は波状口縁の土器である。口縁端から頸部にかけては、細隆起線を施し、その隆起線のうえには刺突文を加えている。深い条痕文を内面に施している。(10)は条痕文を外面に施したうえに、外面は平行する隆起線で飾っている。隆起線の内側には、細い隆起線と沈線による横形の文様を加え、外側には縦方向の沈線を施している。胎土にはわずかに繊維痕がみえる。焼き上りは良好、薄手の土器である。(11)は口縁部の破片で、口唇部の外側には刻み目を施している。内外面とも条痕で調整し、口縁に平行して隆起線を外面に施している。隆起線の間には、太い斜めの沈線を施し、隆起線上には刺突を連ねている。胎土には繊維と少量の石英片を含んでいる。焼き上りは良好。この類は茅山下層式土器に比定できる。

7類a(図3・7-8, 9, 12) 内外面とも条痕で調整した上、外面に繩文を施した土器である。(8), (9)は外面を縦方向の条痕で調整したうえに繩文を施している。内面にも斜めの条痕文がみえる。(8)は胎土に繊維と雲母片を含み、(9)は繊維と石英片を含む。(10)は外面には条痕文で下ごしらえをしたうえに斜繩文を施している。内面にも斜めの条痕文が一面にみられる。胎土には繊維と石英粒を含む。堅く焼きしまった薄手の土器である。いずれの土器も早期末に位置するものである。

7類b(図3・7-2~7, 10, 11, 13, 14) 繩文を外面に、条痕文あるいは擦痕文を内面に施した土器である。(2), (3)は口縁部の破片である。口唇部と外面に斜繩文をめぐらせ、ともに胎土には繊維を含む。(3)は堅い焼きの土器である。(4)には横方向および斜方向の繩文、(10, 13)には斜繩文を施している。いずれも条痕文が内面に施され、また繊維を含んでいる。(4)は胎土中に多量の雲母片がキラキラと光る。(6)は羽状の繩文を外面に、そして粗い条痕文を内面に施している。胎土には繊維と多量の石英粒を含む。焼き上りは脆く厚手の土器である。(5), (11)は斜繩文を外面、擦痕文を内面に施している。(5)は小型哺乳動物の臼歯を使ったと思われる刺突文が特徴的である。(5), (11)ともに胎土に繊維を含み、(11)にはさらに多量の石英粒が混じっている。(7)は外面は擦痕仕上げ、内面はナデ調整仕上げである。擦痕文のうえにはさらに押圧繩文を加えている。胎土には繊維と石英片がいちじるしい。(10)は外面を羽状繩文で飾り、内面はナデ調整。繊維と石英粒を含んだ厚手の土器である。(7)は早期後半に、(2)~(6), (10), (11), (13)は早期末に位置するものである。(10)は前期の土器であろうか。

6類(図3・8-1~12)

条痕文あるいは擦痕文を内外面に施した一群の土器である。(1)は内外両面に粗い条痕文をみる。胎土には少量の繊維が認められる。(2)は条痕文を波状に施している。多量の繊維を含み、焼き上りはあまり良くない。(3), (6), (10)はいずれも細い条痕文を外面に施し、胎土には繊維を含む。(3)の胎土に石英片、(6)には石英片と雲母片が含まれている。(4)は擦痕文を頸部の外面に施している。胎土には繊維、石英粒ならびに多量の雲母片が目立っている。(5)は条痕文を内外面に施し、胎土には繊維と雲母片を多量に含む。(7), (9)は内外面とも条痕文で調整している。胎土中には繊維痕と石英粒が見うけられる。(10), (12)は横方向の条痕文を内外両面に細かく施している。繊維と多量の石英粒を含む。焼き上りは良好で薄手の一群である。いずれの土器も早期末に位置するものであろう。

第23層出土土器(図3・9, 図版16)

繩文時代早期の土器だけが出土している。

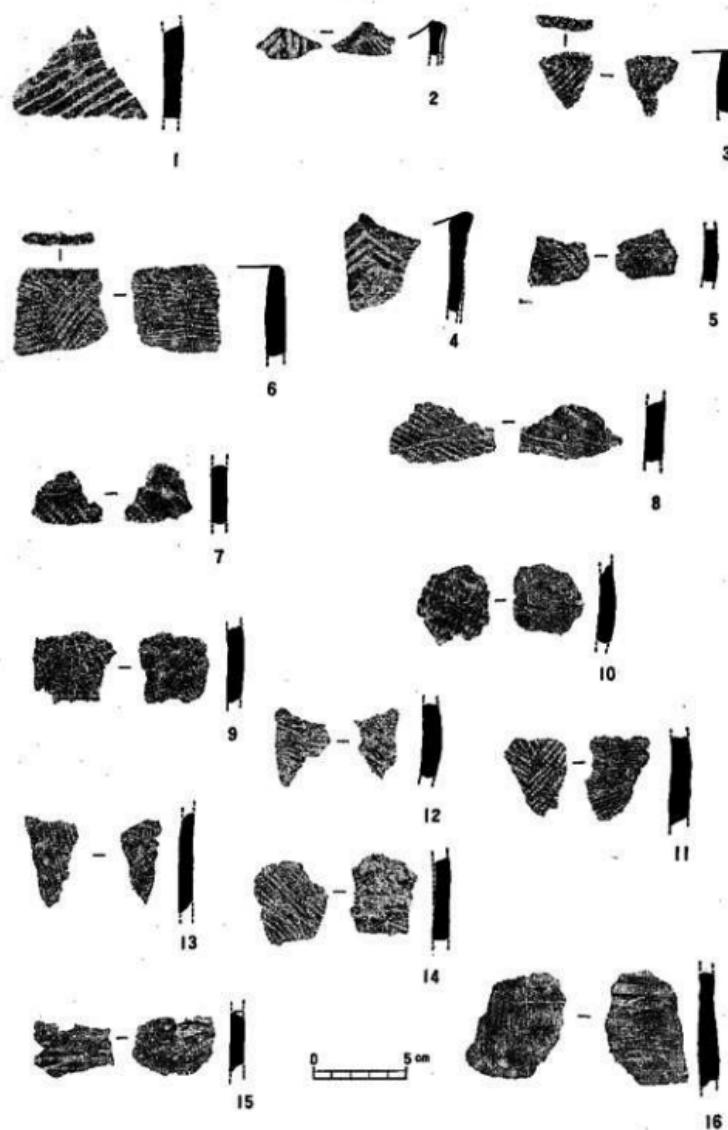


图3·9 第23层出土土器拓本

I群土器（1～16）

1類（1） 平行沈線と斜めの捺糸文を外面に施し、擦痕文を内面に施している。捺糸の圧痕は節の単位がやや大きく、強く押捺されているために各条ともに深い痕跡となっている。繊維と石英片を含む。焼き上りの良好な厚手の土器である。早期前半に位置づけられる類である。

3類a（4） 波状口縁の土器である。条痕文を外面に、擦痕文を内面に施している。外面では口縁に沿って平行沈線をひいている。胎土には繊維と多量の雲母片が目立つ。田戸下層式に比定できる。

4類c（2） 波状口縁の土器である。波頂部から縦方向に隆起線を下ろし、その隆起線によって区画された内側は、斜めの沈線で埋め、隆起線のうえには刻み目をつけている。内面は条痕仕上げで、胎土には繊維と石英片含入。茅山下層式土器に比定される。

6類（12～16）条痕文を内外両面に加えた土器で、胎土には繊維を含む。(3)には細い条痕文、(4)には幅の広い条痕文、(5)には粗い条痕文がみられる。(6)は胎土に少量の石英片、(7)は石英片と雲母片、(8)は石英片と多量の雲母片を含む。補修用と思われる孔を穿った例(9)がある。これらの土器はいずれも早期末に位置づけられる。

7類a（6） 斜繩文を内外面に施した類である。3類と異なる点は、条痕で調整したうえに、繩文を施していることである。(6)は口縁部破片である。条痕文のうえに斜繩文を施しているが口唇部にも繩文が加えられる。胎土には繊維と石英片を含んでいる。早期末に位置するものである。

7類b（3・5・7～11）外面に斜繩文を、内面に条痕文を施した土器である。外面に押圧繩文を加えたものもこの類に含めた。(3)は外面をナデ調整したうえに帯状に斜繩文を施している。内面に浅い条痕がみえる。口唇部にも繩文がある。胎土には繊維と石英片および雲母片が顯著である。焼き上りはあまり良くない。(7)は外面を擦痕で調整し、そのうえに押圧繩文を加えている。内面は条痕仕上げ。胎土には繊維、石英片、雲母片を含む。(8)は(7)と同様の調整をみるものである。焼き上りは良好、薄手土器。(5)、(9)は外面には斜繩文、内面に条痕文をみる。胎土に繊維と石英片とを含む。焼き上りの良い薄手の土器である。(8)は外面に斜繩文を、(10)は外面に羽状繩文、内面に条痕文を施したものである。(8)、(10)はともに胎土に繊維と石粒を含み、(9)は少量の石英片と雲母片を含む。(3)、(7)、(10)は早期後半、(5)、(8)、(9)、(10)は早期末の土器である。

搅乱層出土土器（図3・10、図版、17、18）

ここで搅乱層としたのは、遺物包含層の南端が崩れて調査区域内の南側斜面に堆積した層である。土の性状からみて、第20層を中心とするその上下の層が崩れて堆積したものと思われる。早期の土器の他に、前期および中期の土器が出土した。

I群土器（1～14）

4類a（1、4）蓮状工具で沈線を引いた土器で、繊維を含んでいる。(1)は外面を擦痕で調整し、そのうえに渦巻状の沈線文を施文している。土器の表面があれていますため、内面の調整の様子については明らかではない。口唇部には刻み目がつけられている。胎土に石英片を含む。(4)は横方向の条痕文を外面に施したうえに沈線で三角形の文様を描いている。内面は擦痕仕上げである。石英片および雲母片を含む。(1)、(4)ともに田戸上層式土器併行型式であろうか。

5類（5） 瓜形状の刺突文を施した土器である。ミガキ状の調整を外面に施し、そのうえに刺突文を二列めぐらしている。内面調整については定かではないが、浅い条痕文あるいは擦痕文を施したものと思われる。胎土には多量の石粒を含んでいる。早期後半に位置するものであろう。

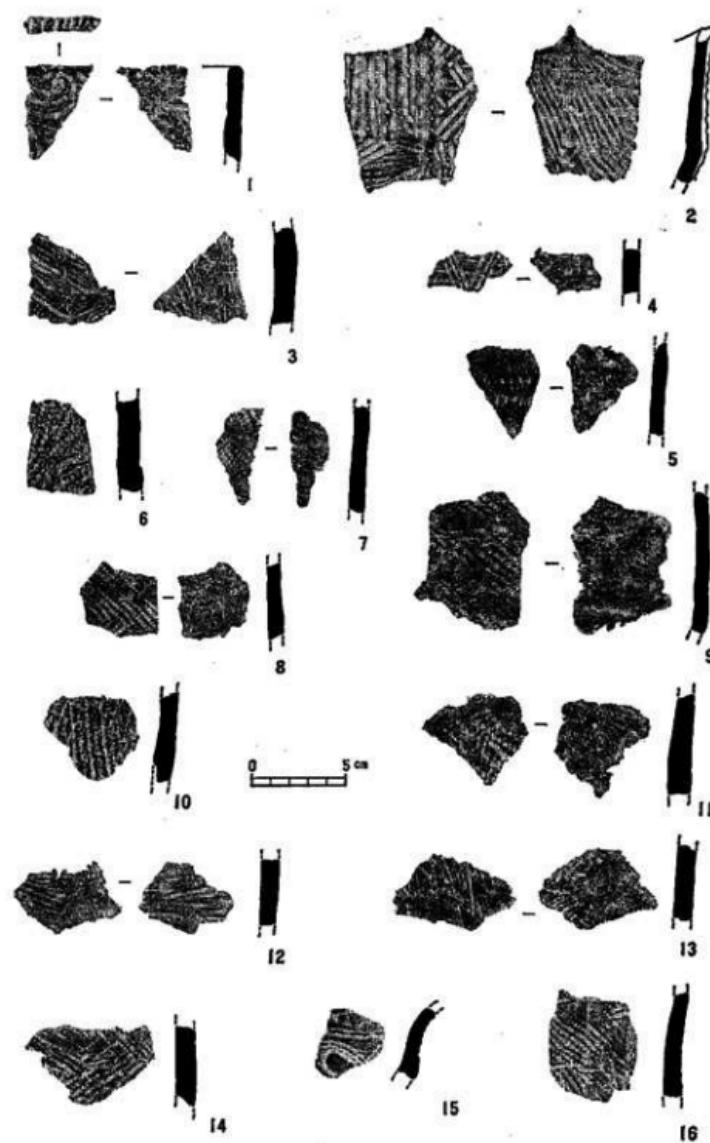


圖3・10 撥亂層出土土器拓本

4類c (2) 口縁部の破片である。小突起が突き出したような波状口縁を呈している。頸部は強く屈曲して段状になっている。横あるいは斜め方向の粗い条痕文を内外両面に施している。口縁の波頂部から頸部にかけては、縦に隆起線を加えている。隆起線によって分けられた区画には、隆起線と沈線を羅針状に配している。隆起線のうえには刻み目をつけ、その両側には沈線で縁取りをしている。胎土には石英片を含む。

6類 (3・12・13) 内外面条痕で調整し、胎土には纖維を含む類である。(3)は太い条痕文を外面に施し、内面は擦痕文を施したうえにさらに条痕文を施している。胎土に少量の石英片を含む。焼き上りの良好な厚手の土器である。(12)、(13)は横あるいは斜め方向の粗い条痕文を外面に施したもので、多量の石英片を含む。早期末に位置づけられる。

7類b (6~11, 14) 外面に斜繩文を、内面に条痕文あるいは擦痕文を施し、胎土に纖維を含む土器。(6)は斜繩文を施したうえに押し引き状の沈線を加え、内面に擦痕文を施している。石英片を含む。(7)、(11)は擦痕文のうえに帯状の斜繩文をめぐらし、擦痕文および浅い条痕文を内面に施している。(9)は外面には擦痕文のうえに斜繩文を、内面には擦痕文と浅い条痕文をみる。また内面には指頭圧痕が残っている。胎土には石英片と多量の石粒を含む。(10)は外面に繩文、内面に擦痕文を施している。胎土には多量の石英片が観察される。(8)、(14)は外面に羽状繩文を施している。内面は(8)では浅い条痕、(14)では擦痕で仕上げている。胎土には石英片を含む。これらは早期末に位置づけられるグループである。

II群土器 (15)

縄文時代前期後半の土器である。(15)は長円形の貼付文と半截竹管状工具による横線および弧状線が特徴である。ナデ調整を内面に施し、胎土に少量の石英片を含む。諸磯式土器併行型式である。

III群土器 (16)

縄文時代中期の土器である。(16)は結節繩文を外面に施し、内面はミガキ調整仕上げである。石英片を含む土器で、中期後半に位置づけられる。

第2節 石 器 (図3・11~13, 表3・1, 図版19~20)

出土した石器には石鎌、石匙、石錐、尖頭器、スクレーパー、使用痕あるいは調整痕のある剝片、敲石、凹石などがあり、合計点数は46点である。このうち石鎌を除く剝片石器類の原材料は、チャート製が一例のみられる他はほとんど頁岩製である。

石錐 (図3・11-1~32, 表3・1)

合計32点が出土した。原材料による内訳は黒曜石製が26点、チャート製が6点で、前者が75%を占める。

長径3cm内外の大型のものと1.5~2.5cmの小型のものに大別できる。前者は全体に部厚く、剥離痕も大きい。側縁は外側する傾向がある。小型のものは全出土例の80%以上の比率を占める。大型例に比べて一般に精巧に作られ、表裏両面とも入念な調整が加えられている。形態はいずれも二等辺三角形、無茎式で、基部は凹基式が大半を占め、平基式は少數例をみるだけである。凹基式の中では、抉りの浅いものが多いが、抉りが深いもの、また深くてU字形をしたものもわずかずつ含まれている。浅い抉りの類には左右非対称に作られた例が含まれる。(2)は石鎌の中に含めたが、上下両端と右側縁を欠いているので正確な形態はつかない。

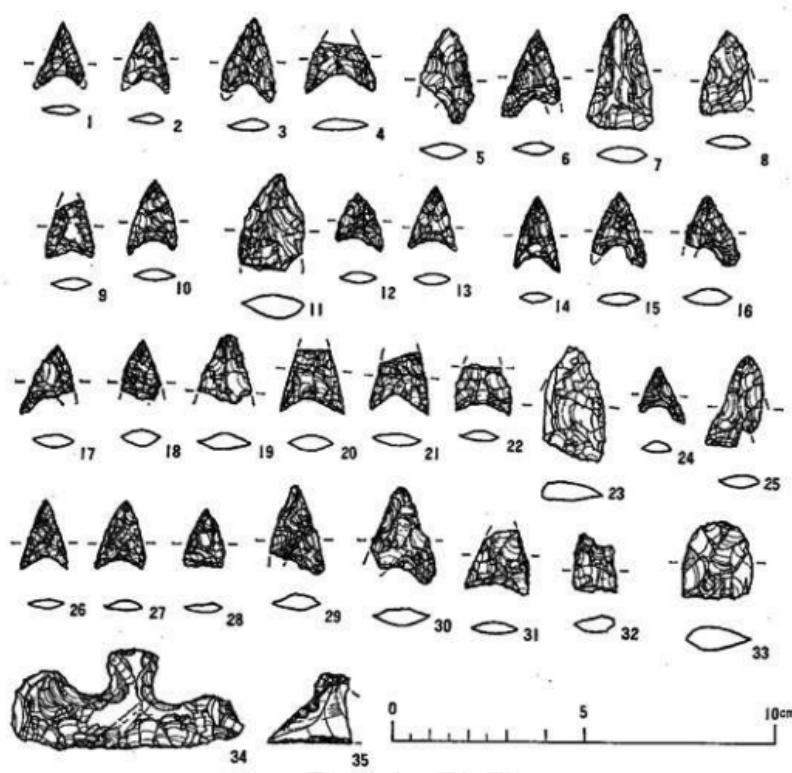


図3・11 出土石器実測図(1)

石匙 (図3・11-34, 35)

黒曜石製の横型石匙2点が出土した。34は大きめのつまみがつき、体部は横に長いが厚みがありぐんぐりした形態で、両面加工により整形されている。刃部はわずかに外彫する。16層出土。35は薄い剝片を用いて三角形状に仕上げられ、刃部はまっすぐである。刃部の加工は片面から行なわれているが、その他の縁辺は両面加工によって整形されている。右側縁は使用中に折損したらしく、その後折損部にあらためて調整を加えて使用したようである。20層出土。

石錐 (図3・12-2)

最大厚約9mmの縦長剝片を用い、両側縁の下半部に剥離を加えて先端を尖らせたもので、基部には平坦打面がのこる。先端1cmの間は稜が著しく磨耗して断面は円形をなし、錐として使用されたことが明らかである。背面先端部には表皮がのこっている。20層出土。

表3・1 出土石器一覧表

番号	原材	最大長 mm	最大巾 mm	重さ g	層位	備考
1	チャート	(16)	(13)	0.5	2層	脚部両端欠
2	黒曜石	(17)	(12.5)	0.5	タ	"
3	タ	22	14	0.6	タ	脚部片端欠
4	タ	(14.5)	19	0.6	タ	先端欠
5	タ	24.5	(14.5)	1.0	タ	片脚欠
6	タ	23	(15)	0.8	3層	片脚欠
7	チャート	30	17.5	2.5	10層	
8	黒曜石	22	(14)	1.0	タ	側部欠
9	チャート	(15)	13	0.6	11層	先端欠
10	黒曜石	19.5	12.5	0.5	19層	
11	チャート	(25)	(17)	2.7	タ	両脚欠
12	黒曜石	15	12.5	0.4	20層	両脚端わざかに欠 片脚端欠
13	タ	16	(17)	0.4	タ	
14	タ	19.5	12	0.5	タ	
15	タ	20	(14)	0.5	タ	片脚端欠
16	チャート	18	(14)	0.7	タ	片脚欠
17	黒曜石	17.5	(14.5)	0.6	タ	"
18	タ	(15)	(10.5)	0.6	タ	両脚欠
19	タ	(17.5)	(14.5)	0.9	タ	"
20	タ	(16.5)	16.5	0.8	タ	先端欠
21	タ	(16)	16	0.5	タ	"
22	タ	(13)	15	0.6	タ	"
23	タ	29.5	(16.5)	2.5	タ	側部欠
24	タ	14.5	12	0.3	不明	
25	チャート	24	(15)	0.9	タ	片脚欠
26	黒曜石	18	12.5	0.4	擾乱層	
27	タ	18	13.5	0.5	タ	
28	チャート	15	11	0.4	タ	
29	黒曜石	23	(14)	1.0	タ	片脚欠
30	タ	25	(17)	1.2	タ	"
31	タ	(17)	17	0.9	タ	先端欠
32	タ	(15)	(12)	0.7	タ	

() 内は推定値

尖頭器(図3・12-6)

粗面岩あるいは砂質頁岩製。木葉形尖頭器の基部と思われるが、剥離面は大きく、ステップ・フレーリングが目立つ。背面の剥離痕は右側の周縁部だけに片寄っている。完成品ではなくて、製作途中で折れたために廃棄したものであろうか。20層出土。

スクレーパー

スクレーパーの類に含めた出土例は3点である。

1 (図3・11-33)

黒曜石製で、上縁は丸味をおびるが、下縁は直線状で、一見サムネイル・スクレーパーのよう

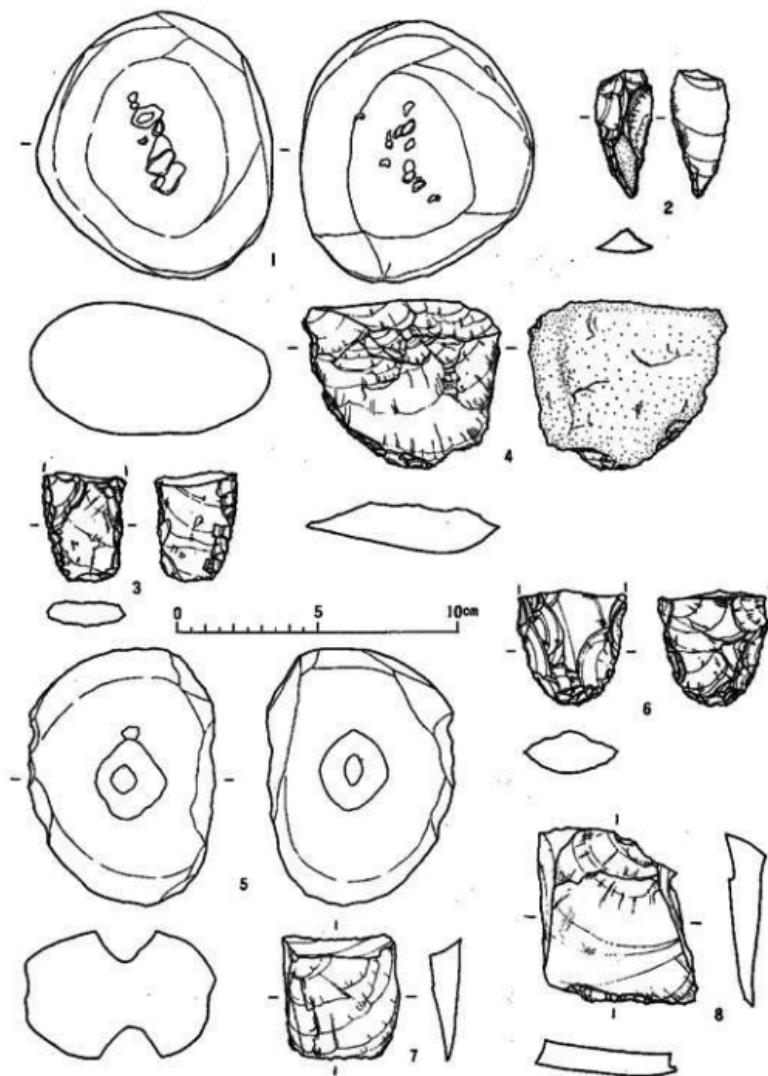


图 3·12 出土石器実測図(2)

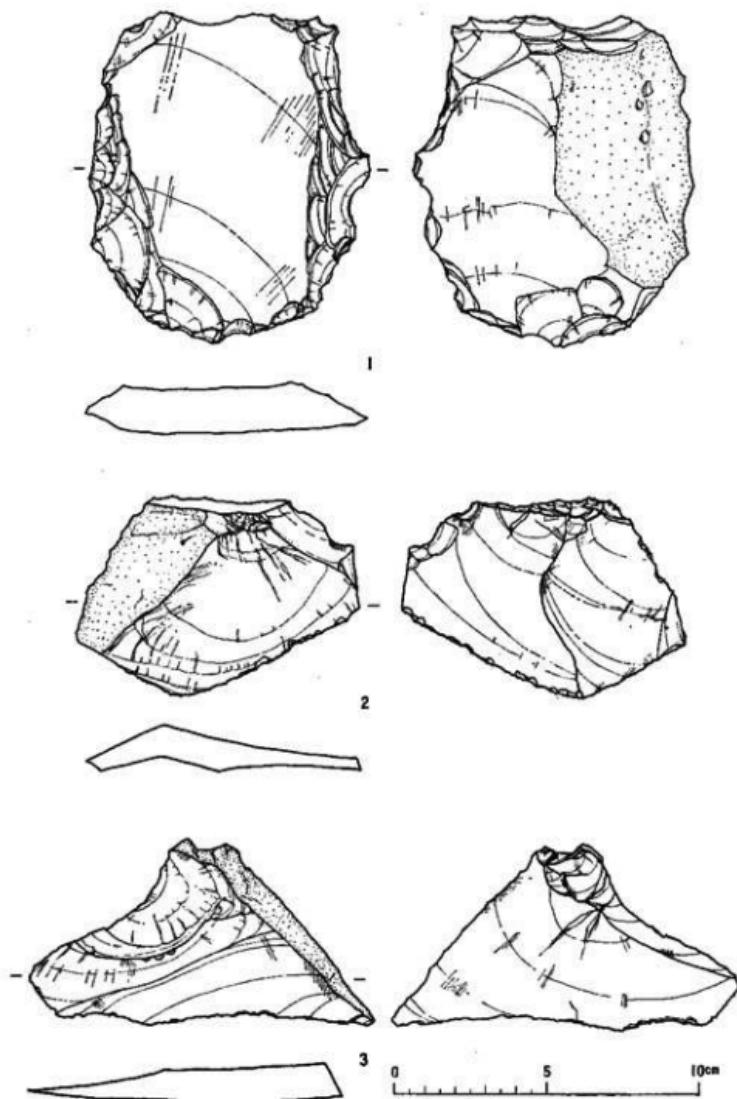


図3・13 出土石器実測図(3)

である。しかし、全周縁にわたって剝離痕がめぐり、ラウンド・スクレーパーである。16層出土。

2 (図3・12-3)

石英安山岩あるいは粗面岩製石器である。現存の形態は長方形をしており、上端は折損している。他の三方の縁辺には両面より剝離された調整痕がみられる。木葉形尖頭器の基部であったものかもしれない。20層出土。

3 (図3・13-1)

黒色頁岩製。厚さ1.5cmほどの長方形の大型の剝片を用い、正面では左右と下縁に、背面では上下と左の縁に大きな剝離痕がある。背面の右側部分には表皮がのこる。打製石斧としての機能をもった石器とみるべきであろうか。20層出土。

使用痕あるいは調整痕のある剝片

1 (図3・12-4)

上縁に平坦打面をもつ三角形状の剝片で、背面には全面にわたって表皮がのこる。主剝離面の左側縁に片側から調整を加えたスクレーパーなのか、あるいは剝片の自然の鋭利な縁辺を利用して刃部としたものなのか、判断の難しいところである。20層出土。砂質頁岩製。

2 (図3・12-7)

打撃点が左上方にのこる剝片。一边が4cmほどの方形をし、背面には表皮がのこる。下縁はギザギザの刃こぼれの状態を示すが、調整を加えたと思われるような剝離痕はみられない。搅乱層より発見されたものである。砂質頁岩製。

3 (図3・12-8)

上端の表皮の部分を打面として剝離された方形の剝片で、下方の縁に片側からつけられた小剝離痕がみえる。自然の縁辺を刃として利用したためにできた刃こぼれのあとかもしれない。搅乱層より発見。砂質頁岩製。

4 (図3・13-2)

上端に平坦打面をのこす大型の不定形剝片で、下縁に刃部を作り出したらしい小剝離痕がみられる。15層配石造構内出土。頁岩製。

5 (図3・13-3)

三角形状の大型剝片で、下縁の直線状の縁辺に使用痕と思われる不規則な細かい刃こぼれのあとがみえる。20層出土。黒色頁岩製。

敲石 (図3・12-1)

多孔質安山岩製。厚さ約5cmの扁円形の自然礫の表裏両面中央部に敲打痕が著しい。2層出土。

圓石 (図3・12-5)

流紋岩製で、長円形の平たい自然礫を利用した石器。二次的に火熱を受けて焼けただれている。表裏両面とともに中央部には深さ1cmほどの凹みがあり、また左右両側縁には敲打痕が目立っている。12層出土。

第3節 骨角牙製品 (図3・14, 図版18)

尖頭具および竈状製品などの骨角牙製品は総数で10点を数える。そのうち、シカの骨角を材料として加工したものは9点で、9割を占める。これらの骨角製品はいずれも第20層および第23層から出土したものである。

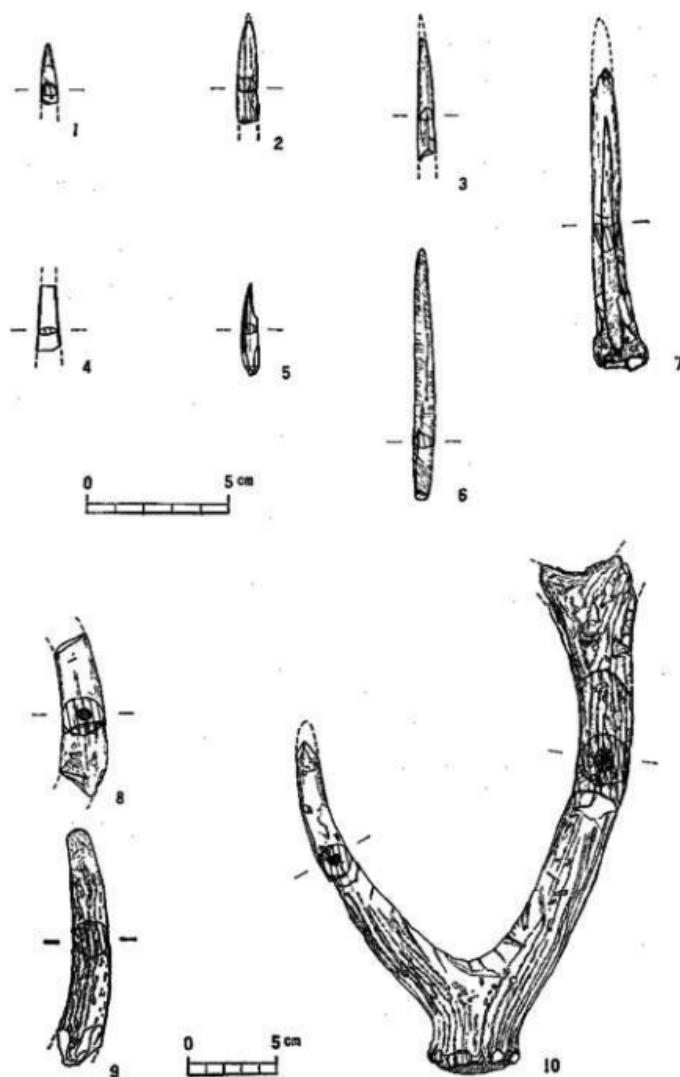


図3・14 骨角牙製品実測図

A 尖頭具（1～4, 6）

鹿角製品が4点と骨製品が1点の計5点が出土した。(1)～(3)は鹿角を細く縦割りし、先端部を削って尖らせたものである。また(1), (2)は粗研ぎをした上でさらに丁寧に研磨を加えている。(2), (3)の例では先端部が焼けて炭化している。(1), (3)は第20層から出土したもので、(1)は現存長2.1cm, (3)は4.4cmである。(2)は第23層からの出土品で、現存長3.6cm。(6)は鹿角を細く縦割りしたものを尖頭具に加工したものである。先端部は削って尖らせ、また基部は飼育部よりやや細めに仕上げている。一部分自然面を残しているが、他の大部分はすべて粗く研ぎだされている。研磨は先端部および基部では斜め方向に、飼育部では横方向に、基部では縦方向に行われている。第23層から出土したもので、現存長は8.8cmである。(4)はシカの中足骨を加工したもので、全面にわたって丁寧な研磨が施されている。焼けて全体が黒く変色している。第23層から出土し、現存長は2.3cmである。

B 篠状製品（7）

オスのシカの中足骨近位部の後外側を材料として加工したものである。一方の端を削って尖らせているが、他方の端（基部）は関節部をそのまま残している。先端部には丁寧な研磨のあとがみられ、基部には数条の切り込みを加えたあとがのこっている。第23層からの出土品で、現存長は10.7cmである。

C 加工痕あるいは使用痕のある鹿角（8～10） 合わせて3点が出土した。(8)は基部に斜め方向から切り込みを入れた痕があり、先端部には擦痕がみえる。火熱をうけて全体が脆弱になつてゐる。第11層から出土したもので、現存長は7.3cm。(9)は角尖部が著しく磨滅し、スponジ質が露出している。先端部の周囲には使用痕がみられ、基部には折り取られたような痕跡が残つてゐる。第23層からの出土で、現存長は10.5cmである。(10)はシカの右側の角である。角座骨は剥がれてみえないから、自然に落角したものと考えられる。第1枝角から第2枝角へうつる叉状部の内側には、10數か所に切り込みを加えている。第2枝角の角尖部には擦痕があるが、それがシカの生存時についたものか、人の手による使用痕であるかの判断はつきにくい。重量は254gであり、二又三尖の角としては、大きさの割りに軽いのは、鹿角に含まれている膠質が溶け出てしまつたためであろうかと思われる。

D 牙加工品（5）

イノシシの下顎左第2切歯を加工したものである。歯根部を斜めに切り取つてある以外には、加工をした痕跡はみられない。身体装飾品の作りかけの半製品であろうか。第11層からの出土で現存長は3.3cmである。

第4章 動植物遺存体

はじめに

長野県南佐久郡北相木村の板原岩陰遺跡（標高960m）では、1965年から1978年にわたって、故鈴木誠博士を代表とする調査団により、15回に及ぶ発掘調査が行われてきた。その成果は、西沢（1982）によって要約されている。

1983年10月27日より11月7日にわたって行われた第16回発掘調査では、従来調査が行われてきた岩陰の東側上部に接する岩陰の小区画が発掘された。東西1.6m、南北4.6mの区画が、深さ2.6mまで掘り下げられた。23層に区分された堆積土の量は、約5.5m³となる。出土土器片による時代区分では、縄文早期から中期にまたがる生活跡とされる（表4・2参照）。

発掘された堆積土はすべて水洗して、包含遺物を選別した。以下、得られた動植物遺存体の出土状況について報告する。

第1節 植物遺存体

検出された植物遺存体はきわめて少量で、エゾエノキ、コナラおよびオニグルミの3種であった。それらの出土状況は表4・1に示す如くである。

1) エゾエノキ *Celtis jessoensis* (ニレ科)

完形または二つに割れた核果の殻片が第20層から26点、擾乱層から4点ほどが出土している（図4・1）。従前の発掘の際にも出土が多かった。第1～第15回発掘調査についての報告（西沢、1982など）の中で、これまでムクノキとされていたものであるが、ここでエゾエノキに訂正する。

表4・1 植物遺存体の出土状況

出土層	エゾエノキ	コナラ	オニグルミ
2			
3			
10			
11		殻斗1点	
14			
15			
16			
19			
20	核果の殻片26点		
23		堅果1点(炭化)	
擾乱層	核果の殻片4点	堅果1点、殻斗1点	
計	30	4	1

エゾエノキは落葉高木で、果実は秋に黒く熟し、甘い。北海道から九州まで、温帯域に分布している（北村、1959）。各地の貝塚などによく見られるものであるといふ（南木睦彦氏の御教示による）。福井県鳥浜貝塚では、近縁で暖帯性のエノキ (*Celtis sinensis*) が記録されている（西田、1979, a)。

2) コナラ *Quercus serrata* (ブナ科)

ほぼ完形の堅果が擾乱層から1点、第23層から1点（炭化している）、堅果の殻斗が第11層から1点、擾乱層から1点出土している（図4・1）。

コナラは東日本低山帯の代表的落葉高木で、現在もこの地域に普通にみられる。コナラの堅果は、いわゆるドングリの1種で、水さらし、加熱処理によって、広く食用に供されてきたものである（渡辺、1975；粉川、1983）。

3) オニグルミ *Juglans mandshurica* (クルミ科)

核果の小殻片が1点みられただけである（第10層）（図4・1）。オニグルミは、山野の流れに沿って多く生育する落葉高木で（牧野、1977）、現在もこの地域に普通にみられる。これの核果は、クリやナラ類とともに、植物性食物として重要な位置を占めていたであろう。クリ、ナラ類、オニグルミなどを含むクリ帯の所在、「大体に於て縄文文化圏の地理的範囲を決定する一つの要因となっていることは否定出来ない事実のようである」と酒詰（1961）は述べている。オニグルミは以前の発掘時にも、少量の殻片が得られている。

第2節 動物遺存体

出土した動物遺存体の重量は表4・2に示す如く、総計約7kgに達した。現生の長野県産中型イノシシ1頭分の乾燥全身骨重量は約5kg、同じく雌のシカ成獣のそれが約4kgであるから、これで換算すると、イノシシ1.5頭分くらい、シカならば2頭分くらいの骨の量に相当する。

表4・2 出土骨片の重量

出土層	出土重量 (kg)	總量に対する比 (%)	出土土器による 時代区分	出土層	出土重量 (kg)	總量に対する比 (%)	出土土器による 時代区分
1			中世	14	0.03	0.43	縄文時代早期
2	0.01	0.14	縄文時代中期	15	0.01	0.14	同 上
3	0.19	2.73	縄文時代前期	16	0.16	2.30	同 上
4			縄文時代前期 (早期のもの混在)	17			同 上
5			同 上	18			同 上
6			同 上	19	0.21	3.01	同 上
7			同 上	20	4.51	64.71	同 上
8			同 上	21			同 上
9			同 上	22			同 上
10	0.58	8.32	同 上	23	0.29	4.16	同 上
11	*		同 上	擾乱層	0.90	12.91	
12	0.08	1.15	縄文時代早期				
13			同 上	計	6.97	100.00	

*）微量

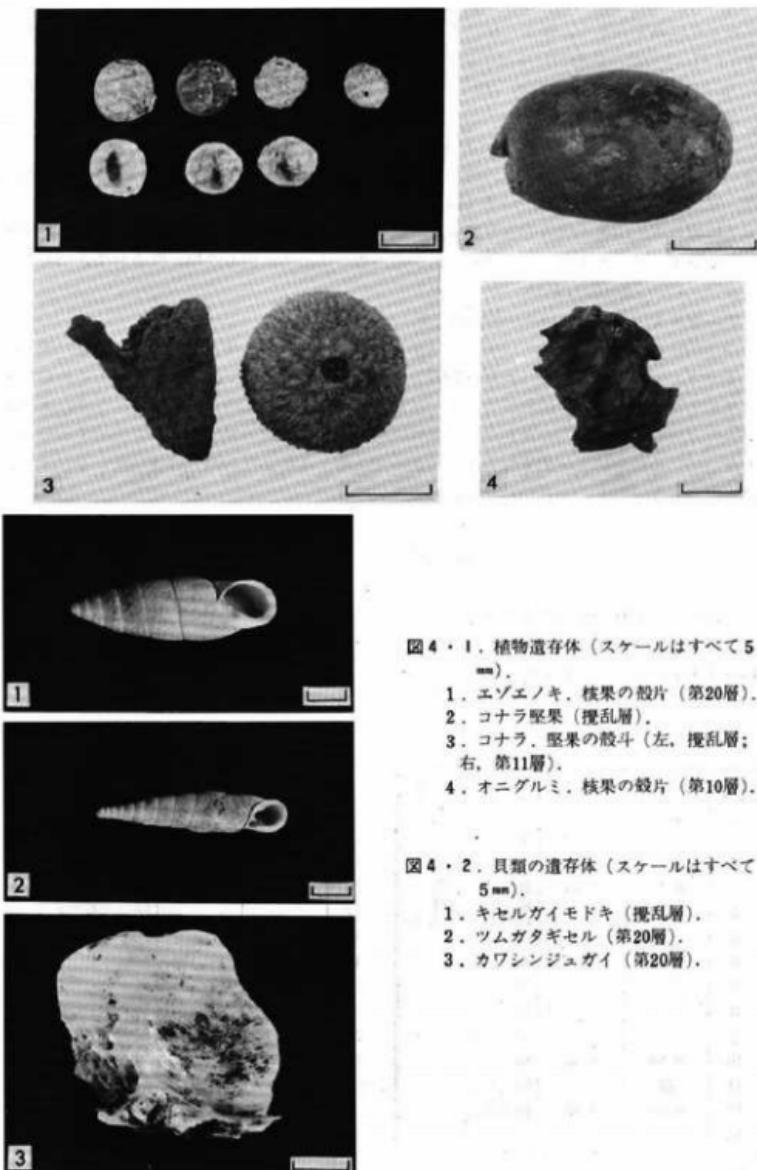


図4・1. 植物遺存体（スケールはすべて5mm）。

1. エゾエノキ、核果の殻片（第20層）。
2. コナラ堅果（擾乱層）。
3. コナラ、堅果の殻斗（左、擾乱層；右、第11層）。
4. オニグルミ、核果の殻片（第10層）。

図4・2. 器類の遺存体（スケールはすべて5mm）。

1. キセルガイモドキ（擾乱層）。
2. ツムガタギセル（第20層）。
3. カワシンジュガイ（第20層）。

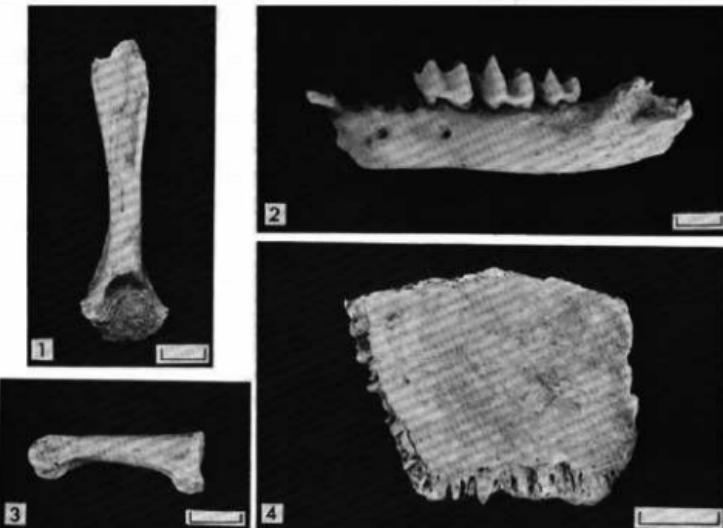


図4・3 遺存骨・歯

1. ヒキガエル。上腕骨（左）（第23層）（スケールは5mm）。
2. ヒミズ。下顎骨（左）（犬齒、第1・第2・第3大臼齒植立）（スケールは2mm）。
3. ニホンザル。胫骨（第20層）（スケールは5mm）。
4. ニホンザル。側頭骨（右）（第20層）（スケールは1cm）。

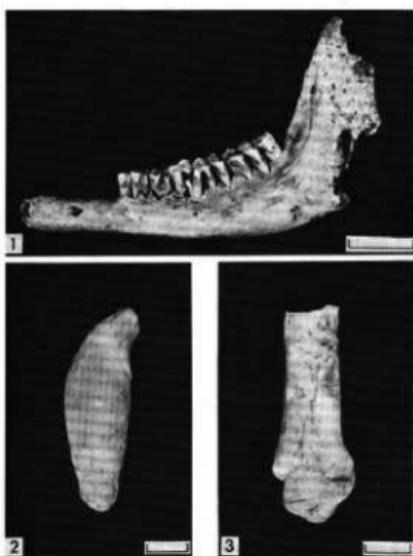


図4・4 遺存骨・歯

1. カモシカ。下顎骨（左）（第2・3・4小臼齒および第1・第2・第3大臼齒植立）（擾乱層）（スケールは3cm）。
2. ツキノワグマ。下顎犬齒（左）（第10層）（スケールは1cm）。
3. オオカミ。第3中足骨（左）（第23層）（スケールは5mm）。

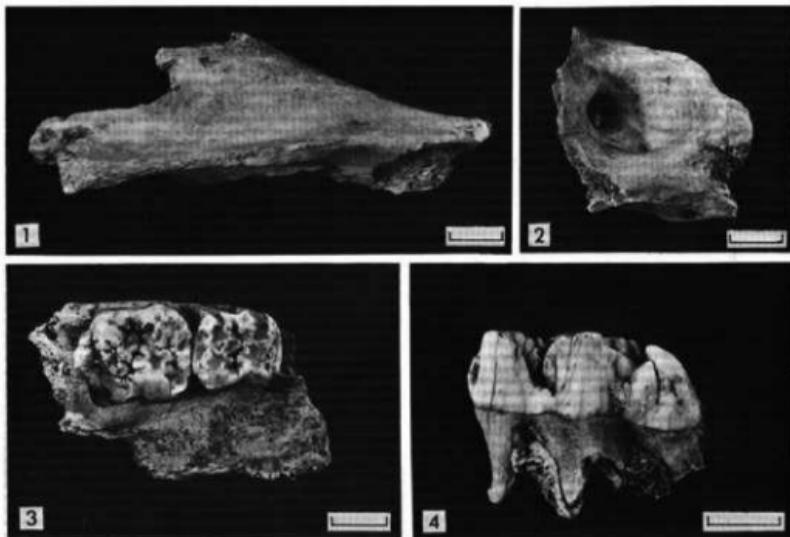


図4・5. イノシシの遺存骨・歯 (スケールはすべて1cm).

1. 肩甲骨(右) (第20層).
2. 環椎(第1頸椎) (第20層).
3. 上顎骨(右) (第1・第2大臼歯植立) (第16層).
4. 上顎第3臼歯(右) (第16層).

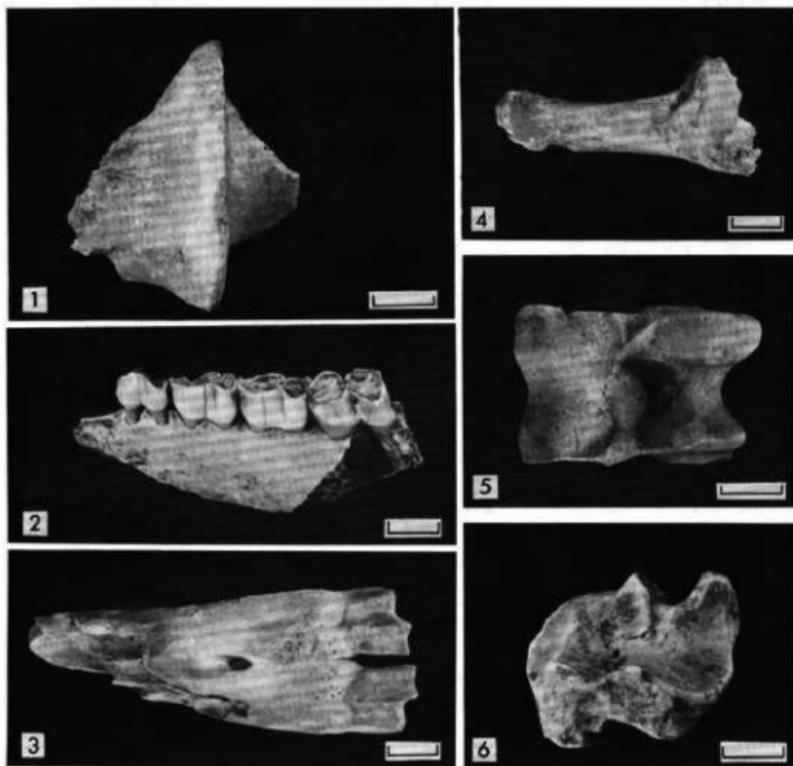


図4・6. シカの遺存骨・歯 (スケールはすべて1cm).

1. 軸椎 (第2頸椎) (第20層).
2. 下顎骨 (左) (第2・3・4小白歯および第1大臼歯植立) (第20層).
3. 中足骨 (左) (第23層).
4. 距骨 (左) (第10層).
5. 距骨 (右) (第20層).
6. 中心第4足根骨 (右) (第20層).

表4・3 小動物の出土状況

出土層	陸貝類		淡水貝類	両生類	鳥類
	ツムガタギセル	キセルガイモドキ			
2					
3					
10			約1ヶ分		
12					
14					
15					
16					
19					
20	1点(完形)		約3ヶ分	1点(尾椎)	1点(長管骨骨幹)
23			2ヶ	1点(上腕骨、左)	2点(大腿骨、長管骨骨幹)
擾乱層		1点(完形)		4点(上腕骨、右:橈尺骨、左:腸骨、左:椎骨)	2点(大腿骨)
最 少 個体数	1	1	3	2*	

* 第23層と擾乱層の上腕骨は、大きさからみて別個体。

遺存体としては、哺乳動物の骨片が殆んどであるが、第20層(縄文早期)に集中して出土しており(64.71%)、他の層位からの出土量はきわめて少なく、擾乱層の12.91%を除けば、第10層の8.32%がそれに次ぐ(表4・2)。

動物の骨は、細かく破碎されており、完形をとどめているものはきわめて少ない。そのため、骨片の種および部位の同定は困難で、すべての骨片を同定するためには、今後、長期にわたる作業が必要である。しかし、シカおよびイノシシの骨片が殆んどで、その他の動物種のものがきわめて少ないと確かである。

同定できた動物種は、陸貝類2種、淡水貝類1種、両生類1種、鳥類2~3種、哺乳類8種である。以下、それらの出土状況をまとめてみた。

1. 陸貝類

陸貝類としては、ツムガタギセルおよびキセルガイモドキの2種が検出された(図4・2、表4・3)。第15回までの発掘においても、この2種が出土しており、ほかにミスジマイマイ、ヒダリマキマイマイ、ニッポンマイマイ、バツラマイマイの計6種がみられている(西沢、1982)。

- 1) ツムガタギセル *Pinguisphaedusa platydera* (柄眼目、キセルガイ科)

第20層からほぼ完全な貝殻1点が出土した。現在、長野県内に広く分布している種で、南佐久郡下でも川上村、南牧村などで採集されている(飯島国昭氏の御教示による)。

- 2) キセルガイモドキ *Mirus reinianus* (柄眼目、キセルガイモドキ科)

擾乱層からほぼ完全な貝殻1点が見出された。本種も現在、長野県内に広く分布しており、南佐久郡下でも川上村、南牧村、八千穂村などで採集されている(飯島国昭氏の御教示による)。これらの陸貝類が、装飾品などに利用する目的で遺跡内に持ち込まれたものか、否かについては、これだけの資料では明らかでない。

2. 淡水貝類

淡水貝類としてはカワシンジュガイ (*Margaritifera laevis*, 真弁鰓目, インガイ科) 1種が見出されただけである。第10層から約1ヶ分, 第20層から約3ヶ分, 第23層から2ヶ(片側を1ヶとする)が得られた(図4・2, 表4・3)。

カワシンジュガイの幼生は、1ヶ月ほどヤマメなどに付いて栄養を摂り、幼貝となる。本州では東北地方から山口県に至る、主として日本海側の山間の清流に生息する(平瀬・黒田, 1959)。長野県内では木崎湖周辺の河川などに分布が知られているが(中村, 1980), 現在、北相木川にはみられないようである。しかし、第15回までの発掘ではかなり多く出土しており、ベニガラのついた例もみられている(西沢, 1982)。かつては北相木川にも分布していたにちがいない。長野県下では小県郡真田町菅平高原の唐沢岩陰遺跡(縄文晩期~弥生後期)からも出土例が知られている(金子, 1967)。

この貝の内面の真珠層は光沢が美しく、またヨーロッパでは昔、この貝から真珠を採取していたというから(中村, 1980), 食用のほかに、装飾品としての用途が広かったものと考えてよいだろう。また、桙太(サハリン)においては、樹皮を剥ぐ小刀の代用として、この貝殻を用いるという(平瀬・黒田, 1959)。

第15回までの発掘では、カワシンジュガイのほかに、淡水貝類として、カラスガイ、マツカササガイもみられている(西沢, 1982)。今回は、海産の貝類はみられなかった。

3. 両生類

両生類ではヒキガエル (*Bufo bufo*, 無尾目, ヒキガエル科) が認められただけである。第20層から尾椎、第23層から上腕骨(左)が、擾乱層から上腕骨(右)、桡尺骨(左)、脛骨(左)および椎骨各1点ずつが得られた(表4・3)。第15回までの発掘時にも多数のヒキガエル骨片が得られているが、出土状況については、未だ整理ができていない。

ヒキガエルの骨は、全国各地の遺跡に出土例がみられているが、量的には多くないようである。

4. 鳥類

2~3種を含む骨片6点ほどが検出された。いずれも中・小型鳥類のものであるが、種名を同定するまでに至っていない(表4・3)。今後、精査する予定であるが、いずれにしても量的には多くない。

5. 哺乳類

哺乳類ではヒミズ、ニホンザル、ツキノワグマ、オオカミ、アナグマ、イノシシ、シカ、カモシカの4目8種がみられた。第15回までの発掘では6目22種の哺乳類が出現しているので(宮尾ほか, 1980), 今回の出土哺乳類はきわめて貧弱である。しかし、ヒミズ(食虫目、モグラ科)は、従前の発掘ではみられなかつたものである。

シカおよびイノシシを除く哺乳類については、同定できた骨片のすべてについて、出土状況を表4・4に示した。量的にはいずれも微々たるものであった。

1) ヒミズ *Urotrichus talpoides* (食虫目、モグラ科)

第19層から左側下顎骨の骨体部が1点出土している。犬歯と第1・2・3大臼歯が植立していた(図4・3)。第15回までの発掘ではヒミズは見出されなかつたが、食虫目の種として、モグラ

表4・4 シカ、イノシシを除く哺乳動物の出土状況

出土層	食虫目	靈長目	食肉目	偶蹄目		
	ヒミズ	ニホンザル	ツキノワグマ	オオカミ	アナグマ	カモシカ
2						
3					2点 (大腸骨) (脛骨)	1点 (下顎骨開節) (突起、左)
10			1点 (下犬歯、左)			
12						
14						
15						
16			1点 (中足骨)		1点 (蹠骨)	
19	1点 (下顎骨、左)					1点 (橈骨片)
20		1点 (側頭骨、右)	2点 (中足骨) (肋骨)			1点 (肩甲骨片)
23		2点 (中足骨) (趾骨)		1点 (中足骨)		
擾乱層			2点 (下顎骨片) (左右各1点)		1点 (大腸骨)	1点 (下顎骨、左) (ほぼ完形)
最少個体数	1	1	1	1	1	1

およびジネズミが少數出土している（宮尾ほか、1980）。酒詰（1961）によれば、関東地方の西岬鉄神社洞窟内にヒミズの出土例があるといふ。

モグラ科動物の毛皮はきわめて良質で、ヨーロッパおよびアメリカでは、かつて大量に利用されていた（Godfrey and Crowcroft, 1960）し、日本でも第二次大戦中、軍用毛皮として利用されたようである（宮尾、1983参照）。しかし、何分にも小型であるために、その利用効率は低く、大量に捕獲されないと実用に供することはできない。遺跡からの出土状況をみると、これらが積極的に利用されたとは考え難い。

2) ニホンザル *Macaca fuscata* (靈長目、オナガザル科)

第20層から側頭骨（右）1点、第23層から中足骨と趾骨各1点が出土したにすぎない（図4・3）。出土骨の数からみた最少個体数は1頭である。第15回までの発掘において、下半部の層位ではシカに次いで多くの個体が出土しており、蹠骨と距骨の合計数では、シカ195ヶに対して、ニホンザル64ヶが見出され、イノシシの49ヶよりも多かった（宮尾ほか、1980；西沢・宮尾、1981）。長野県唐沢岩陰遺跡（繩文晩期～弥生後期）でも出土量は多く、シカ10体分、ツキノワグマ15体分、イノシシ7体分に対して、ニホンザルは13体分と推定されている（金子、1967）。今回の発掘では、シカ7頭、イノシシ5頭（後述）に対して、ニホンザルは1頭の割合になる。ニホンザルは、貝塚や洞穴遺跡から知られる代表的な中型獣で、その星行性の故に、捕獲の対象とされ易かった点があげられている（金子、1983）。

3) ツキノワグマ *Selenarctos thibetanus* (食肉目、クマ科)

第10層から下頸犬歯（左）1点（図4・4），第16層から中足骨1点，第20層から中足骨および肋骨各1点，擾乱層から下頸骨関節突起部が左右各1点見出された。推定最少個体数は1頭である。第15回発掘までの出土量は，大型獸の中ではツキノワグマが最も少なく，踵骨および距骨の出土合計数は，シカ195，ニホンザル64，イノシシ49，カモシカ27に対して，ツキノワグマは21であった（宮尾ほか，1980）。長野県小県郡深町遺跡（縄文晚期）でもツキノワグマはシカ，イノシシにくらべて，きわめて少なかったようである（西沢，1979）。しかし，長野県唐沢岩陰遺跡（縄文晚期～弥生後期）では，ツキノワグマが最も多かったという（金子，1967）。また，新潟県室谷洞穴（縄文前期）でも，カモシカとともにツキノワグマが主体となっていたといわれる（金子，1983）。

4) オオカミ *Canis lupus* (食肉目，イヌ科)

第23層から左第3中足骨の遠位半部1点が見出された（図4・4）。この骨片は焼かれて，灰白色を呈していた。

第15回までの発掘においても，下頸右第1大臼歯をはじめ，若干のオオカミ遺存骨と歯が出土している（宮尾ほか，1980）が，まだ整理できていない。また，犬歯に穿孔した垂節1点も出土している（西沢，1982）。

オオカミの遺骸の出土例は，貝塚その他30ヶ所ほどで確認されているが，1遺跡での出土数が少なく，特殊な部位（犬歯，下頸骨など）に偏していること，穿孔などの加工を見るという特殊性があるといわれる（金子，1983）。柄原遺跡の場合も，この指摘に合致するように思われる。

今回出土した左第3中足骨の計測値は次の如くである。計測点は齊藤（1963）に準拠した。

内外側上頸間径（齊藤43図，計測点3～3）：9.95mm。

下端前後径（同上，計測点14～15）：8.45mm。

下端横径（同上，計測点2～3）：7.80mm。

5) アナグマ *Meles meles anakuma* (食肉目，イタチ科)

第3層から大腿骨（左）と脛骨（右）各1点，第16層から脛骨（左）1点，擾乱層から大腿骨（右）1点を見出したにすぎない。いずれも骨端部が剥離した幼若令個体のものであった。最少個体数は1頭である。

第15回までの発掘においても，下頸骨は5点出土したにすぎず，下頸骨の出土数は，中型食肉類ではテンの32点を除くと，タヌキ9点，キツネ3点，イタチ2点，カワウソ2点と，いずれも少なかった（宮尾ほか，1980）。今回もその例にもれないが，從前みられたテン，タヌキ，キツネ，イタチ，カワウソを欠いている点が注目される。また，ノウサギ，ムササビ，リス，ネズミ類なども欠いている。発掘面積が狭小であったことも，その原因の一部になっているかもしれない。

長野県唐沢岩陰遺跡（縄文晚期～弥生後期）でも，カワウソ，アナグマ，ノウサギはきわめて出土量が少なく，それぞれ1体分にすぎなかったという。ただし，タヌキは7体分がみられている（金子，1967）。全国的には，東北地方より関東以西の貝塚でアナグマの出土が多いらしい（金子，1983）。

6) カモシカ *Capricornis crispus crispus* (偶蹄目，ウシ科)

第3層から下頸骨関節頭部（左）1点，第20層から肩甲骨片1点，第19層から橈骨片1点，擾乱層からはほぼ完形の下頸骨（左）1点（図4・4）が出土している（ただし，関節頭部を欠いている）。最少個体数は1頭である。シカの7頭，イノシシの5頭（後述）に比較して少ない。

第15回までの発掘による出土量は，踵骨と距骨の合計数で27ヶ，シカの195，ニホンザルの64，

イノシシの49に比較して少ないが、ツキノワグマの21よりは多かった（宮尾ほか、1980）。長野県唐沢岩陰遺跡（縄文晚期～弥生後期）でも、シカ10体分、イノシシ7体分、ツキノワグマ15体分に対して、カモシカは1体分と少ない（金子、1967）。しかし、新潟県の室谷洞穴（縄文前期）では、ツキノワグマとともにカモシカが主体をなしていたという（金子、1983）。

カモシカは急峻な山岳地帯に生息する場合が多いので、一般的には獵獲の対象になり難かったのかもしれない。

7) イノシシ *Sus scrofa leucomystax* (偶蹄目、イノシシ科)

次に述べるシカとともに、出土骨の大部分を占めている。しかし、細かに破碎されているために、同定の困難な骨片が多い。また、相対的な出土量を知るために、現時点ですべての骨片を同定する必要もない。以下に基準に従って、骨片を選択的にとりあげ、それらを主要骨として、出土状況をみた。

a) 長管骨は、骨端軟骨部ではずれた遊離近位端（A）および遠位端（B）、すなわち幼若合個体の骨と、関節面を伴う近位部骨幹（C）および遠位部骨幹（D）、すなわち骨端軟骨の閉鎖した成獣の骨に区分して、出土骨数を算定した。関節面を欠いた骨幹部のみの破片は、個体数算定の指標としては意味が小さいので、ここではとりあげなかった。長管骨のうち、尺骨は、滑車切痕部を伴う骨片だけを選択した。

b) 肩甲骨は関節窩を伴う骨片のみを、寛骨については寛骨臼部を伴う骨片のみを選択した。

c) 膝蓋骨、手根骨、足根骨および指趾骨（中手骨、中足骨も含む）は小型であるため破碎されていることが少なく、ほぼ完全な形で出土するので、これらの数によって、利用された動物の相対的な個体数を推定する手がかりとして好都合である。特に足根骨のうちの蹠骨および距骨などが、この目的にかなっている（宮尾ほか、1980）。

d) 椎骨については、環椎（第1頸椎）と軸椎（第2頸椎）の破片のみを選択した。

e) 肋骨については、肋骨頭を伴う破片のみを選択した。

f) 下顎骨については、関節突起部を伴う破片のみを選択した。

g) 頭蓋骨の破片は、ここではとりあげなかった。その理由は、長管骨の骨幹部の場合と同じである。

h) 歯は、同定可能なものをすべてをとりあげた（頭骨に植立しているものも含める）。

以上の基準に基づいて主要骨片および歯を選別した結果、それらの出土状況は表4・5および表4・6の如くにまとめられた。

四肢および体幹の主要骨は、第20層に集中して出土しており、他の層位にはきわめて少ない。

右距骨が2点得られているので、最少個体数は2頭となる。前後足を一括した指趾骨は24点と多いが、中手骨および中足骨も含めてあるので、1頭が有する骨の数は64ヶであり、出土数24点では1頭分にもはるかに及ばない。

一方、歯は、骨片のように特定層に集中する傾向が少なく、分散して出土している。そして第16層から2点、第20層から3点の上顎右第3大臼歯が得られているので、これから推定される最少個体数は5頭となり、骨片の数から推定された値より大である。

後述するシカの7頭よりは少ないが、カモシカ、ツキノワグマ、ニホンザルの各1頭よりは多い。しかし、主要骨および歯の出土数が、全体として少ないので、捕獲・利用された個体の年令別、性別個体数などに言及することはできない。

表4・5 イノシシの主要骨の出土状況
(特記なき場合は左右一括)

出土層	肩甲骨	桡骨 D	尺骨	脛骨		踵骨	距骨	その他 の手根、足 根骨	指 趾骨	下頸骨	環 椎	肋 骨
				B	D							
2												
3										1		
10												
12												
14												
15												
16												
19												
20	1	2	1	1	1	1(右)	2(右)	1	18	1	2	
23								3				
攪乱層								2				
計	1	2	1	1	1	1	右2 左0	1	24	1	2	1
最少個体数							2					

表4・6 イノシシの歯の出土状況
(上顎切歯、犬歯、第1小白歯および下顎第1—第3大臼歯は出土せず)

出土層	左右	上顎歯						下顎歯						
		P ²	P ³	P ⁴	M ¹	M ²	M ³	I ₁	I ₂	I ₃	C*	P ₁	P ₂	P ₃
2	L R													
3	L R									1	1	1		
10	L R	1		1						1	1	1		
12	L R													
14	L R													
15	L R			1										
16	L R				1	2								
19	L R													
20	L R				1	3				1		1		
23	L R													
攪乱層	L R		1	1				1		1	1	1		1
計**	L R	1	1	1	1	1	5	1		3 2	1	2 1	1	1
最少個体数							5							

* いづれも雌。

** このほかに乳臼歯2点が出土している(第3層と第20層)。

イノシシの歯のうち、雄の犬歯がみられなかったことにも注目しておきたい。装飾品や利器としての利用価値が高かったものであろう（稻波、1983参考）。

8) シカ *Cervus nippon* (偶蹄目、シカ科)

骨片および歯の選択基準は、イノシシの場合と同一である。ただし、シカの場合には中手骨および中足骨がそれぞれ1本に癒合して、いわゆるcannon bone(砲骨)をなすので、長管骨と同じ扱いをした点が異なる。ツノについては、大小を問わず、同定されたすべての碎片を1点として表示してある。

主要骨および歯の出土状況は表4・7および表4・8にまとめた。

主要骨はイノシシの場合と同様に、第20層に集中しており、その他の層位には少ない。歯についても同様、第20層に集中していた。

主要骨のうち、距骨の数が最も多く、左4点、右7点がみられているので、これから推定される最少個体数は7頭になる。指趾骨の数は合計47点に達したが、前後足ならびに左右を一括した数であり、1頭当りの指趾骨合計数は24ヶであるから、約2頭分にすぎない。踵骨は合計6点みられたが、左右各3点ずつであるから、3頭分と見做される。

出土した歯の数では、上顎第2大臼歯が最も多く7点みられているが、左4点、右3点であるから、4頭分ということになる。

結局、距骨の数が最も多く、推定最少個体数は7頭とみることができる。イノシシの場合、上顎右第3大臼歯の数によって、最少個体数は5頭と推定されたが、シカの個体数はそれよりも多いとみてよい。イノシシの距骨は右側2点が得られているにすぎない（2頭分）。評価の対象とする部位によって、推定個体数はかなりちがったものとなることが明らかで、出土骨の総量が少ない場合には、この傾向は一層強まるであろう。シカ、イノシシを除くその他の哺乳類については、距骨は1点も出土していないのである。

シカの四肢長管骨（中手骨および中足骨を含む）について、骨端軟骨部ではずれた遊離骨端部（A+B）、すなわち幼若令個体（幼体と呼ぶことにする）の骨と、近遠位関節面を具えた骨片（C+D）、すなわち、骨端軟骨の閉鎖した成体の骨の数を比較すると表4・9の如くなる。左右合計数についてみると、幼体のもの9点、成体のもの33点で、前者は全数の21.4%、後者は78.6%を占め、成体の骨が圧倒的に多く、2/3以上は成体の骨である。シカの四肢長管骨において、それぞれの骨端軟骨の閉鎖が起る年令については明らかでない。

大泰司（1980）は、下顎骨および歯の特徴から、シカの性別、年令、死亡季節を査定する方法を詳述している。しかし、今回の発掘資料は、その方法を適用するためにはあまりに不十分である。今後の発掘の進展によって、十分な遺存体の得られることが期待されるので、イノシシの場合と同様、これらの点についての論議は、将来の課題としたい。

ツノの破片は25点ほど得られたが、主要骨や歯の場合と同様、その大半は第20層に集中していた。しかし、いずれも細かに破碎されているため、これから個体数や年令を推定することは困難であった。考古遺物として扱われているツノの中には、落角を加工したものが1点みられている。

9) シカとイノシシの出土量

上述の如く、最多出現部位からみたシカの最少個体数は7頭、イノシシは5頭であった。その他の哺乳類については、ヒミズ、ニホンザル、ツキノワグマ、オオカミ、アナグマ、カモシカのいずれも各1頭であった。したがって、シカおよびイノシシが、得られる肉量も多く、最も主要な狩猟対象獣であったことは疑いない。

表4・7 シカの主要骨の出土状況

・このほか第11層に1点あり。

表4・8 シカの歯の出土状況（上顎大歯は出土せず）

(特記なき場合は左右一括)

膝蓋骨	距骨	距骨	中心第4足根骨	その他の足根骨	指趾骨	下頸骨	環椎	軸椎	肋骨	ツノ
1(右)			1(右)		1					
1(左)				2	3		1			6
1	2(左)	1(右)	4(左)	4(左)	34	1	3	2	1	12
	1(右)	5(右)	2(右)		3	1			1	1
	1(右)	1(右)			1	5			1	4
1	左3 右3	左4 右7	左4 右3	8	48*	1	4	3	3	25
		7								

表4・9 シカ長管骨の年令群別出土数

	幼体	成体
橈骨	0	6
中手骨	2	8
大腿骨	0	1
脛骨	3	5
中足骨	4	13
計	9	33
	21.4%	78.6%

第15回までの発掘資料でも、シカが最も多く、ニホンザルおよびイノシシがそれに次ぐ対象獣であった（宮尾はか、1980）。

ここで、シカとイノシシの出土量比についてみると、上述の如く、今回の場合、シカ7頭に対してイノシシ5頭で、1.4:1の割合でシカが多かった。第15回までの発掘資料では、約4:1の割合でシカが多いことが推定されている（宮尾はか、1980）。シカがイノシシより多い点では一致している。南佐久郡下にシカは現在も生息しており、獣獲もある（宮尾、1984参照）。一方、イノシシは明治年代までは生息していたらしいが、近年その姿はない。シカに比較して多産であり、雑食性のイノシシが、この地域で姿を消していることは、もともと、この地域がイノシシの生息のための好適な条件を欠いていたのかもしれない。

長野県唐沢岩陰遺跡（縄文晩期～弥生後期）でも、シカはイノシシより多かったという（10:7）（金子、1967）。唐沢岩陰のある菅平高原では、明治中期頃までシカもイノシシも生息したらしいが、現在はみられない（金森・安藤、1974）。長野県小県郡深町遺跡（縄文晩期）でもシカがイノシシより多かった（25:4）（西沢、1979）。小県郡下には現在も両種がみられる（宮尾、1984参照）。

岩手県蛇王洞洞穴および千葉県西広貝塚ではイノシシとシカの数にあまりちがいがなく（金子、1967；丹羽、1982）、福井県鳥浜貝塚ではシカがイノシシよりやや多い（西田、1979；稻波、1983）。大阪府池上遺跡ではイノシシが圧倒的に多く（金子・牛沢、1980）。愛媛県上黒岩岩陰遺跡ではシカの方が多い（金子、1967）。長崎県岩下洞穴ではイノシシの方がシカよりも多い（金子、1967）。

このように、シカとイノシシの出土量比は、遺跡によって異なるが、それぞれの遺跡の立地条件や時代による量比の変化に興味がもたれる。

次に、今回の発掘で得られた骨片類の総重量は前述の如く約7kgであった。シカは7頭、イノシシは5頭分の骨または歯が検出され、シカおよびイノシシの骨片がその主部を占めていることは確かである。ところで長野県産の中型イノシシの乾燥全身骨重量は約5kg、雌シカ成獣のそれは約4kgであるから、イノシシ5頭分、シカ7頭分の骨がすべて残されているとすれば、これだけで53kgくらいの骨片がなければならない。しかるに、出土骨重量は、カモシカやツキノワグマなどのものも含めて総計約7kgにすぎないから、期待される出土量の1/8くらいが得られているにすぎないことになる。獵獲された動物の骨の大部分が逸出しているといわなければならない。

発掘された遺跡の範囲外に投棄されたもの、焼失したもの、骨角器として利用されたもの、堆積土中で風化消失したものなどの量が、きわめて大であることがうかがわれる。また、林(1980)が指摘しているように、隣接する集落の構成員も参加した集団的狩猟によって、本遺跡に持ち込まれたのが、動物体の一部分ずつにすぎなかつたというような状況も考えられるのである。

今後の発掘の進展と、骨片の精査によって、こうした問題も次第に解明できるものと期待したい。また、第15回までの発掘によって得られた骨および歯のうち、整理のすすんでいるアカネズミ、ノウサギ、イノシシについては、いずれも現生のそれより大型であったことが推定されている(宮尾ほか、1981a, b; 1982a, b)が、これらの問題についても考究を進めたいと考えている。

今回の発掘では、第15回までの発掘時に多くみられたノウサギ、リス、ムササビ、アカネズミ、テン、タヌキなどの中・小型哺乳類が出土しなかった。従前の発掘においても、早期縄文時代に属する5mに及ぶ堆積層のうち、これら中・小型哺乳類は、下半部の堆積層中に集中しており、上半部には殆どみられず、シカおよびイノシシだけになる傾向があった(宮尾ほか、1980)。今回の堆積層は縄文早期から中期にわたっている。すなわち、早期も終りに近い時代を中心とする文化遺跡であると考えられるので、先にみられた傾向が、引き続いて現われているとみてよいであろう。大型獣のシカおよびイノシシのみを狩猟の対象としていたのである。

縄文時代でも、新しい時期になると、中・小型獣の出土が減少することの意義については、肉量と人口とのかかわりから、効率の大きい大型獣をもっぱら狩猟対象とするようになったのではないか、との金子(1983)の論議がある。

謝 詞

植物遺存体のうち、エゾエノキ核果の同定をいただいた大阪市立大学理学部生物学教室の南木謙彦氏ならびに御世話を信州大学農学部の鈴木茂忠講師、貝類の同定をお願いした日本貝類学会会員、飯島国昭氏に厚く御礼申し上げる。

要 約

1983年10月25日より11月6日にわたって行われた長野県南佐久郡北相木村柄原岩蔭遺跡第16回発掘によって得られた動植物遺存体の出土状況は次の如くであった。発掘された堆積土は約8.3m³で、縄文時代早期から中期にわたる文化遺物を包含していた。

1) 植物遺存体としては、エゾエノキ、コナラおよびオニグルミの核果または堅果の殻片が少量得られたにすぎない。

- 2) 陸貝類ではツムガタギセル、キセルガイモドキの2種、淡水貝類でカワシンジュがイの貝殻が少量得られた。
- 3) 破碎された骨片は総計約7kg出土したが、第20層（縄文早期）に集中しており、その他の層位にはきわめて少なかった。
- 4) 両生類ではヒキガエルの骨片が少量得られた。
- 5) 鳥類では2~3種を含む小・中型鳥類の骨片がごく少量得られているが、種名は同定できていない。
- 6) 出土哺乳類の種類と最少個体数は、ヒミズ(1)、ニホンザル(1)、ツキノワグマ(1)、オオカミ(1)、アナグマ(1)、カモシカ(1)、イノシシ(5)、シカ(7)で、イノシシとシカが主体であった。
- 7) 最少個体数から期待される骨重量に比し、出土骨重量は著しく少ない。
- 8) ノウサギ、リス、ムササビ、テン、タヌキ、キツネなどを欠き、出土哺乳類ファウナは貧弱であった。シカおよびイノシシへの依存度が強かったものと思われる。

引用文献

- Godfrey, G. and P. Crowcroft (1960): *The Life of the Mole*. Museum Press, London.
- 林謙作 (1980): 貝ノ花貝塚のシカ・イノシシ遺体. 北方文化研究, 13: 75-134.
- 平瀬信太郎・黒田徳米 (1959): 改訂増補日本動物図鑑, 20版. 北説館, 東京, p.1238.
- 稻波素子 (1983): 島浜貝塚のシカ、イノシシ遺体. 島浜貝塚、縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査, 3. 福井県教育委員会・若狭歴史民俗資料館, pp. 65-81.
- 金森正臣・安藤裕 (1974): 背平附近の哺乳類相. 東京教育大学音平生物実験所研究報告, No.6: 67-69.
- 金子浩昌 (1967): 洞穴遺跡出土の動物遺存体. 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編: 日本の洞穴遺跡. 平凡社, 東京, pp. 424-451.
- 金子浩昌 (1983): 狩猟対象と技術. 加藤晋平ほか編, 縄文文化の研究, 2. 生業. 雄山閣, 東京, pp. 78-102.
- 金子浩昌・牛津百合子 (1980): 池上遺跡出土の動物遺存体. 池上・四ツ池遺跡, 自然遺物編. 大阪文化財センター, pp. 9-26.
- 北村四郎 (1959): 原色日本樹木図鑑. 保育社, 大阪.
- 粉川昭平 (1963): 縄文人の主な植物食糧. 加藤晋平ほか編, 縄文文化の研究, 2. 生業. 雄山閣, 東京, pp. 42-49.
- 牧野富太郎 (1977): 牧野新日本植物図鑑, 第33版. 北説館, 東京.
- 宮尾嶽雄 (1983): 愛知県西春日井郡西春町野生動物調査報告書. 西春町総務部企画課.
- 宮尾嶽雄 (1984): 長野県におけるホンシュウジカの分布に関するノート. 青木正博編, 70年代信州自然保護運動. 鬼灯画譜, 長野, pp. 25-39.
- 宮尾嶽雄・西沢寿晃・鈴木茂忠 (1980): 早期縄文時代長野県橋原岩塗遺跡出土の哺乳動物. 第1報. 出土哺乳動物相. 哺乳動物学雑誌, 8: 181-188.
- 宮尾嶽雄・酒井英一・西沢寿晃 (1981, a): 同上. 第2報. アカネズミ下顎大臼歯の大きさ. 歯科基礎医学会雑誌, 23: 141-146.
- 宮尾嶽雄・子安和弘・西沢寿晃 (1981, b): 早期縄文時代出土イノシシの頬歯の大きさ. 成長, 20: 234-235.
- 宮尾嶽雄・西沢寿晃・子安和弘 (1982, a): 早期縄文時代長野県橋原岩塗遺跡出土の哺乳動物. 第4報. /

ウサギ四肢骨の大きさ。成長, 21: 20—28。

宮尾嶽雄・西沢寿晃・子安和弘 (1982, b) : 早期縄文時代出土ノウサギの頸歯の大きさ。成長, 21: 97—99。
中村一雄 (1980) : 長野県魚貝図鑑。信濃毎日新聞社, 長野, p. 117.

西田正規 (1979, a) : 植物遺体。鳥浜貝塚、縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査, 1. 福井県教育委員会,
pp. 158—161.

西田正規 (1979, b) : 動物遺体。同上, pp. 164—166

西沢寿晃 (1979) : 深町遺跡出土骨類について。深町遺跡調査報告書, 長野県小県郡丸子町教育委員会, pp.
121—126.

西沢寿晃 (1982) : 栃原岩陰遺跡。長野県史, 考古資料編, 主要遺跡(北・東信), pp. 559—584.

西沢寿晃・宮尾嶽雄 (1981) : 早期縄文時代長野県栃原岩陰遺跡出土の哺乳動物。第3報、ニホンゲルの遺
存骨。長野県考古学会誌, No. 41: 1—10.

丹羽百合子 (1982) : 晩期土器及び骨の包含地点の動物。上総国分寺台遺跡調査団・千葉県市原市教育委員
会編。上総国分寺台発掘調査概報, pp. 55—56.

大泰司紀之 (1980) : 遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年令・死亡季節検定法。考古学と自然科学,
No. 13: 51—74.

齊藤弘吉 (1963) : 犬科動物骨格計測法。自刊。

酒説仲男 (1961) : 日本縄文石器時代食料統説。土曜会, 京都。

渡辺誠 (1975) : 縄文時代の植物食。雄山閣, 東京。

ま　と　め

柄原岩陰遺跡ではこれまで、信州大学医学部を中心に、昭和40年から53年にかけて15回にわたって発掘調査が行われ、縄文時代草創期～早期の住居あるいはキャンプ、そして墓地として利用された遺跡として広く知られるようになった。

周知のように、人骨の出土数は成人8体、小児2体、新生児2体の計12体に及び、いずれの人骨とも遺存状態がよく、とくに1号人骨は、顔面部もほぼ完全に残す成人男性の頭蓋骨で、貴重な資料として着目され、北相木人の名で呼ばれるようになった。また11・12号の小児骨は住居中央の石匂炉の炉端での平穏な生活の間に、突然に襲った落盤事故のために不慮の死をとげた例として注目をあびた。

一方、石組炉61例、焼土63例など、生活遺構が数多く検出されて、縄文時代人の日常生活の研究に新しい資料を加えるとともに、これらの遺構に伴って多量の土器・骨角器がある程度層位的に検出されて、草創期～早期の土器群の型式学的・編年的研究に貴重な資料となり、また石器・骨角器などの道具類は生産活動の具体相を知る有力な手がかりとなった。

ところで、これまでの調査をふり返ってみると、発掘は岩陰の西南側の部分で繼續されてきた。はじめ昭和40年に、この部分から人骨が発見されたのが調査のきっかけとなったからであり。たしかに現地に立ってみると、この部分は日当たりがよくまた庇が突き出しており、居住するための場所としては最良の岩陰であったことは容易にうなづけるところである。しかし、そこは岩陰全体の規模からみれば五分の一にも満たない範囲であり、岩陰の大部分はまだ調査の手がとどかず残されているわけである。それに諸種の事情で、15回の調査の総括は行われないまま歳月が過ぎ去った。そこであらためて、これまでの貴重な成果をひきつぎ、さらに柄原岩陰での縄文時代人の生活の時間的、空間的ひろがりと、その全体像をより的確に把握する目的で新しい調査の計画が立てられるに至った。

今回はその手はじめに、これまでの発掘区に隣接する東北側、つまり岩陰全体からみればほぼ中央にあたる部分に発掘区を設定した。発掘区は東西1.6m、南北4.6m、面積は約7平方mの範囲内として、地表面から最も深いところで2.6mまで掘り下げた。取り除いた堆積物の量は10立方m以下で、必ずしも大がかりな発掘とはいえないが、複雑に堆積する岩陰内の層序を23層に識別できたのは、まず大きな成果といってよいであろう。その間に、配石遺構2、焼土5も検出された。なお、15次までの調査では縄文時代の遺構・遺物は草創期と早期に限られていたが、今回はさらに前期から中期末に至る遺物及びそれらを包含する層も確かめられた。

第15次までの成果では、縄文時代草創期～早期の土器文化は大別して3期に分けられるとされてきた。すなわち、表裏縄文・表裏撚糸文・斜縄文土器を主とする下部、押型文土器を主とする中部、沈線文・条痕文・押引文を主とする上部の3時期である。

今次の発掘では、人工遺物・自然遺物ともに第20層から最も豊富に出土し、新しい資料を提供した。この層は厚いところで、約30cmあり、出土土器は早期前半と考えられる撚糸文土器と押型文土器がごく少数例と縄文前期の黒浜式に比定される土器1点を除けば、他はすべて早期後半～末葉にかけての土器である。内訳をみると、条痕文を主とする土器が最も量が多く、それらの多

くは内外面ともに条痕文を施し、あるものではその上にさらに外面に縄文を加えるか擦痕文を加えている。それらについて、沈線文を主とする田戸下層式、鶴ヶ島台式あるいは茅山下層式に比定される土器が認められた。これら条痕文を主とする土器と沈線文を主とする土器がここでは圧倒的多数を占め、しかも後世に櫻乱を受けた痕跡も認められないことから、20層は早期末頃の堆積と判断された。20層の下位にあたる23層も、押型文土器と沈線文を主とする土器を欠く点を除けば、出土遺物はこれとはほぼ同じ内容である。20層とはあまり時間的距離のない時期の包含層とみてよいであろう。

なお、15次までの調査で多くの出土例の知られる縄文時代草創期の表裏縄文土器の類例は20層と23層にもみられるが、今次の場合は縄文の筋が大きめであることとともに、胎土に石英類を含む特徴は、同時に出土する他の早期後半土器に類似することなどから、草創期のものと区別されるものと判断された。

20層と23層が早期末を降らなることは、これらの層を覆う遺物包含層——19層、16層および14層——からの出土土器が早期後半～末葉のもののみであることからも証明できるであろう。さらに上層の11層から3層までの間では、早期末から前期までの土器が検出されている。

最上層に近い2層では、同じく早期・前期の土器が少量ずつ認められると同時に、この層の中に遺存する赤土面上に中期前半の土器が検出され、さらに中期末の骨利V式土器も合わせて発掘された。これら各時期の土器は混在した状態で発見されており、しかも資料不足という事実は覆い得ないけれども、前回までの調査では全く認められなかった前期・中期の資料も今後の調査の積み重ねによってさらに集積されていくであろう。

発掘された区域の土壤はすべて、動植物遺存体を検出するために水洗による選別が行われた。その結果収集された動物の骨片は総計約7kgに達している。その内訳は哺乳動物の骨片がほとんどで、そのうちの過半数は20層と23層に集中しており他の層位からの出土量はきわめて少なく、しかもシカとイノシシが圧倒的に多いことが確認された。縄文早期の頭にシカとイノシシへの依存度が殊の外強かったことを物語っている。因みに、骨角牙製品もまたすべて、20層および23層から出土している。

植物遺存体は3種でごく少量にすぎなかつたが、同じく20層からエゾエノキ板片が26点検出されたのが注目される。エゾエノキは現在、北海道から九州までの温帯域に分布するものであるが、福井県の島浜貝塚をはじめ各地の縄文時代の貝塚から報告例があり、当時の植生の中ではかなり普遍的なものであったことを示すと同時に、食料源の一つとして活用されていたことを知ることができる。

ともあれ、今回の第16次調査は、短かい発掘期間の中の小範囲に限られたものではあったが、それらの制約の中で、岩陰遺跡特有の複雑に入り組んだ堆積層や遺物包含層を23層に識別し、その中に遺存する石組み構造や焼土を検出した。人工遺物の点からは、20層と23層で、縄文時代早期後半～末葉の土器の組成内容をかなり詳細に把握でき、この地域の型式学的研究と編年研究に資料を提供し、問題点を提起した。

今回の発掘区はまだ完掘できたわけではなく、今後同一区域内の調査を継続することによってさらに早期前葉から草創期へと遡ることができるであろう。それらの成果を積み重ねることによって、15回までの成果と関連づけて総括することが可能になると思われる。また、今回は人骨こそ出土しなかったものの縄文時代早期の動植物遺存体の歴史的意義の一端も把握でき、考古学的調査とならんで動植物学的調査の側からも、今後への新たな一步を踏み出したわけである。



a 遺跡遠景（東南方向から）



b 遺跡近景（東南方向から）

図版 2



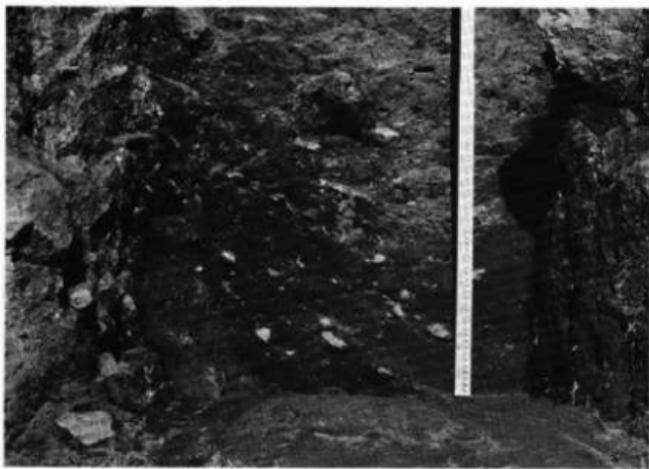
a 発掘調査風景



b 動植物遺存体選別作業風景



a トレンチ北壁断面



b トレンチ北壁断面（部分）

図版 4



a I 号 炉 跡 (直上から)



b I 号 炉 跡 (東南方向から)



a 頭骨出土狀態



b 石器出土狀態

図版 6



a 鹿角製品出土状態 (1)



b 鹿角製品出土状態 (2)



a 土器・鹿角出土状態



b 鹿角出土状態

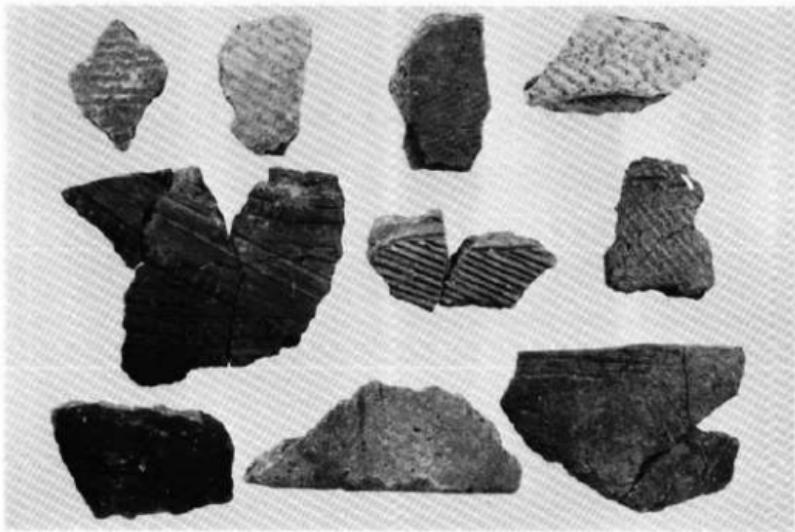
図版 8



a 第1層出土土器



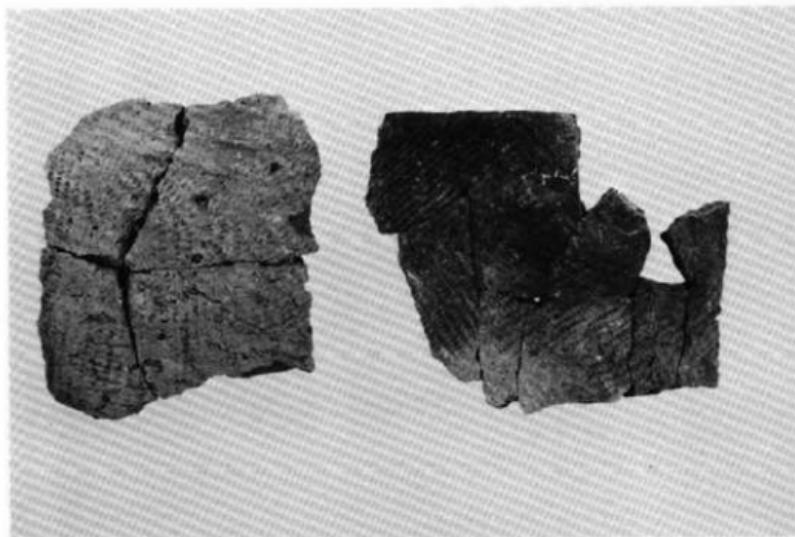
b 第2層出土土器 (1)



c 第2層出土土器 (2)

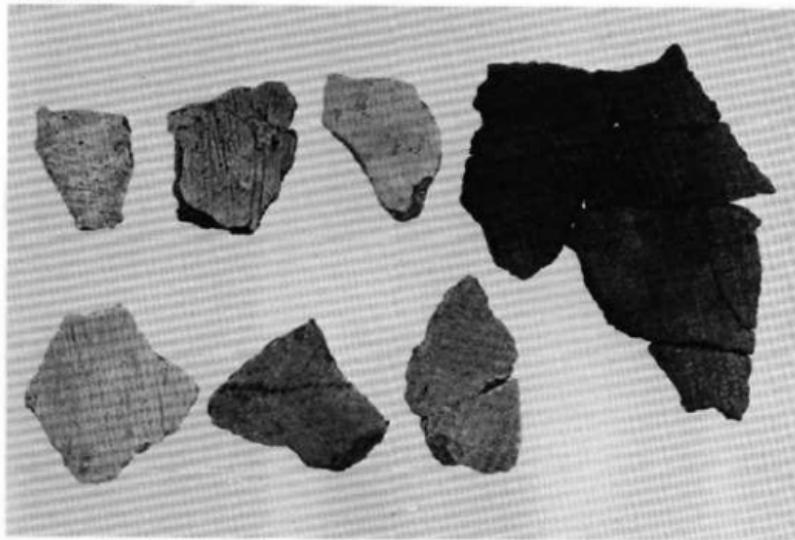


a 第3・4・8・9・10層出土土器

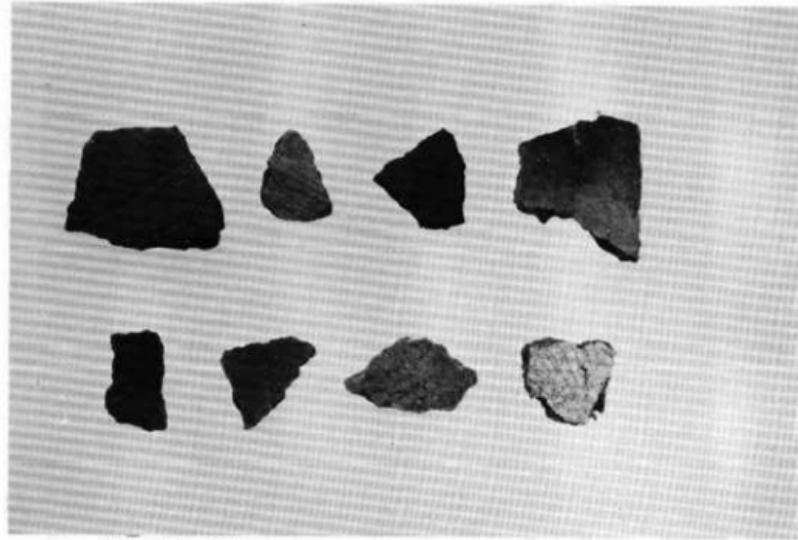


b 第10層出土土器

図版 10



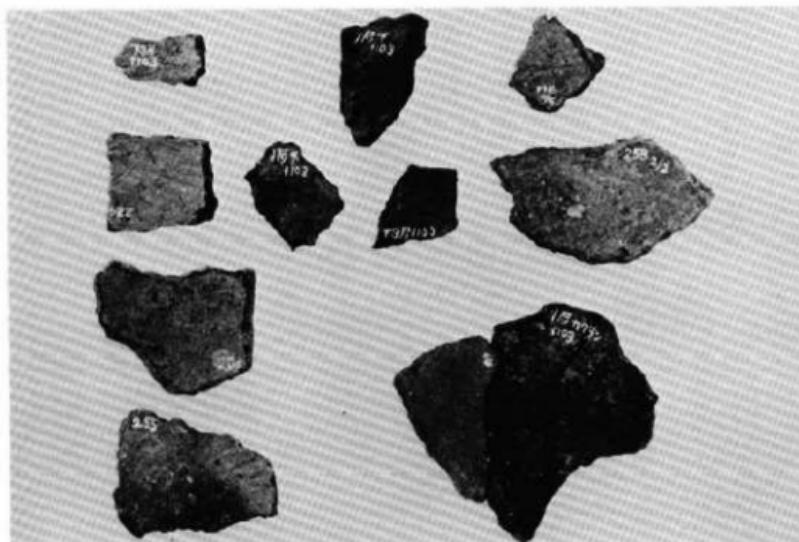
a 第11・14層出土土器



b 第16層出土土器

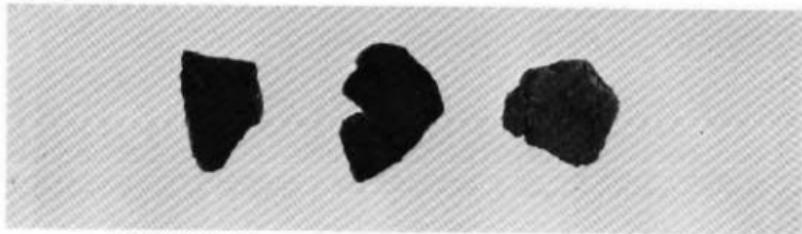


a 第19層出土土器



b 同上裏面

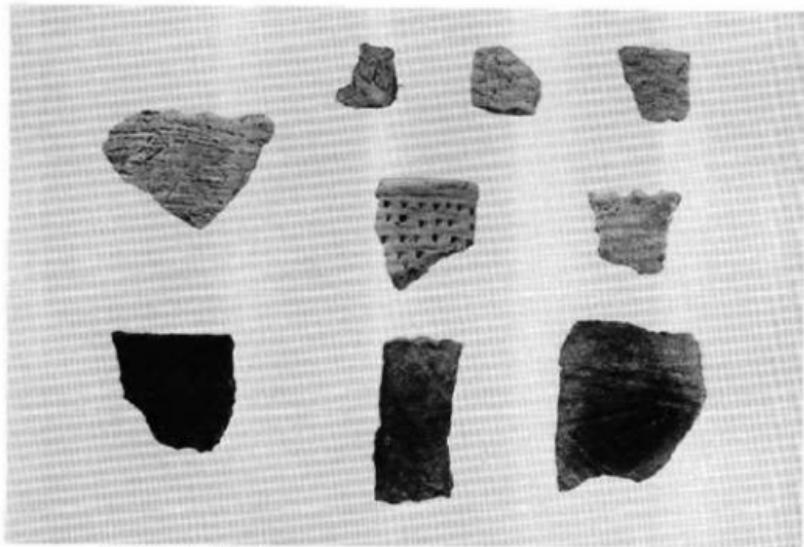
圖版 12



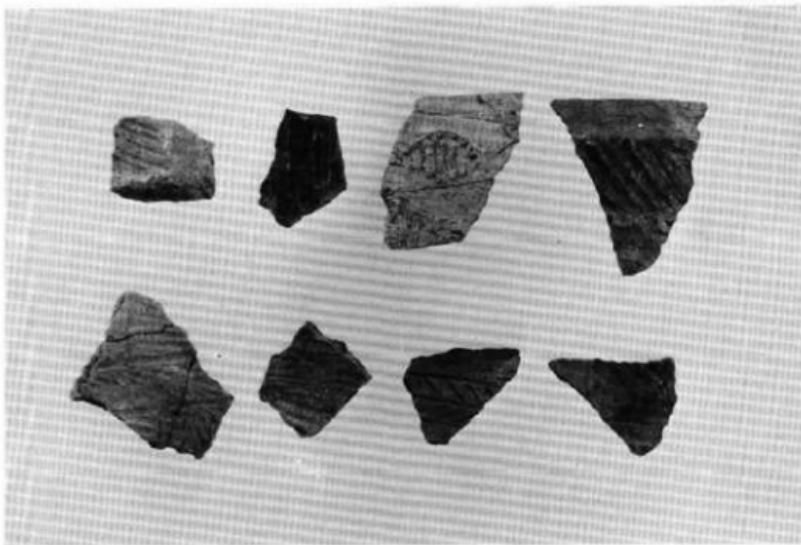
a I号炉跡内出土土器



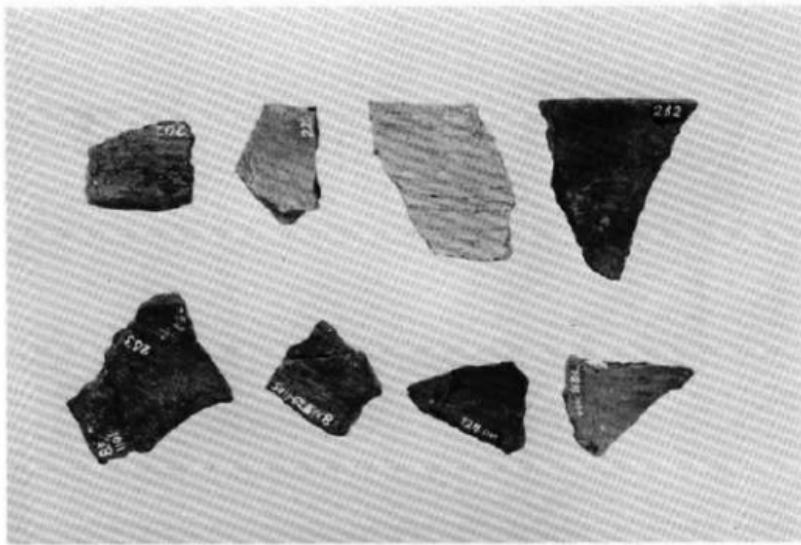
b 同上裏面



c 第20層出土土器(I)

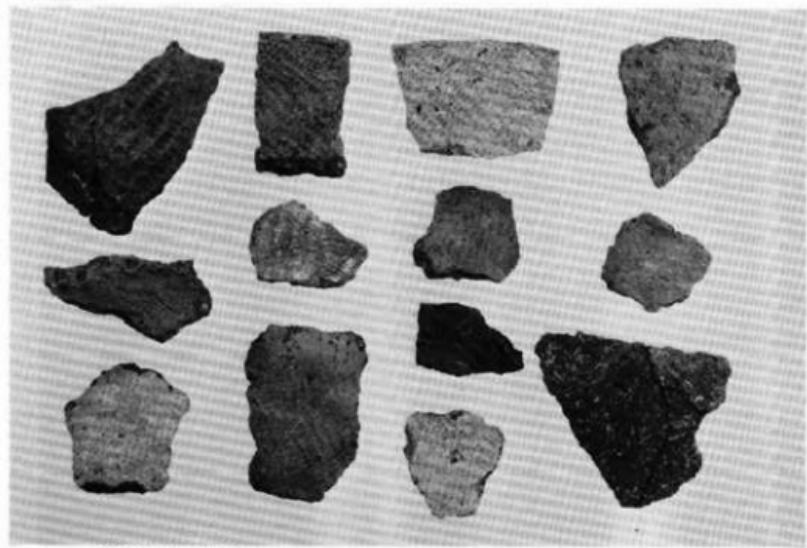


a 第20層出土土器(2)

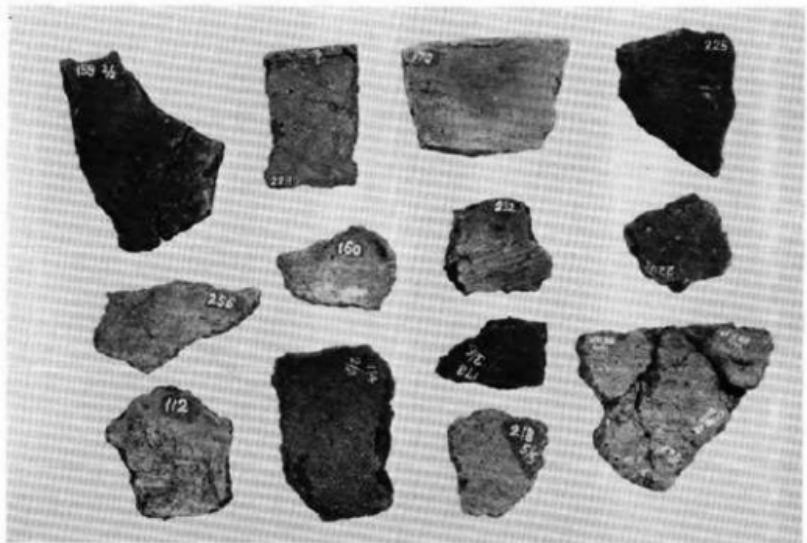


b 同上裏面

図版 14



a 第20層出土土器(3)



b 同上裏面



a 第20層出土土器(4)



b 同上裏面

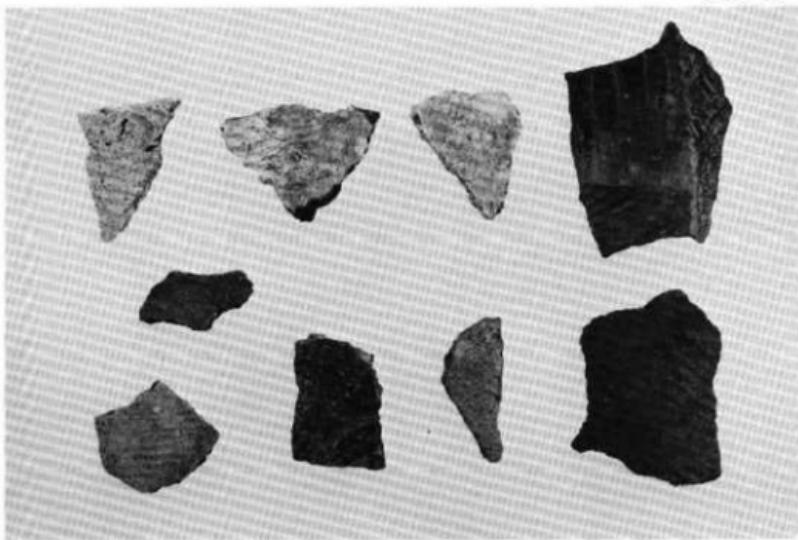
図版 16



a 第23層出土土器



b 同上裏面

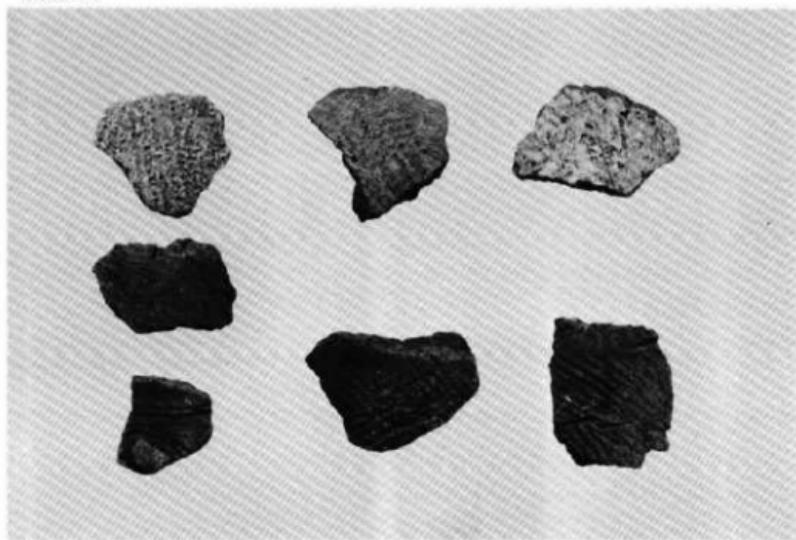


a 搗乱層出土土器 (I)

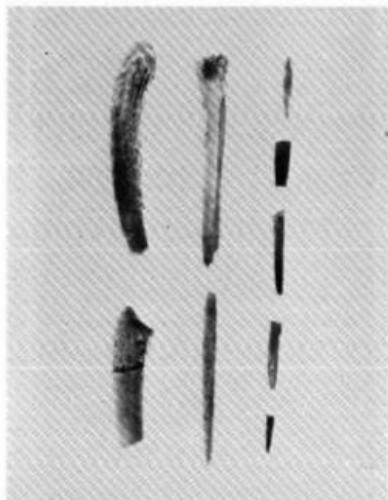


b 同上裏面

図版 18



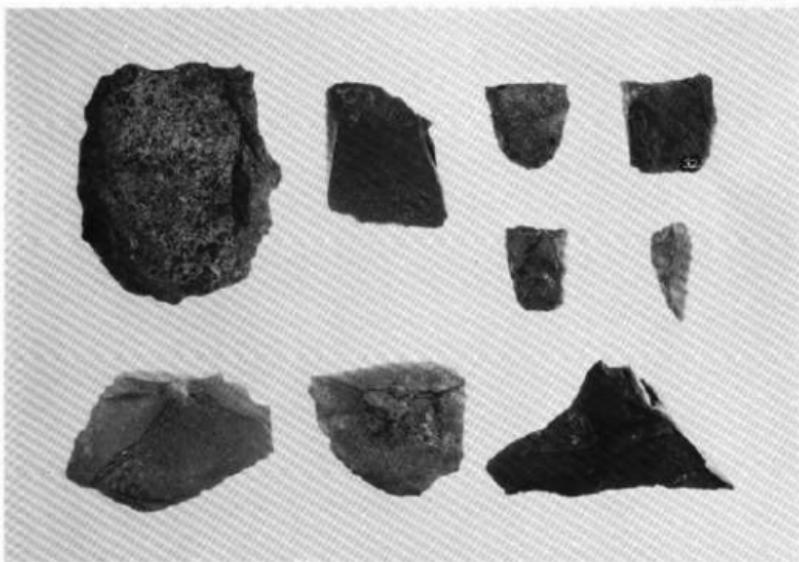
a 掛乱層出土土器 (2)



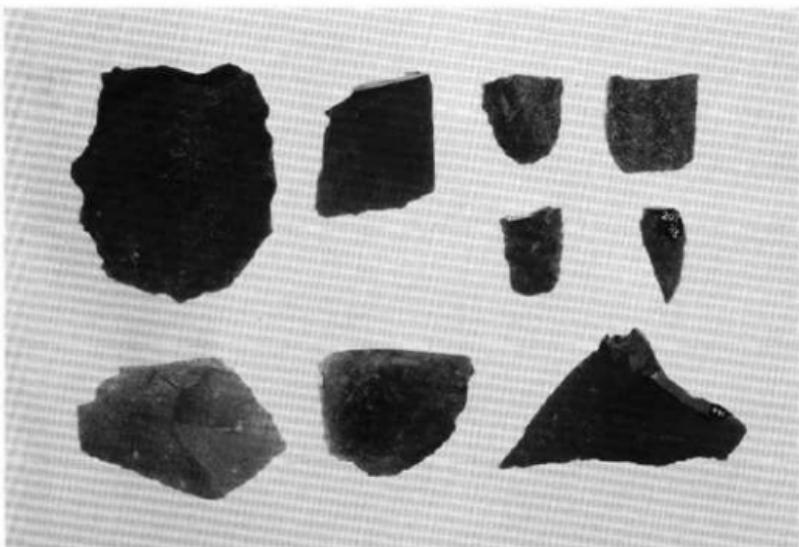
b 骨角牙製品



c 鹿 角

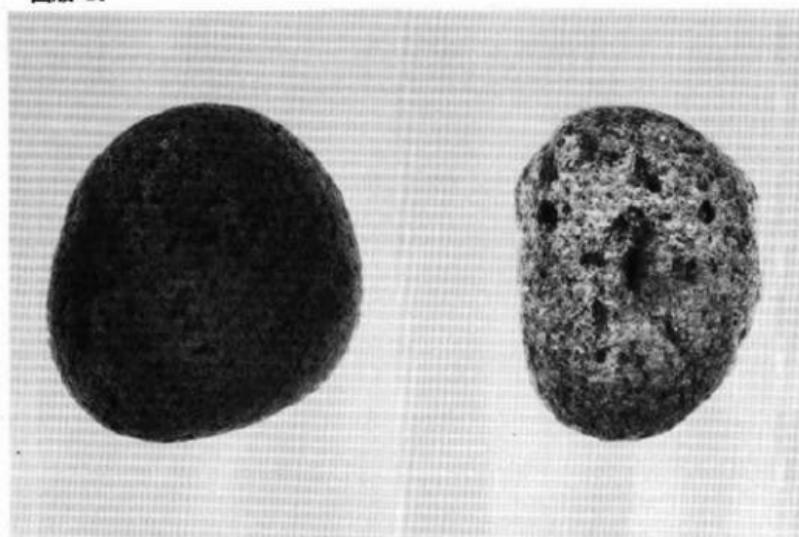


a 出土石器(I)

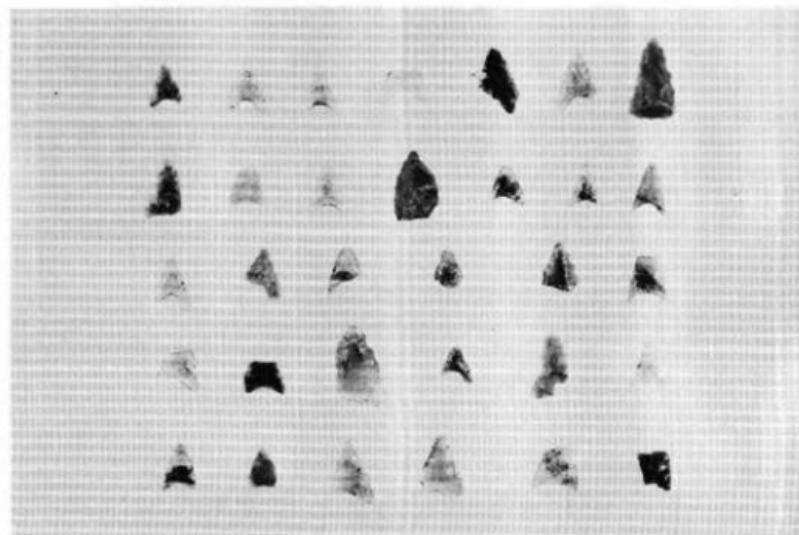


b 同上裏面

圖版 20



a 出土石器 (2)——敲石(左)・凹石(右)



b 出土石器 (3)——石 鐛

柄原岩陰遺跡発掘調査報告書 一昭和58年度一

昭和59年3月26日印刷

昭和59年3月31日発行

発行 長野県北相木村教育委員会

印刷 信教印刷株式会社

長野市旭町1098
